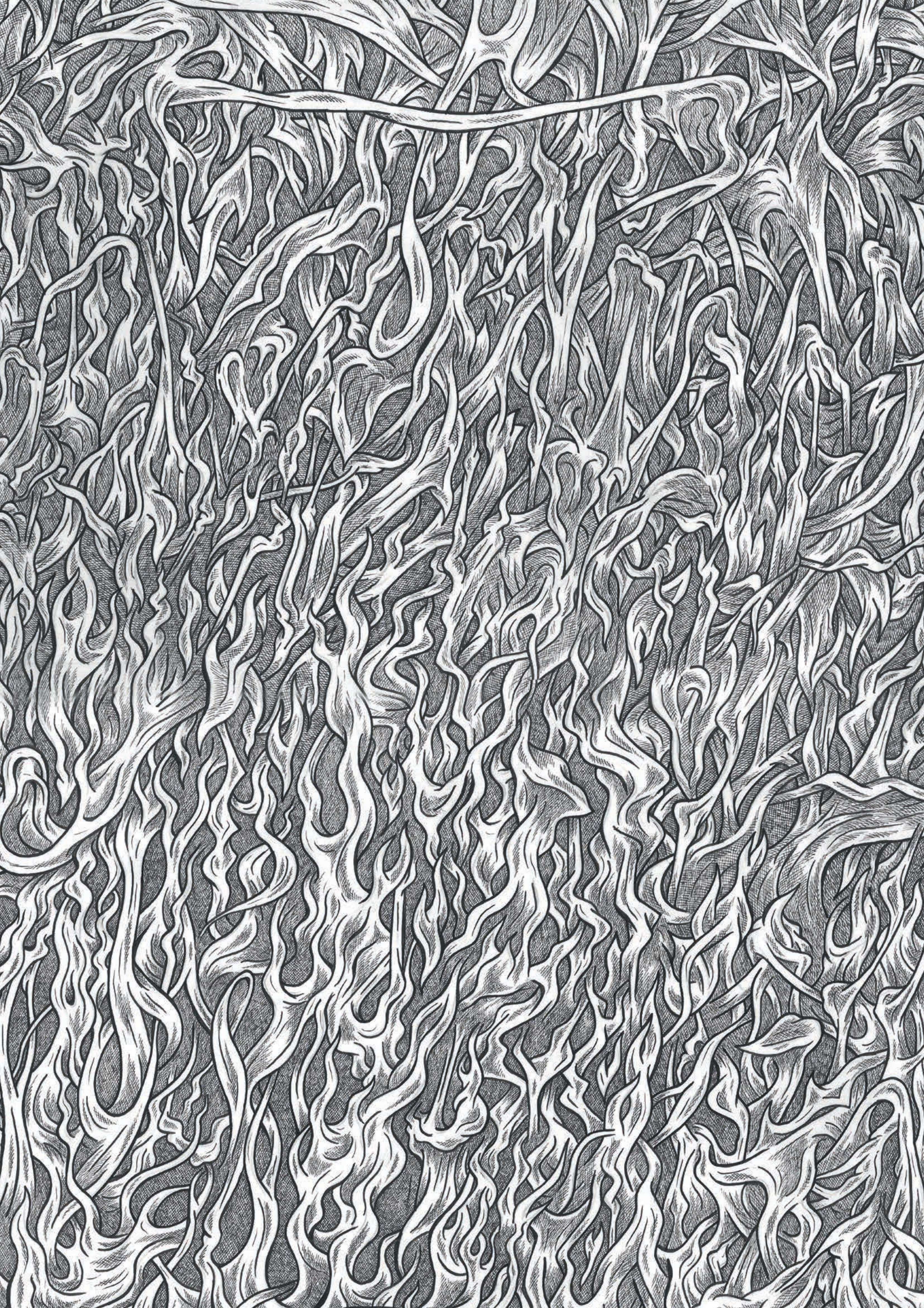
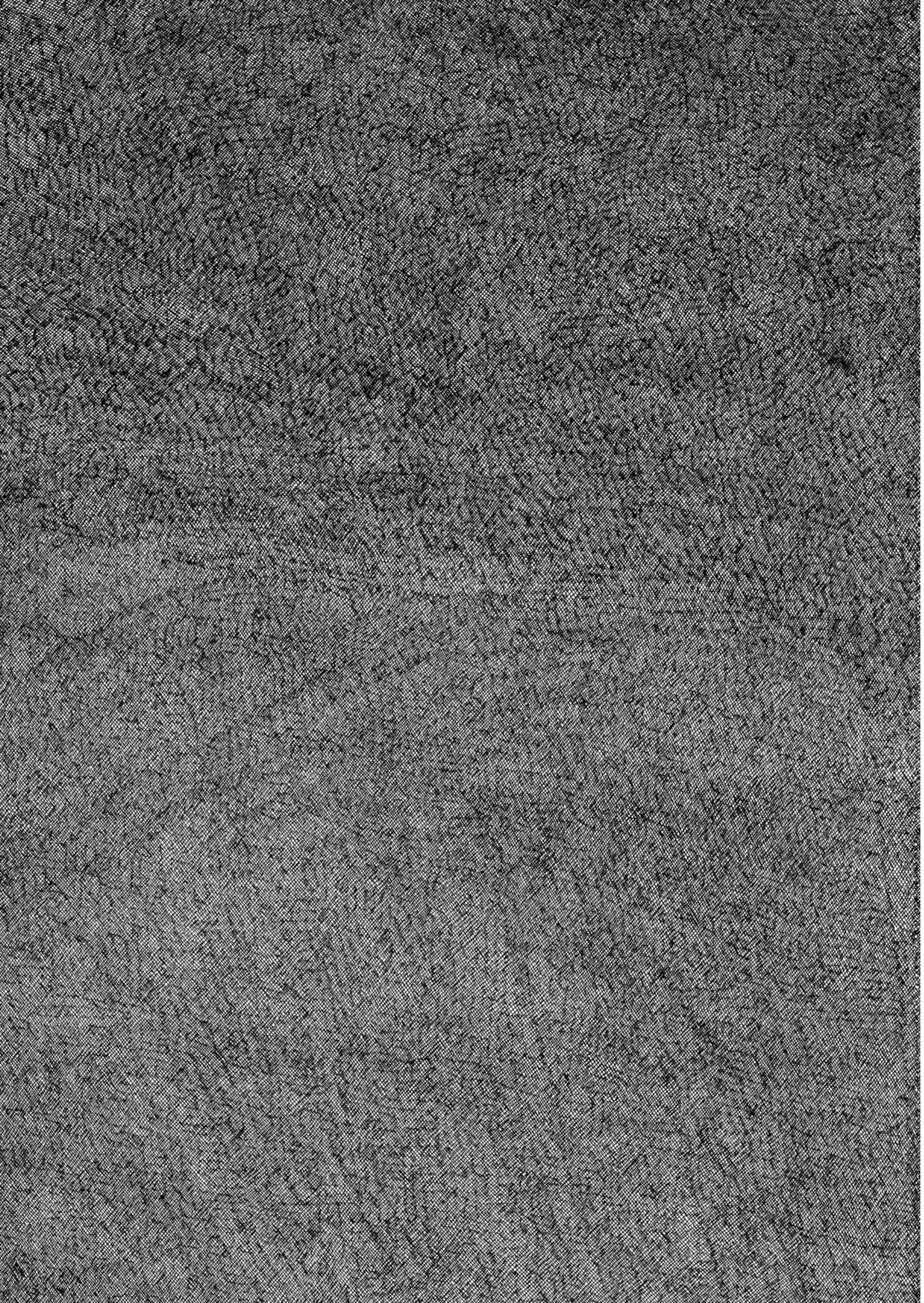
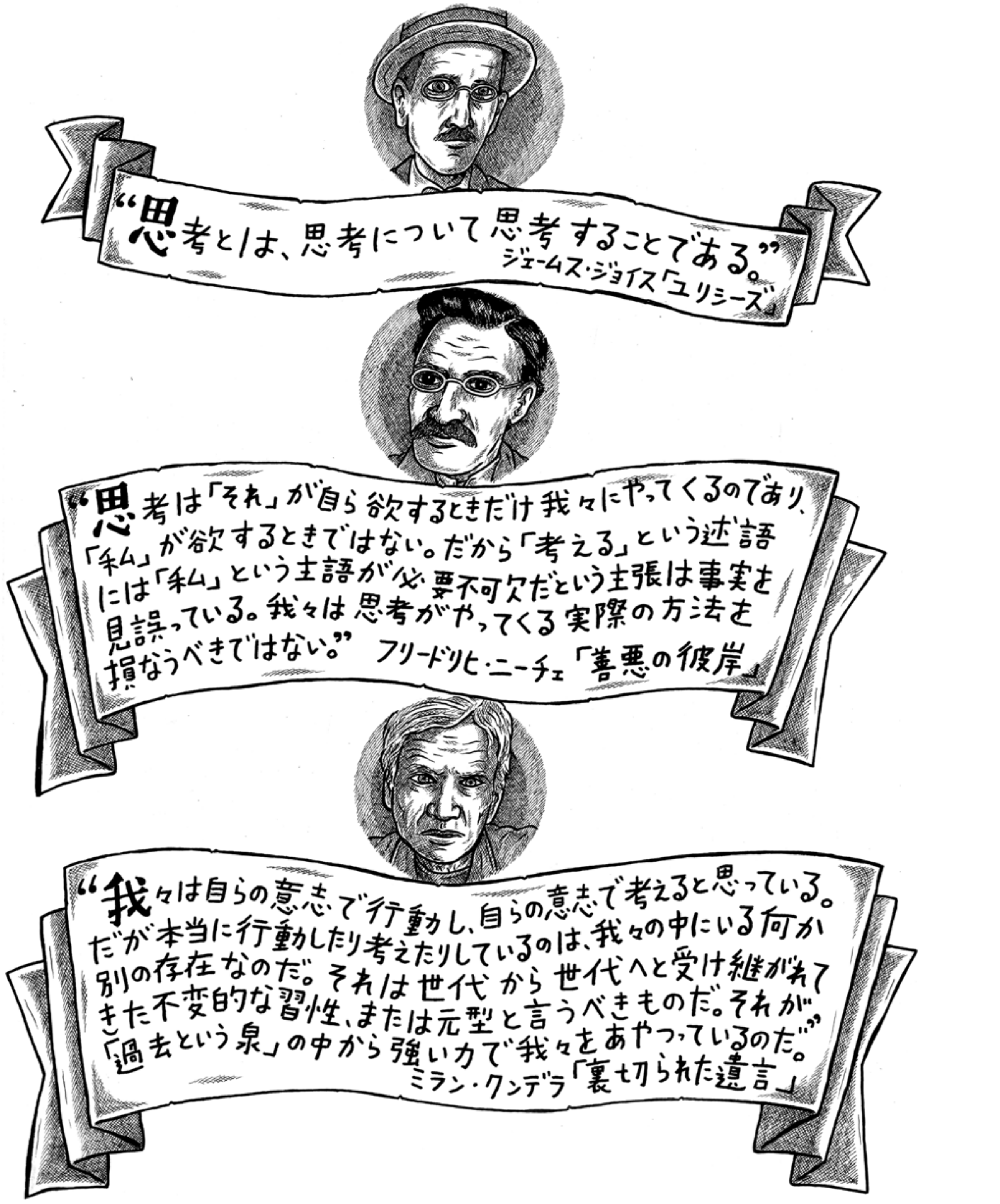





“思考とは、思考について思考することである。”
ジェームス・ジョイス「ユリシーズ」
“思考は「それ」が自ら欲するときだけ我々にやってくるのであり、「私」が欲するときではない。だから「考える」という述語には「私」という主語が必要不可欠だという主張は事実を見誤っている。我々は思考がやってくる実際の方法を損なうべきではない。”
フリードリヒ・ニーチェ「善悪の彼岸」
“我々は自らの意志で行動し、自らの意志で考えると思っている。だが本当に行動したり考えたりしているのは、我々の中にいる何か別の存在なのだ。それは世代から世代へと受け継がれてきた不変的な習性、または元型と言うべきものだ。それが「過去という泉」の中から強い力で我々をあやっているのだ。”
ミラン・クンデラ「裏切られた遺言」

ルビー・エスキモー・グレイ
に捧ぐ

ディス・ドッグ・バーキング

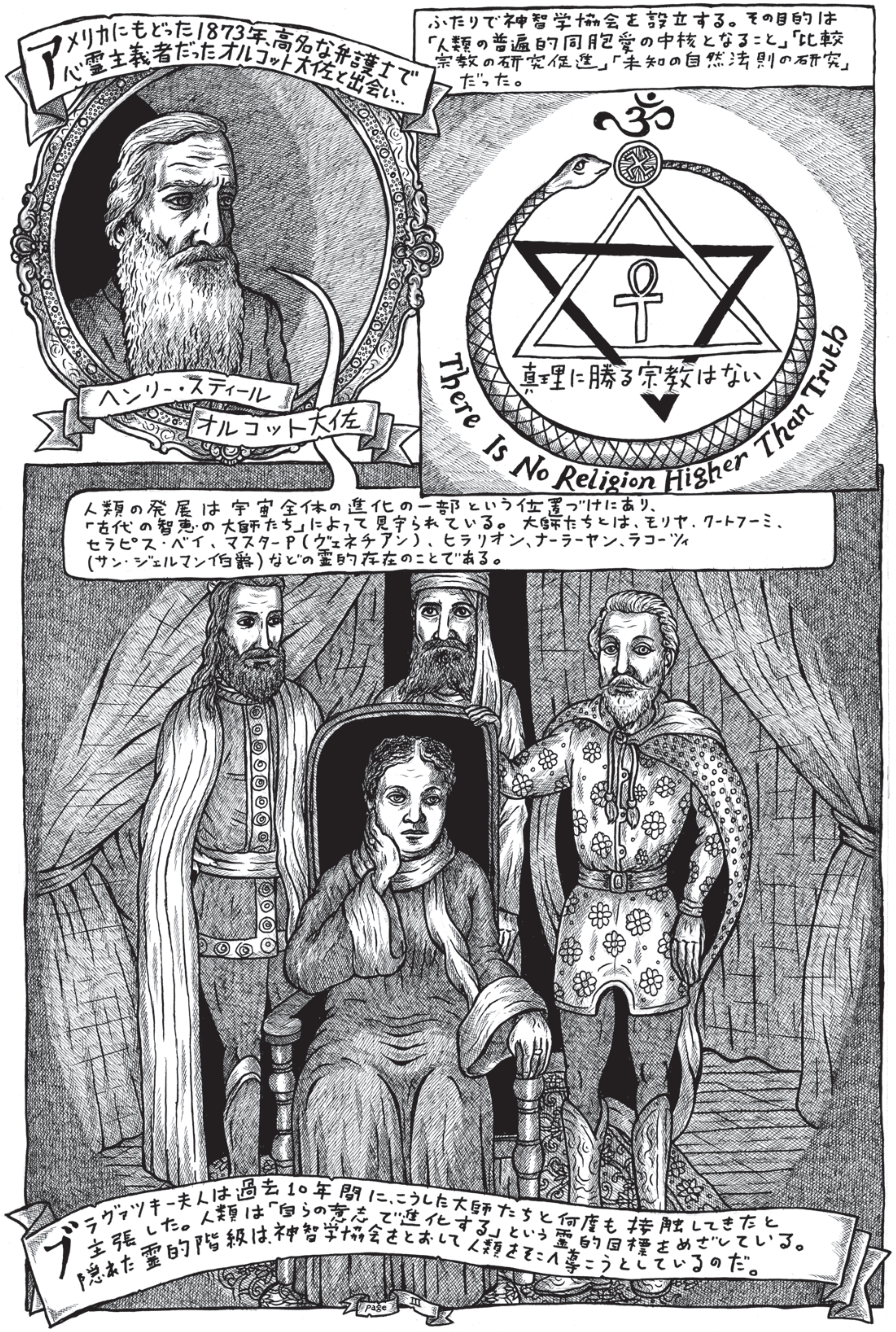
U.G.クリシュナムルティの奇妙な物語

あきらめてしまったすべての人々のために

ニコラス・C・グレイ ＆ ジェームス・ファーリー
訳：高野淳壱郎

INTRODUCTION
1842年、母を亡くした14歳のヘレナ・ペトロヴナ・フォン・ハーンは、ロシア南部のサラトフに住む祖父母のもとにあずけられた。
彼女のお気に入りの場所は祖母の書庫だった。そこには中世のオカルトや魔術に関する本がたくさんあった。
page I

彼女は独り立ちするため、17歳で結婚する。
ニキフォル
ブラヴァツキー
アルメニア・エリヴァン副知事
年上の中年男
だがブラヴァツキー夫人となった数日後には別居。
コンスタンティノープルでロシア人のある伯爵夫人と出会ったのをきっかけに、世界中を旅することになる。
EGYPT
SYRIA
MEXICO
TURKEY
INDIA
1867年、ブラヴァツキー夫人はイタリア統一運動の英雄ガリバルディのもと、フランスの教皇軍と戦った。だがこのメンターナの戦いで重傷を負ってしまう……。
ケガから回復したあと、一説によると彼女はチベットをおとずれ、そこに数年間滞在して教えを受けたという。
タシルンポ寺とその座主……。
第8世
パンチェン・ラマ
page II



アメリカにもどった1873年、高名な弁護士で心霊主義者だったオルコット大佐と出会い…
ヘンリー・スティール
オルコット大佐
ふたりで神智学協会を設立する。その目的は「人類の普遍的同胞愛の中核となること」「比較宗教の研究促進」「未知の自然法則の研究」だった。
真理に勝る宗教はない
There Is No Religion Higher Than Truth
人類の発展は宇宙全体の進化の一部という位置づけにあり、「古代の智恵の大師たち」によって見守られている。大師たちとは、モリヤ、クートフーミ、セラピス・ベイ、マスターP（ヴェネチアン）、ヒラリオン、ナーラーヤン、ラコーツィ（サン・ジェルマン伯爵）などの霊的存在のことである。
ブラヴァツキー夫人は過去10年間に、こうした大師たちと何度も接触してきたと主張した。人類は「自らの意志で進化する」という霊的目標をめざしている。隠れた霊的階級は、神智学協会をとおして人類をそこへ導こうとしているのだ。
page III

1878年、オルコット大佐とブラヴァツキー夫人はインドに渡り、マドラス郊外のアディヤールに協会の国際本部を設立した。
死去する直前の1891年、ブラヴァツキー夫人は、神智学協会の第一目的は「世界教師」到来の準備をすることだと説いた。
世界教師とは高位の霊的存在である救世主の生まれ変わりであり、地球上にくりかえし姿を現しては人類の進化を導くのである。
1907年、ブラヴァツキー夫人の弟子であり、政治活動家で著述家だった英国人…
アニー・ベサント
…が神智学協会会長の座を引き継いだ。それを支援したのは、イングランド国教会の元牧師であり、神秘主義者であるC・W・レッドビータだった。

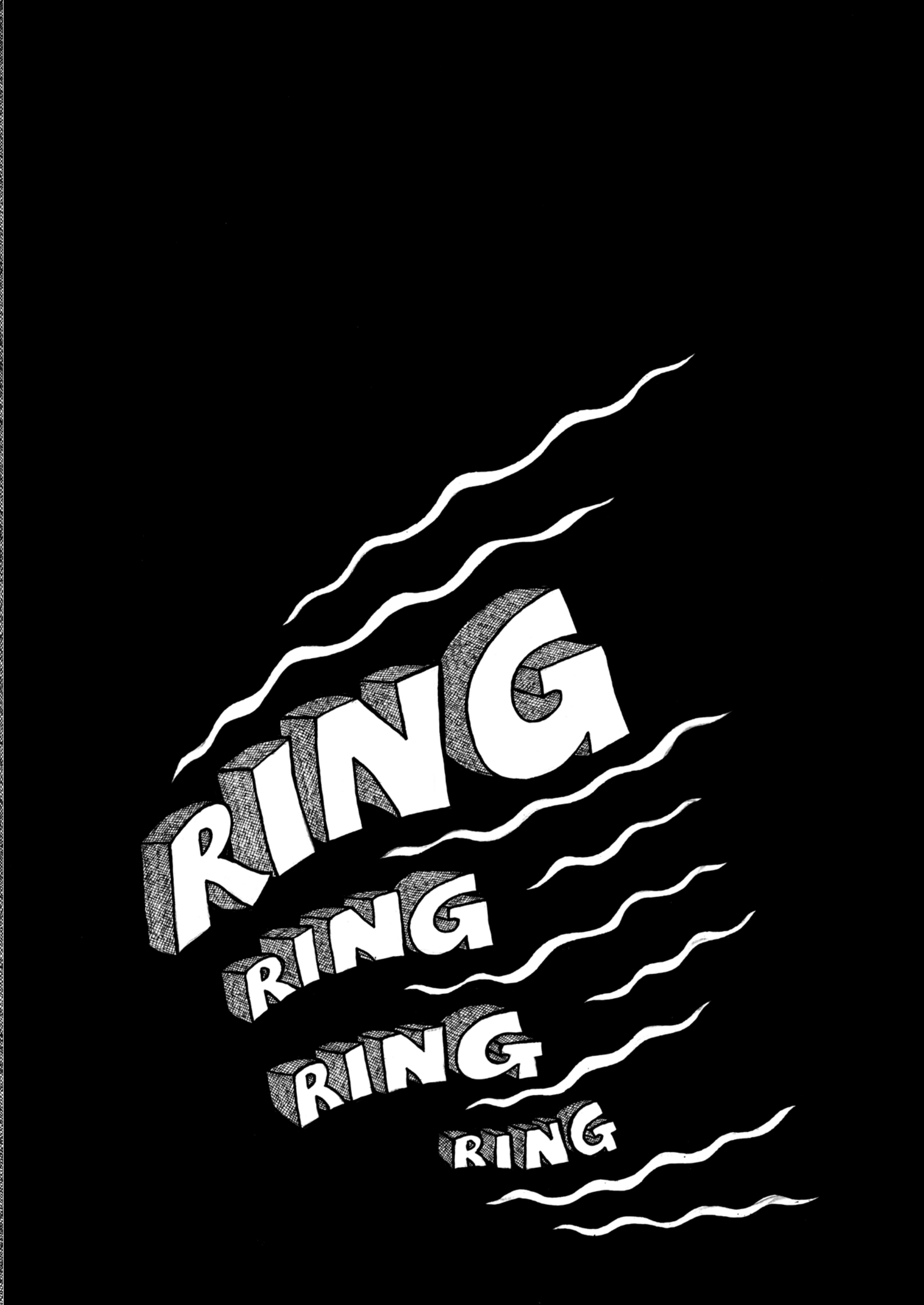
レッドビータは1909年、「かつてないすばらしいオーラ」を持った14歳の少年と出会う。こうして若いジッドゥ・クリシュナムルティは、レッドビータとアニー・ベサントの手厚い加護のもと、将来に待望される「世界教師」の器となるための教育を受けることになる。
J.クリシュナムルティは1920年代、側近たちをつれて世界各国を訪問した。彼の存在はマスコミや上流階級の注目を浴びる。20年代末、彼には多くの神智学協会会員を含む6万人の信奉者がいた。

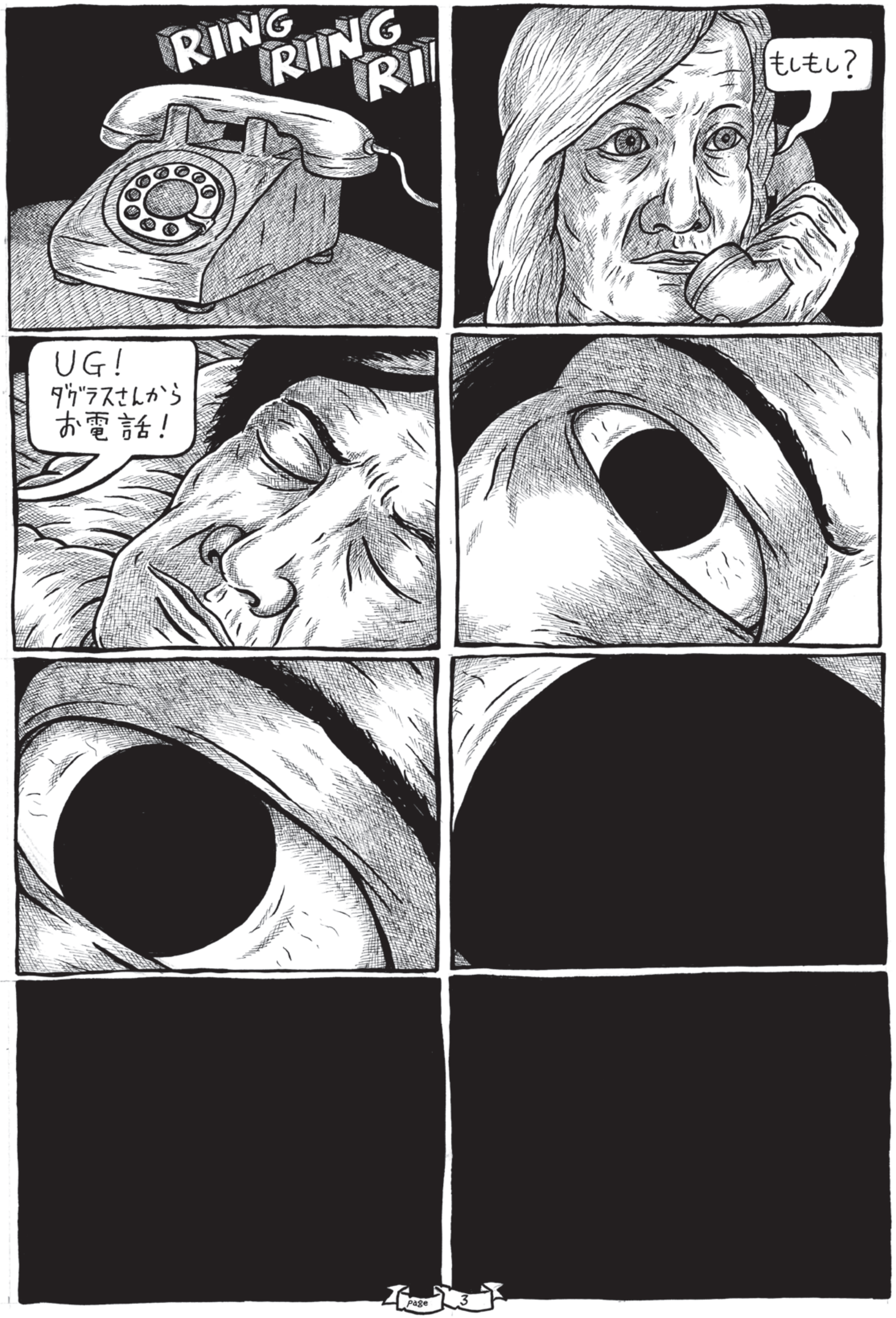
the strange story of

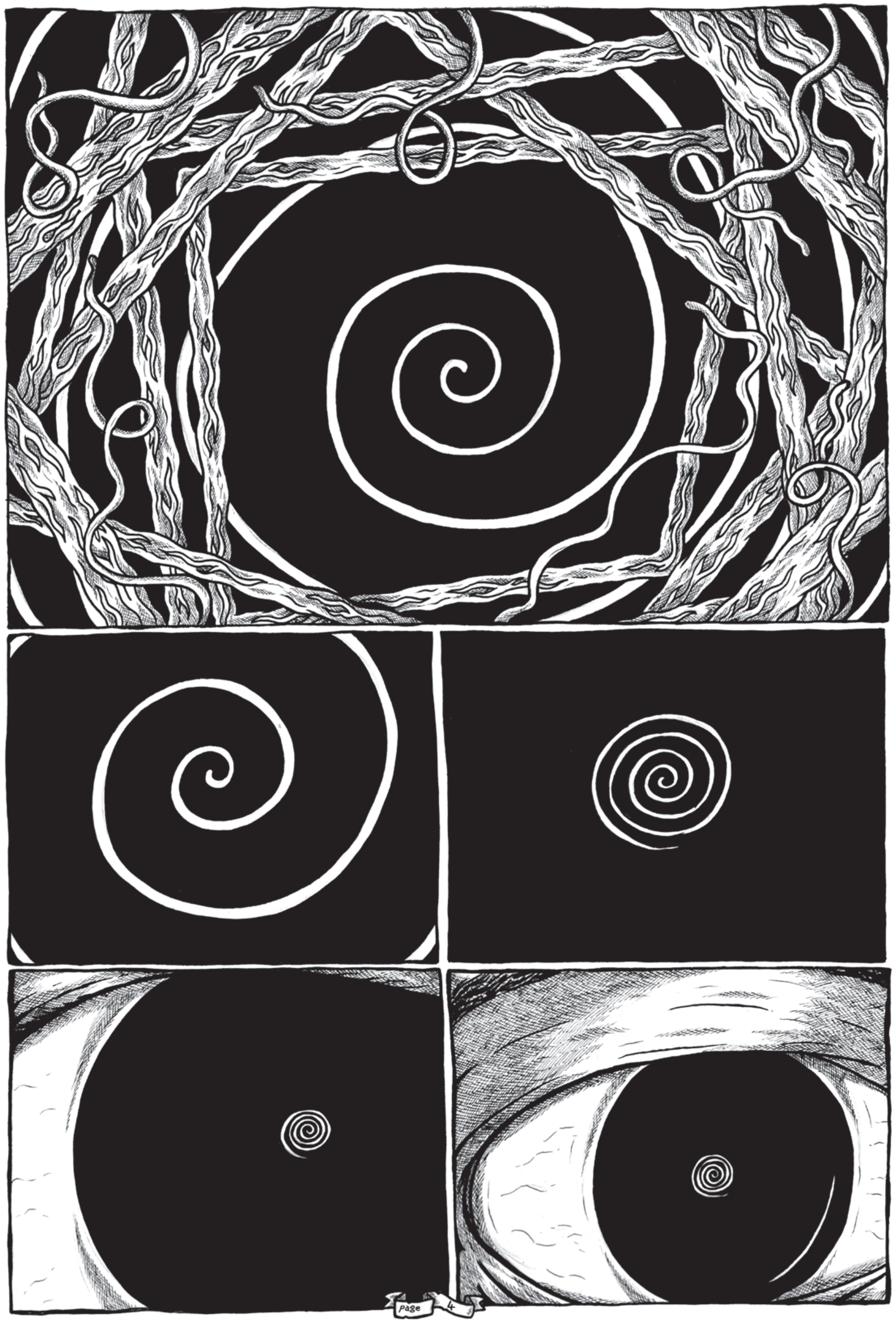
UG Krishnamurti

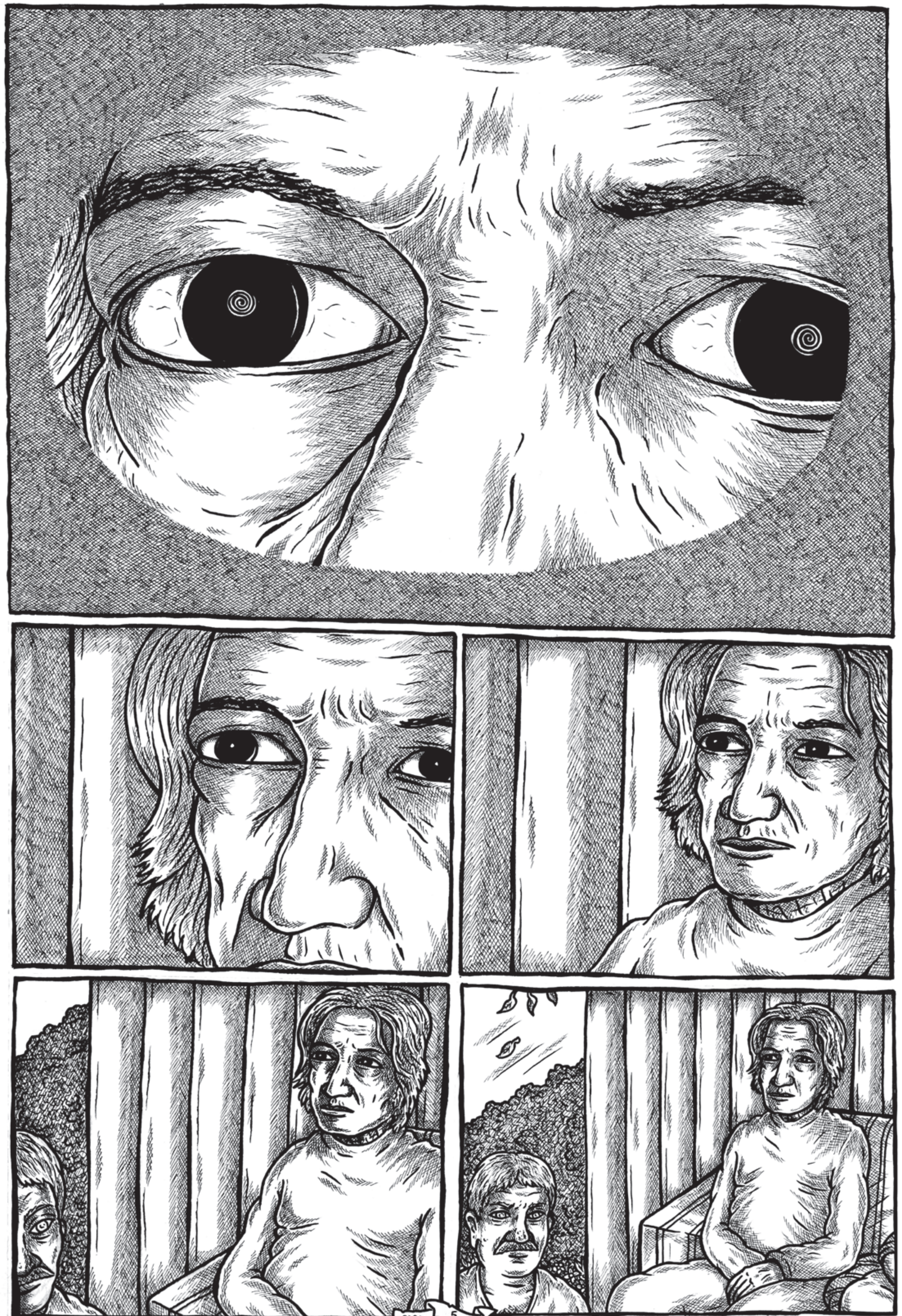
PART 1

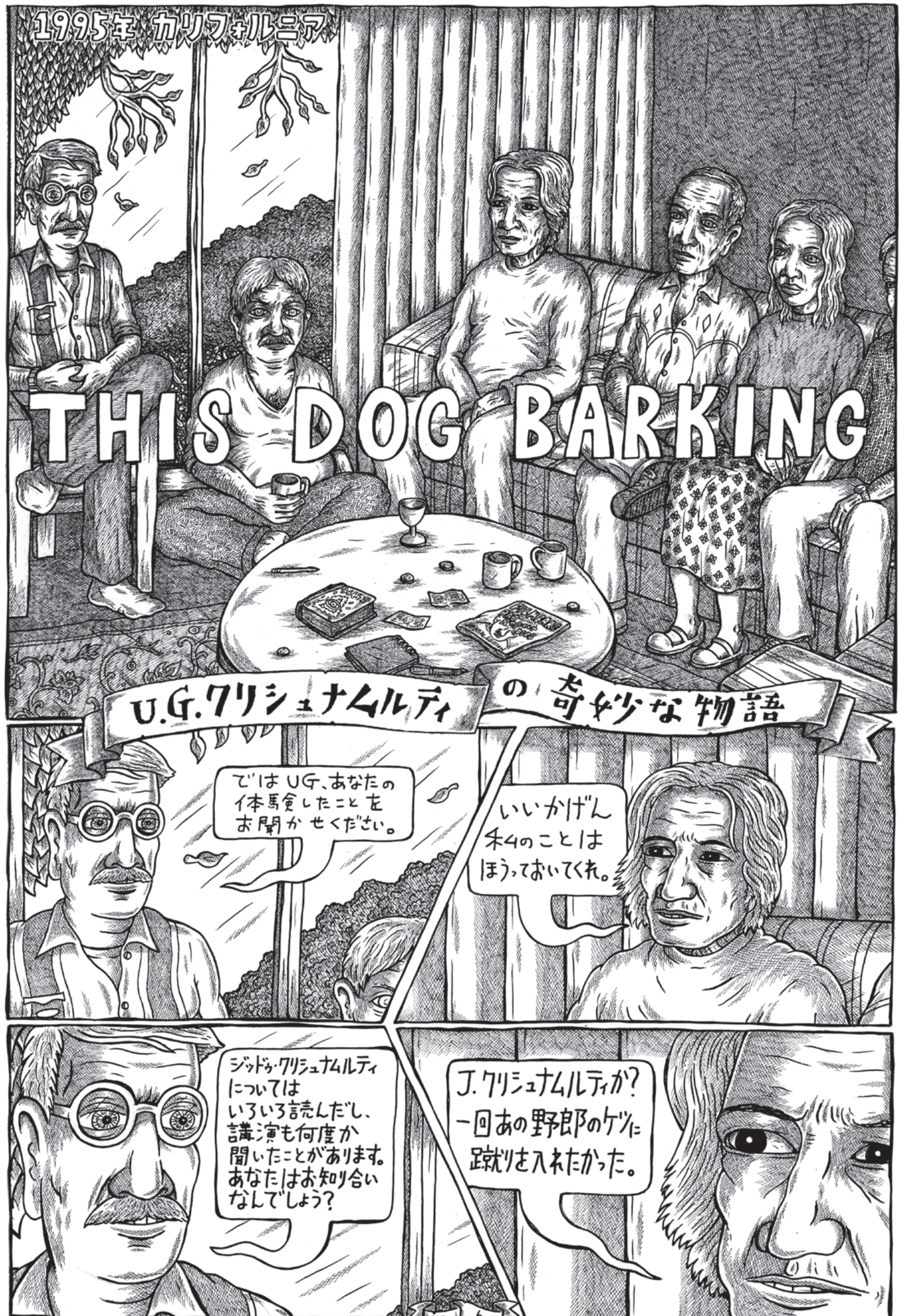
U.G.クリシュナムルティの奇妙な物語


RING
RING
RING
RING


RING
RING
RI
もしもし?
UG! ダグラスさんから お電話!

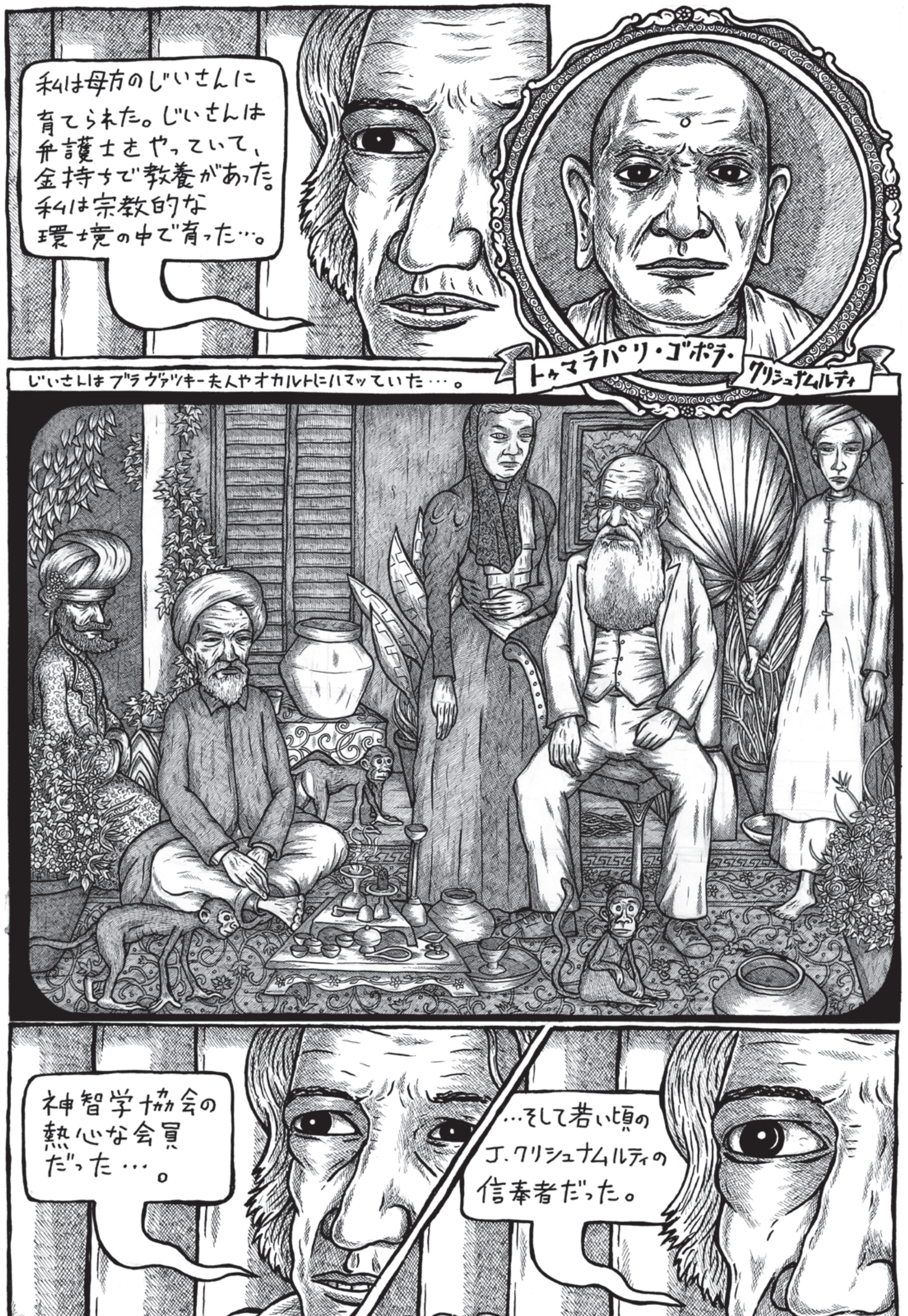


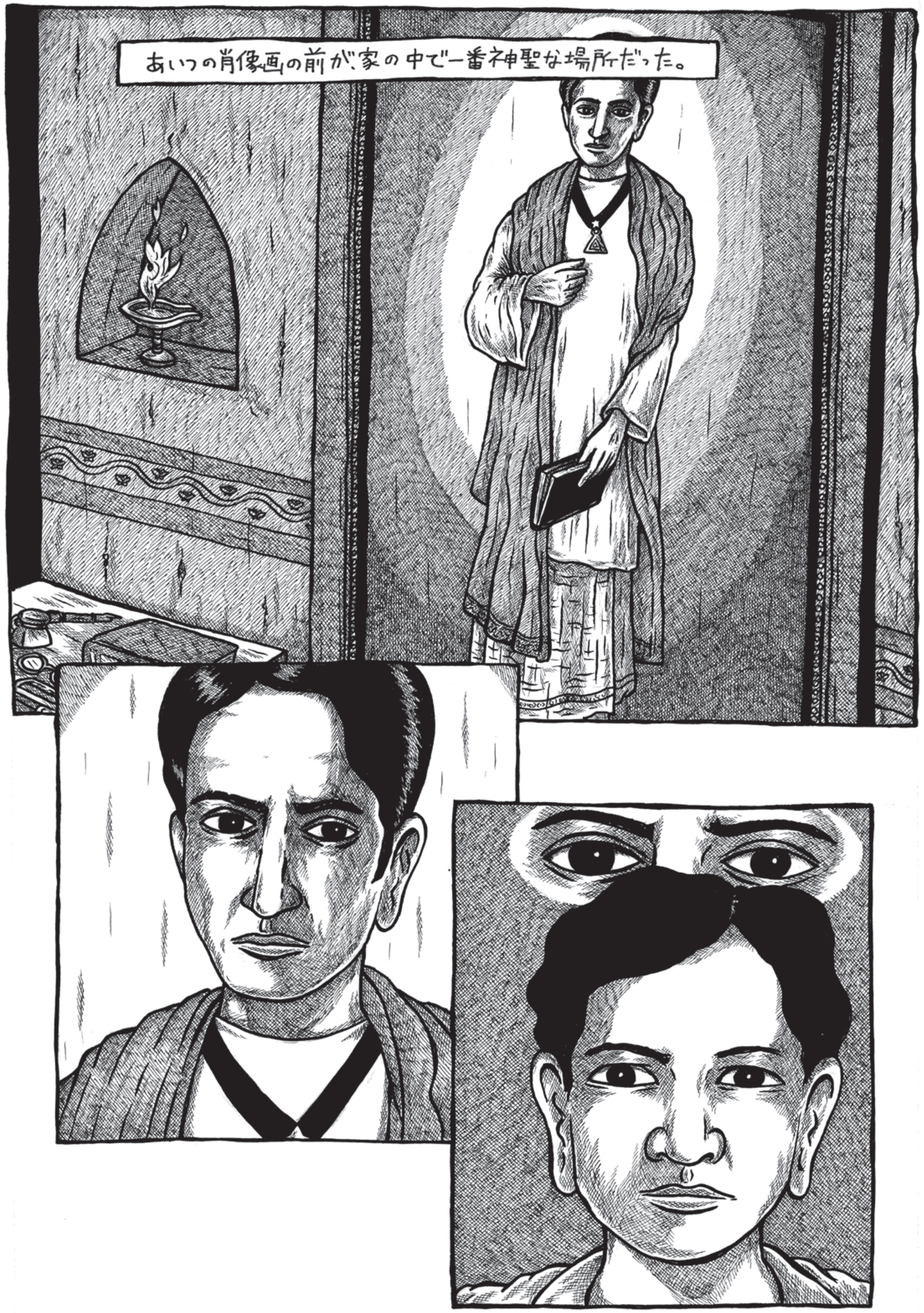



1995年 カリフォルニア
THIS DOG BARKING
U.G.クリシュナムルティの奇妙な物語
ではUG、あなたの体験したことをお聞かせください。
いいかげん私のことはほうっておいてくれ。
ジッドゥ・クリシュナムルティについてはいろいろ読んだし、講演も何度か聞いたことがあります。あなたはお知り合いなんでしょう?
J.クリシュナムルティか?一回あの野郎のケツに蹴りを入れたかった。

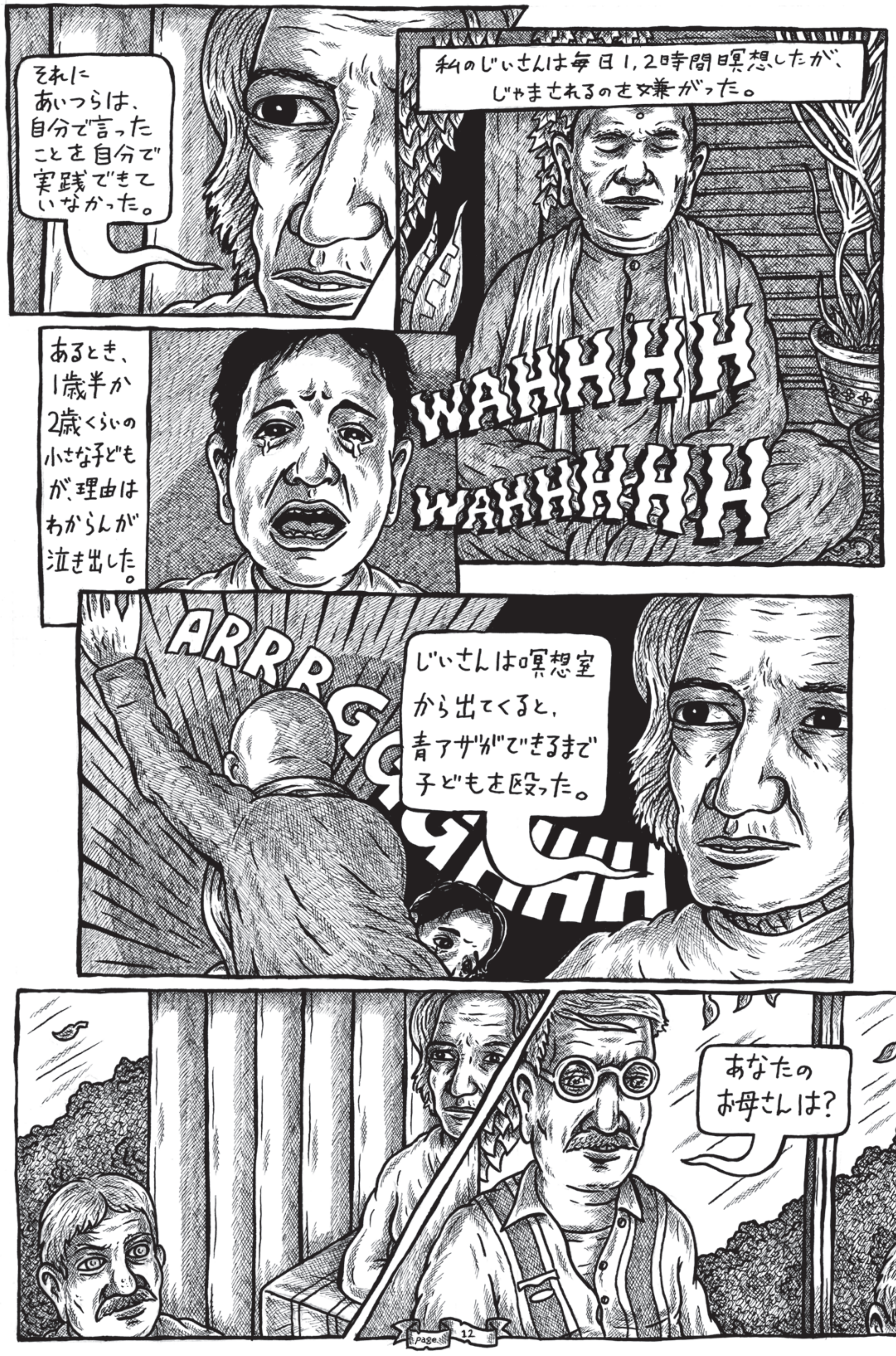
どうして？
彼が嘘つきだとでも？
いやいや、こまかい嘘はどうでもいい…。
ではなぜ？
アレは詐欺師だった。教えだかなんだか知らんが、人々を救う方法があると言ってダマし、それをあちこち説いて回った。
…あなたは？なんの教えも方法も持ってないと？
ない。
じゃあなんのためにここで人と話してるんですか？
そっちが勝手に会いにくるんだろ。くる者は拒まん。

人は私に疑問を投げかけてくる。まるで犬に石を投げつけるみたいにな。私はただ吠え返すだけだ。それを聞いた人間が勝手に意味のある言葉だと解釈する。
でも人はあなたのことを「覚者」だと言っています。あなたに何が起こったのか聞かせていただけませんか？興味があります。
私の人生談を聞いたところで何のご利益もない。保証する。だが話すのはかまわん。
まるで回転木馬みたいなもんだ。飛び降りる勇気がなくてグルグルふり回されつづけた。だが私は運がよかった。
途中でほうり出された。
木からふり落とされる小動物のように。
回転木馬？いったいなんのたとえですか？
「覚りとは何か？」そんな疑問に私はガキの頃からふり回されてきた…。

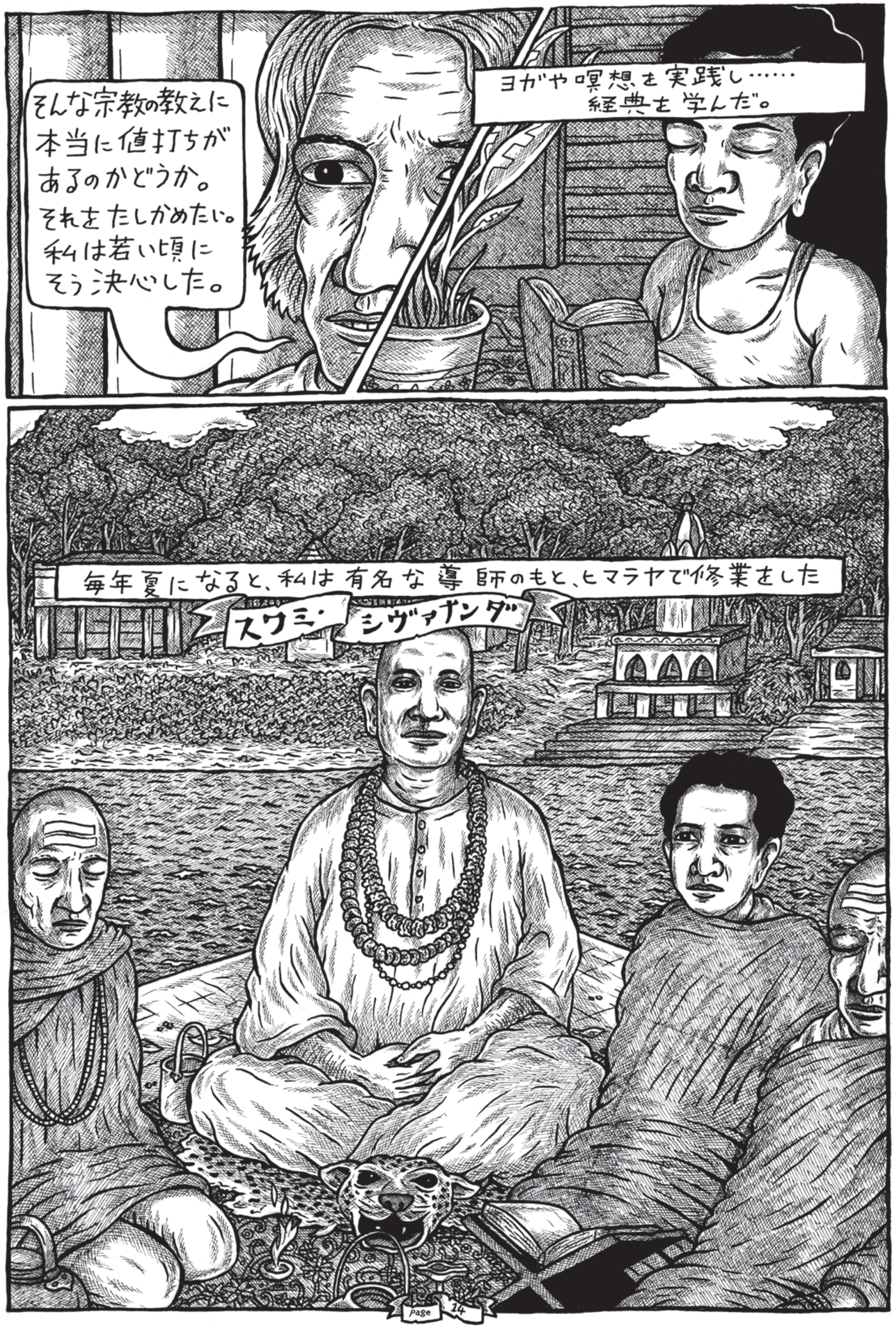

私は母方のじいさんに育てられた。じいさんは弁護士をやっていて、金持ちで教養があった。私は宗教的な環境の中で育った…。
トゥマラパリ・ゴポラ・クリシュナムルティ
じいさんはブラヴァツキー夫人やオカルトにハマっていた…。
神智学協会の熱心な会員だった…。
…そして若い頃のJ.クリシュナムルティの信奉者だった。

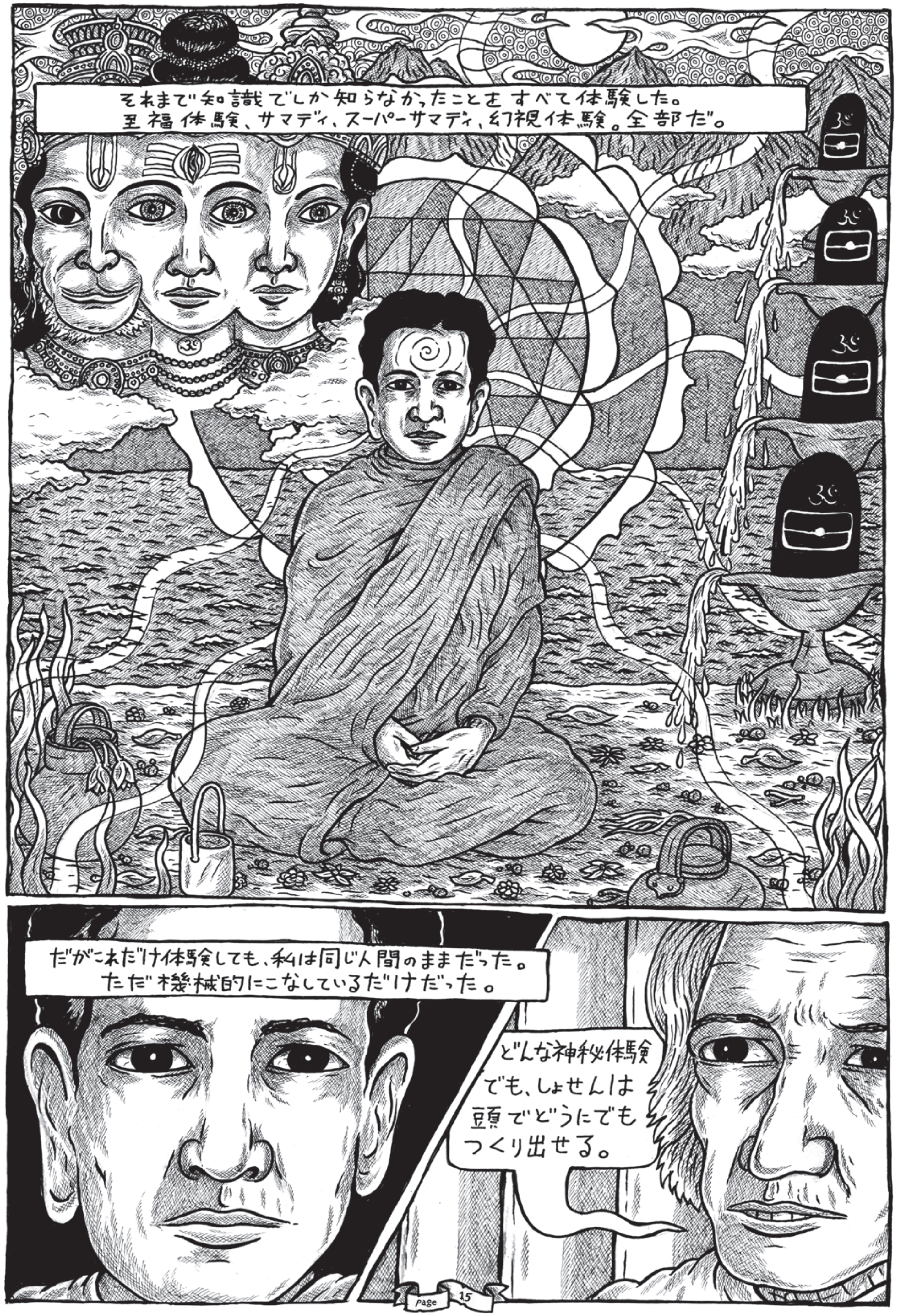

あいつの肖像画の前が、家の中で一番神聖な場所だった。

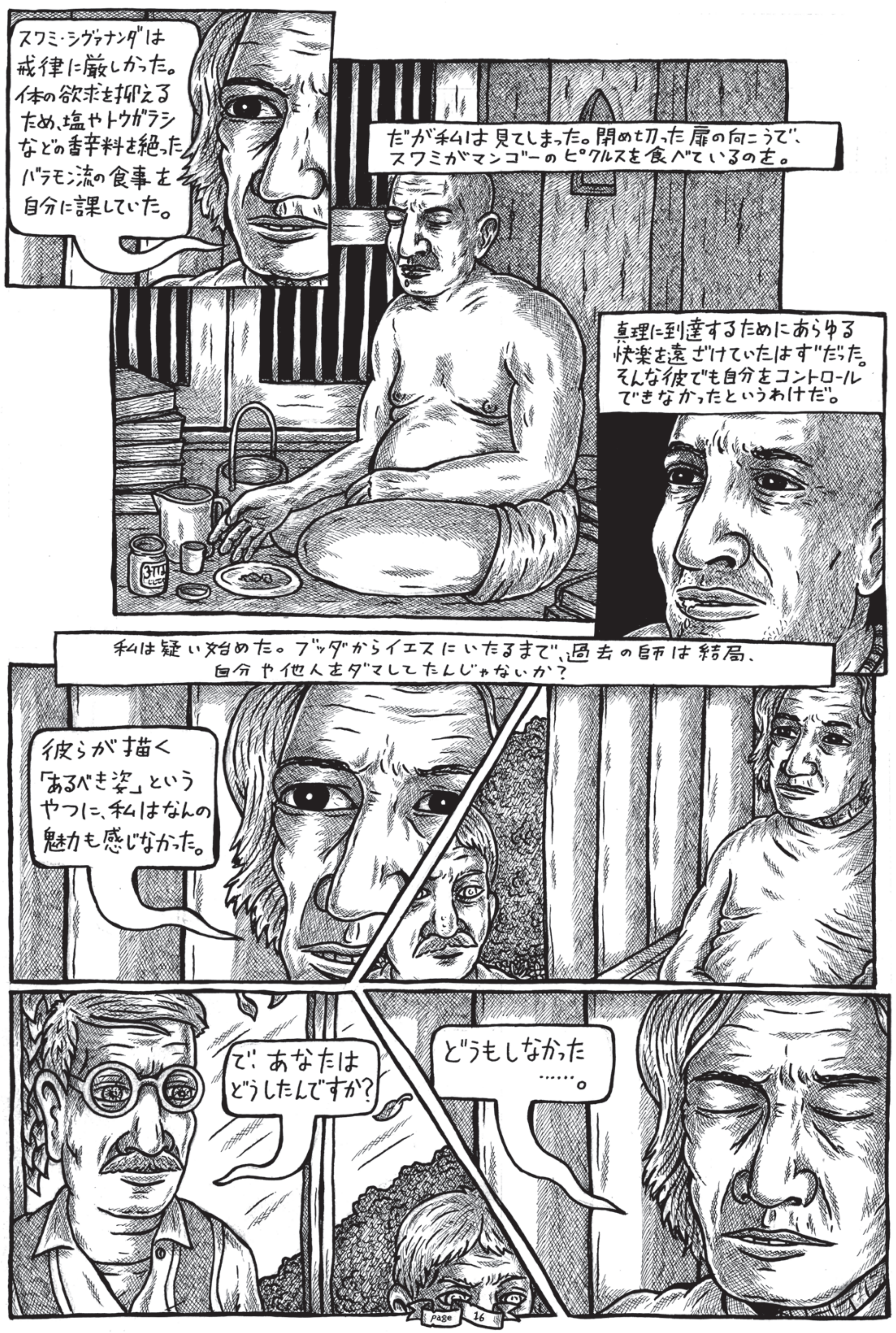
うちの家は、ゆきずりの聖人や苦行者、修業僧のために開放されていた。
だがその頃から気づいていた。あいつらみんな偽善者だった。連中はやたらとよくしゃべり、なんでも美しく語ろうとする…。
だが連中の人生は浅はかで空虚だった。
心の奥底で何かを病的に恐れていた。

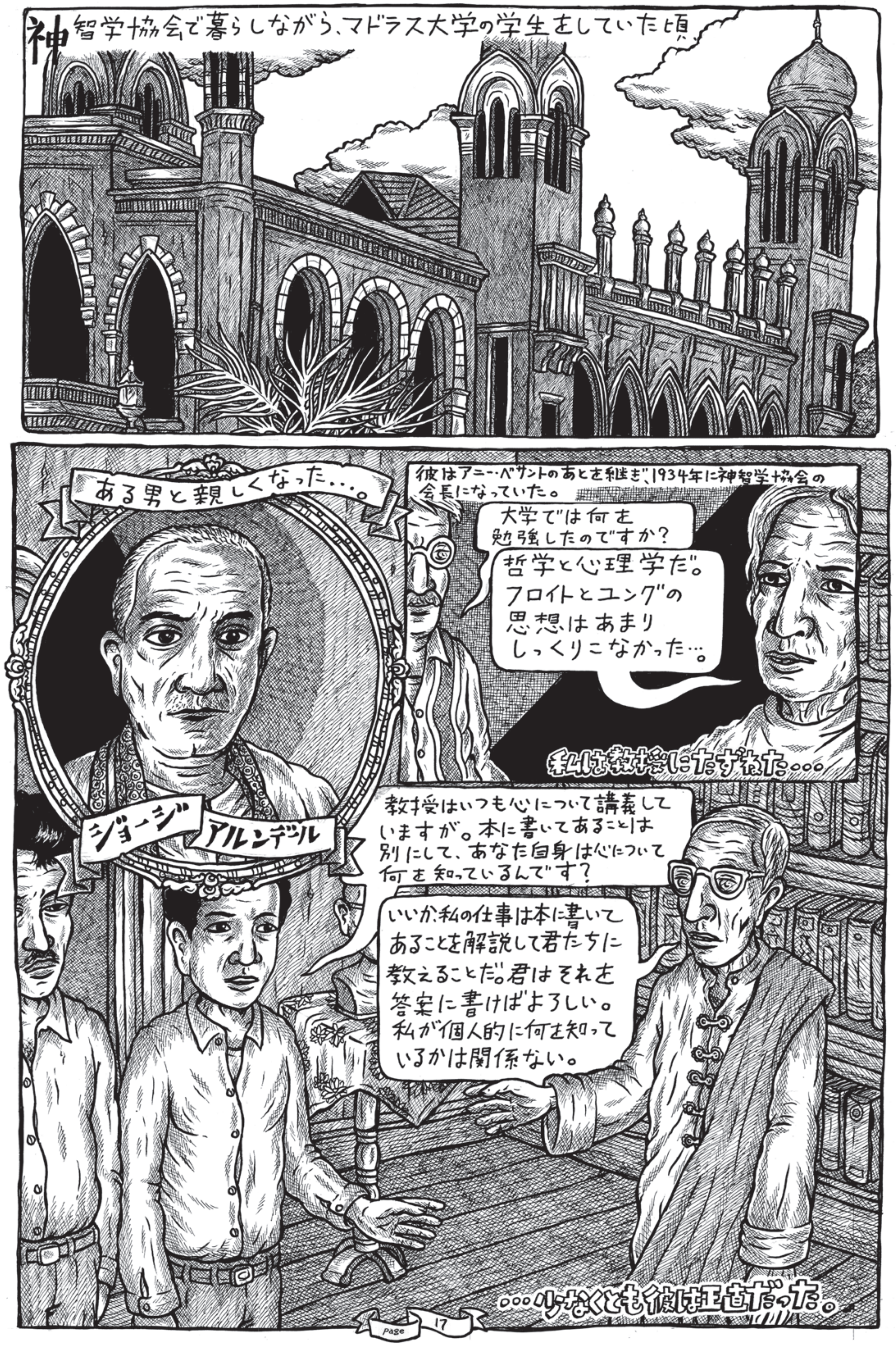

それにあいつらは、自分で言ったことを自分で実践できていなかった。
私のじいさんは毎日1，2時間瞑想したが、じゃまされるのを嫌がった。
あるとき、1歳半か2歳くらいの小さな子どもが、理由はわからんが泣き出した。
WAHHHHH
WAHHHHHH
ARRRGG
じいさんは瞑想室から出てくると、青アザができるまで子どもを殴った。
あなたのお母さんは？

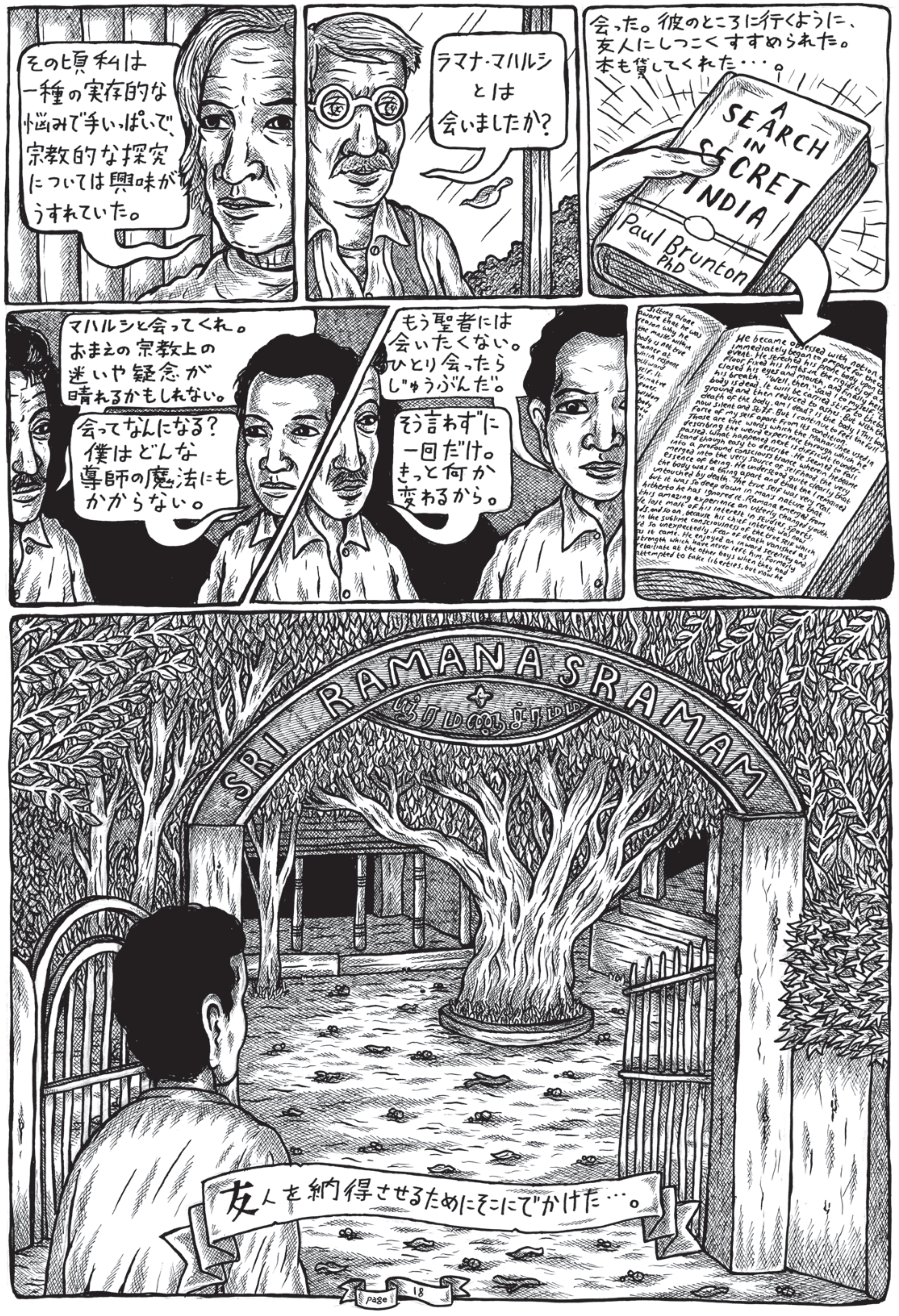
私の母親は、私が生まれた7日後に死んだ。
死に際に母親は
こう言ったらしい。
この子は崇高な
運命を背負って
生まれてきたのです。
じいさんは真に受けて、
私を育てることに
人生をささげた…。
Uppaluri Bharathamma
宗教教育にも熱心
だった。毎朝学者たちが
やってきては、
あらゆる知識を私に
たたきこんだ。
ウパニシャッド哲学や
パンチャダシの聖典、
ナイシュカルムヤ・シッディ、
その注釈書、
注釈書のそのまた注釈書、
などなど。
朝の4時から夜の6時まで
そんなたわごとを
えんえん聞かされた。
BLAH BLAH BLAH BLAH BLAH BLAH BLAH BLAH BLAH BLAH BLAH BLAH BLAH BLAH BLAH


そんな宗教の教えに
本当に値打ちが
あるのかどうか。
それをたしかめたい。
私は若い頃に
そう決心した。
ヨガや瞑想を実践し……
経典を学んだ。
毎年夏になると、私は有名な導師のもと、ヒマラヤで修業をした
スワミ・シヴァナンダ

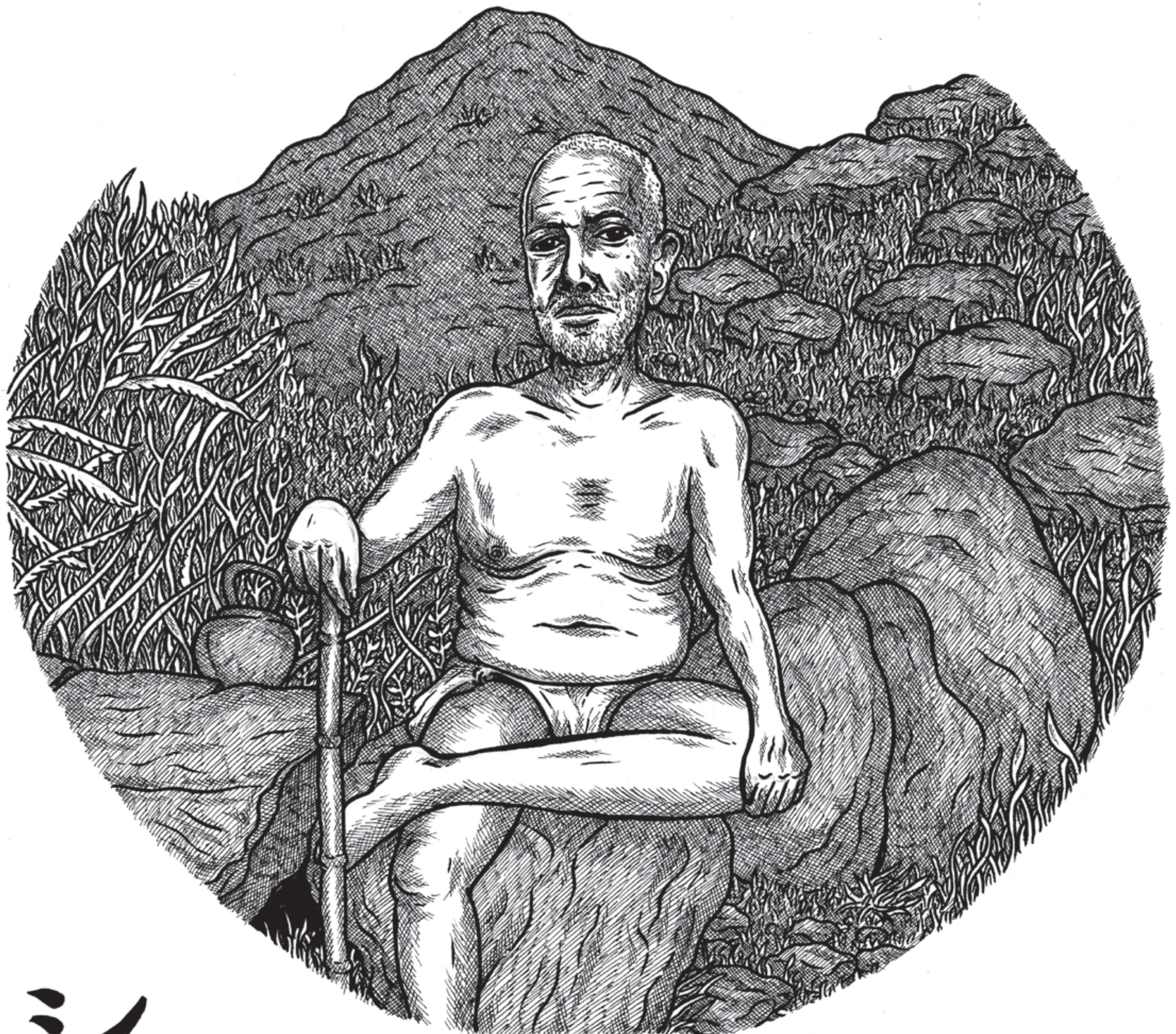

それまで知識でしか知らなかったことをすべて体験した。
至福体験、サマディ、スーパーサマディ、幻視体験。全部だ。
だがこれだけ体験しても、私は同じ人間のままだった。
ただ機械的にこなしているだけだった。
どんな神秘体験でも、しょせんは頭でどうにでもつくり出せる。


スワミ・シヴァナンダは戒律に厳しかった。体の欲求を抑えるため、塩やトウガラシなどの香辛料を絶ったバラモン流の食事を自分に課していた。
だが私は見てしまった。閉め切った扉の向こうで、スワミがマンゴーのピクルスを食べているのを。
真理に到達するためにあらゆる快楽を遠ざけていたはずだった。そんな彼でも自分をコントロールできなかったというわけだ。
私は疑い始めた。ブッダからイエスにいたるまで、過去の師は結局、自分や他人をダマしてたんじゃないか?
彼らが描く「あるべき姿」というやつに、私はなんの魅力も感じなかった。
で、あなたはどうしたんですか?
どうもしなかった……。


神智学協会で暮らしながら、マドラス大学の学生をしていた頃
ある男と親しくなった…。
ジョージ・アルンデイル
彼はアニー・ベサントのあとを継ぎ、1934年に神智学協会の会長になっていた。
大学では何を勉強したのですか？
哲学と心理学だ。フロイトとユングの思想はあまりしっくりこなかった…。
私は教授にたずねた…
教授はいつも心について講義していますが。本に書いてあることは別にして、あなた自身は心について何を知っているんです？
いいか、私の仕事は本に書いてあることを解説して君たちに教えることだ。君はそれを答案に書けばよろしい。私が個人的に何を知っているかは関係ない。
…少なくとも彼は正直だった。


その頃私は一種の実存的な悩みで手いっぱいで、宗教的な探究については興味がうすれていた。
ラマナ・マハルシとは会いましたか？
会った。彼のところに行くように、友人にしつこくすすめられた。本も貸してくれた…。
A SEARCH IN SECRET INDIA
Paul Brunton PhD
マハルシと会ってくれ。おまえの宗教上の迷いや疑念が晴れるかもしれない。
会ってなんになる？僕はどんな導師の魔法にもかからない。
もう聖者には会いたくない。ひとり会ったらじゅうぶんだ。
そう言わずに一回だけ。きっと何か変わるから。
SRI RAMANASRAMAM
友人を納得させるためにそこにでかけた…。

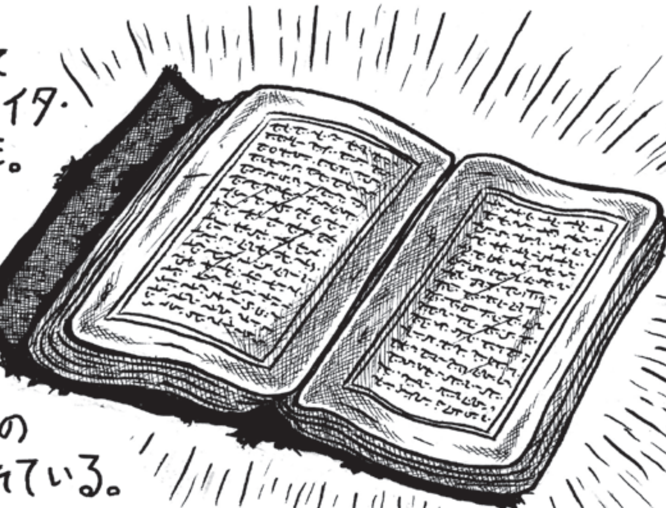
シュリー・ラマナ・マハルシに関するメモ　ヒンドゥーのアドヴァイタ・ヴェーダーンタと東洋哲学



シュリー・ラマナ・マハルシ(1879~1950)は16歳のとき、彼がのちに「解脱」と呼んだ神秘体験をする。彼は家を出て南インドのタミル・ナードゥ州にある霊山アルナーチャラに移り住み、生涯そこから離れることはなかった。

マハルシは、彼自身の存在から発せられる「沈黙の力」こそが、自分の教えのもっとも純粋なかたちであるとした。その沈黙を理解できない者に対してのみ、言葉を使って教えを説いた。

彼はさまざまな修業の道や方法に対して寛容であったが、その教えの根本はアドヴァイタ・ヴェーダーンタ(不二一元論)に基づくものだった。



サンスクリット語で「アドヴァイタ」は「不二」を、「ヴェーダーンタ」は「ヴェーダの終わり」を意味する。ヴェーダは神話・いけにえ・儀式について書かれた、インド最古の文献である。ヴェーダの最後期に書かれたのがウパニシャッドであり、世界の本質である不二一元論について哲学的に考察されている。

不二一元論が西洋に定着したことはなかったが、ヒンドゥー教、道教、仏教においては欠くことのできない思想である。

不二一元論とは何ぞや?

それはつまり、光と影、長と短、白と黒といった現象は、互いが関係し合って初めて経験できるものだということだ。光は影なしでは存在せず、白と黒もまたしかり。相反するものは存在せず、ただ関係があるのみである。
(楞伽経より)

ヒンドゥー教のアドヴァイタ・ヴェーダーンタは、宇宙・魂・神は同一のものであると説く。この宇宙は多様に見えて、実はひとつのものが実在するだけだ。あるのは偉大なるブラフマンのみであり、すべての事象はそれに属する異なる形態にすぎない。ブラフマンは純粋意識であり、万物の本質なのだ。

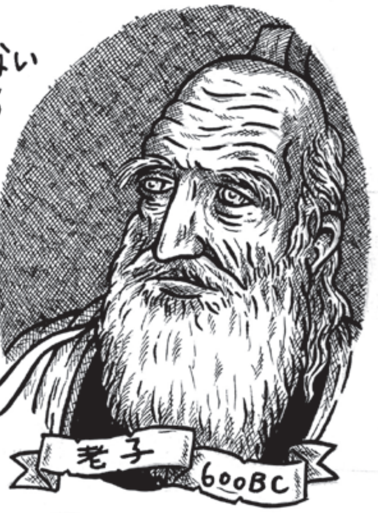
実在するのはブラフマンのみであり、世界はその表象にすぎない。自己もまたブラフマンに他ならないのだ。

認識対象から独立した認識者や自己は存在しない。主体は内になく、客体は外にない。ただ「見る」という純粋な行為のみがある。意識と対象は同一なのだ。
(ケン・ウィルバー 1949~)

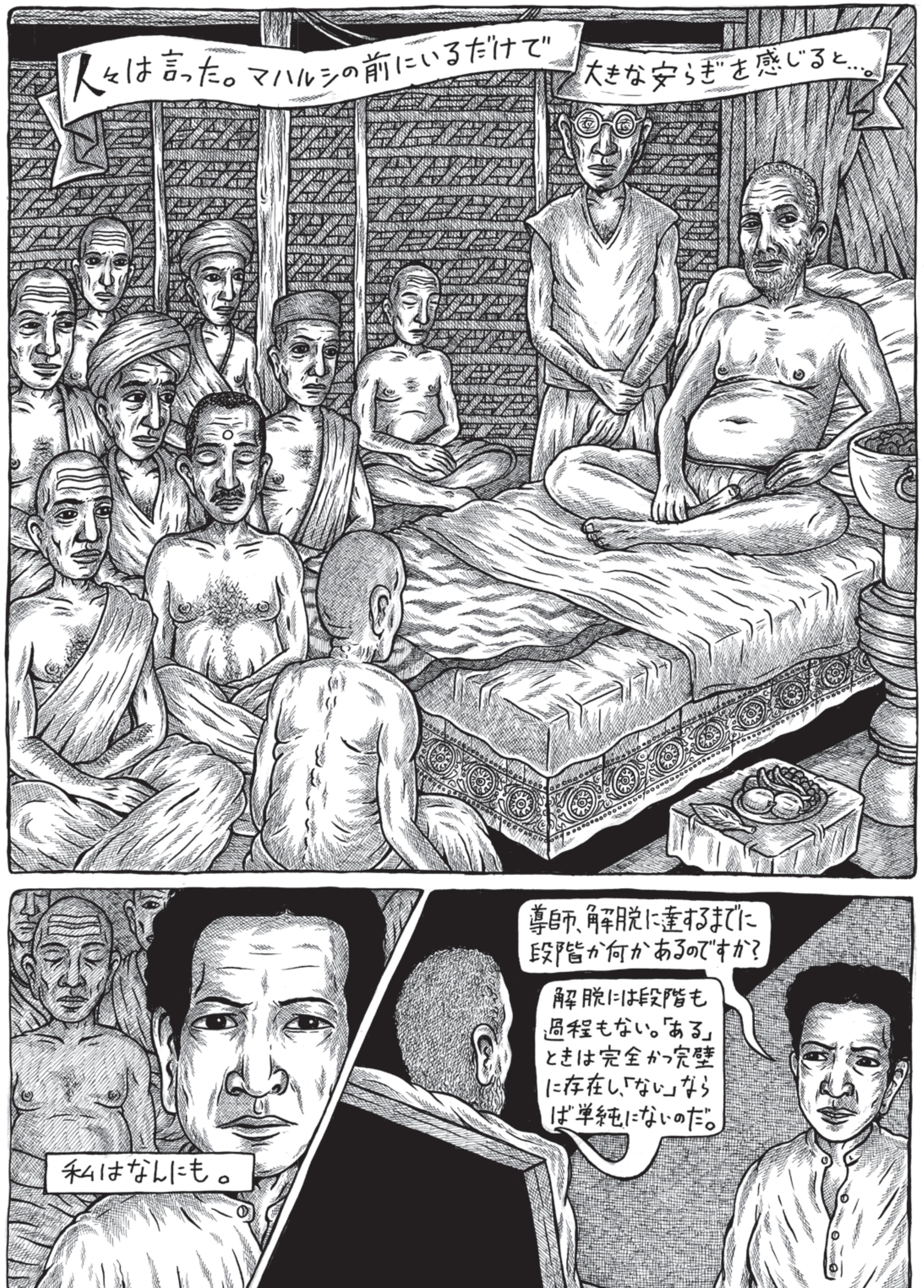
不二一元論の哲学は我々をジレンマにおとしいれる。人間は主客を分けることによってしか思考できず、それ故不二一元論の概念を正確に把握しイメージすることは困難である。だが不二一元論者はまさにこうした区別を超越した世界について語ろうとする。

そもそも人間が思考するのに欠かせない言語は、主客関係が存在する二元論を前提としている。

ブッダ:言葉にとらわれないよう注意しなさい。言葉とその意味が一致しているとはかぎらない。真理は字面の中にないからだ。意味があるのは指さされた対象であって、指そのものではない。

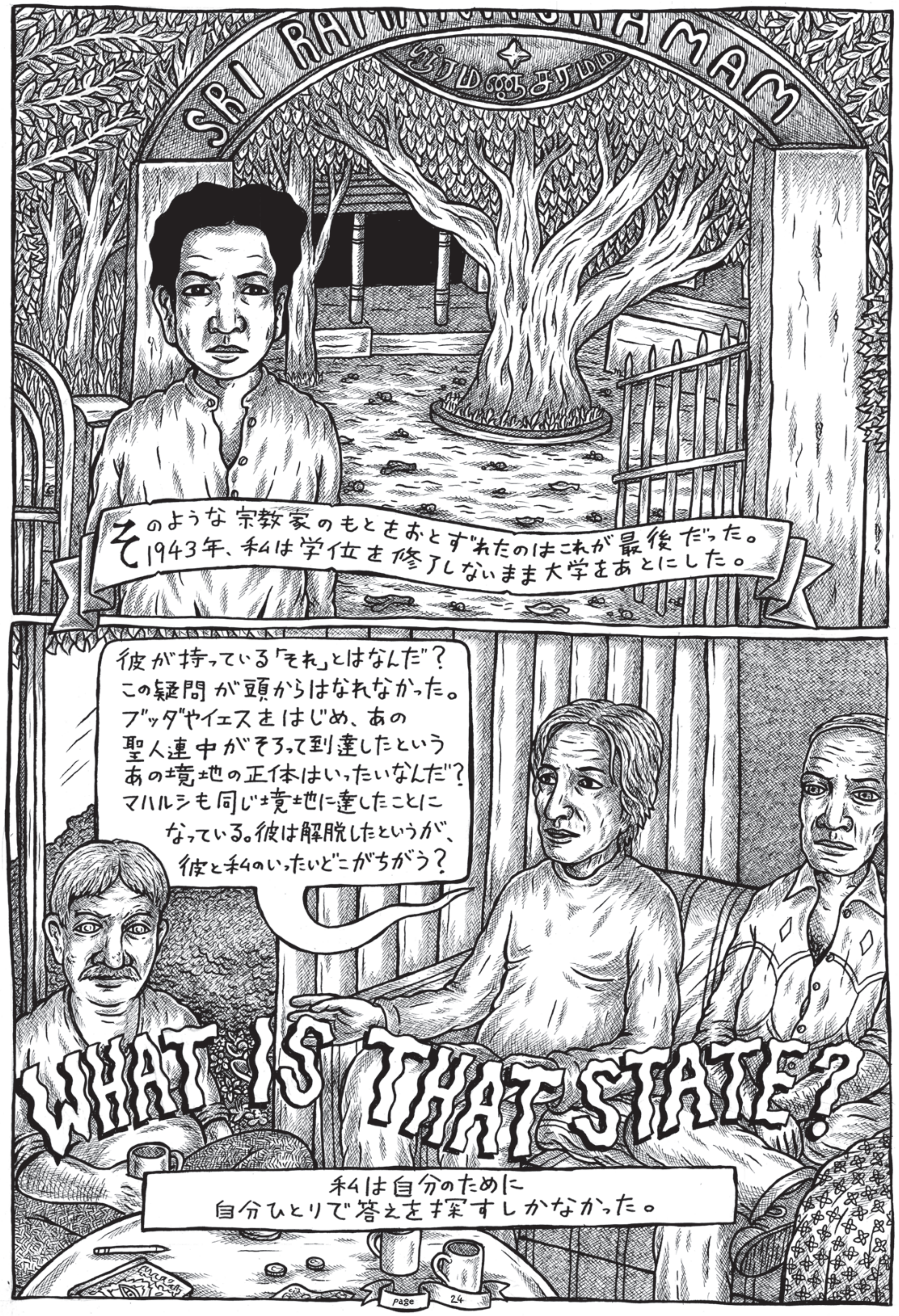


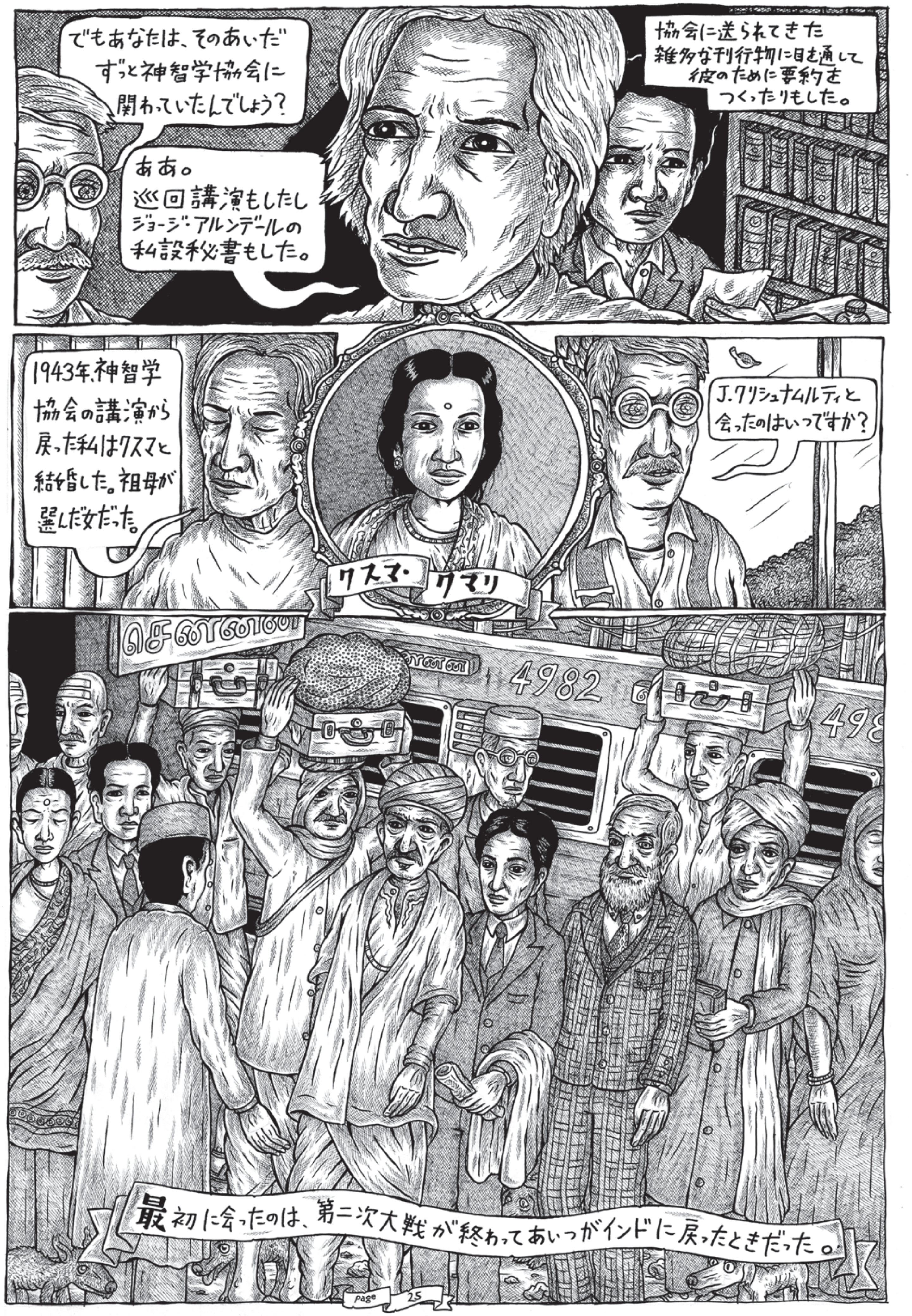
「道」と言い表せるものは永遠の道ではない。
「名」と呼べるようなものは真実不変の名ではない。

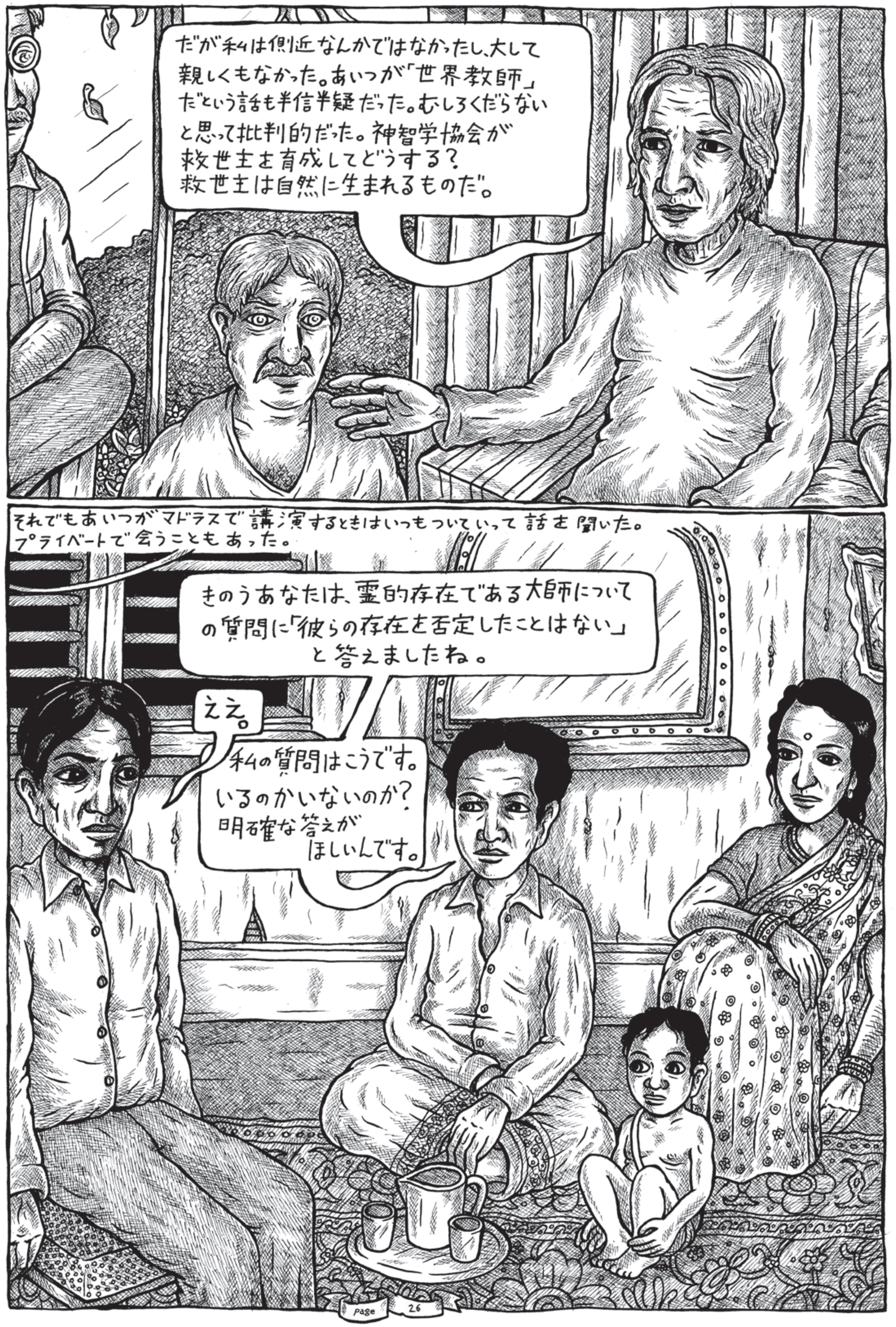

人々は言った。マハルシの前にいるだけで
大きな安らぎを感じると…。
私はなんにも。
導師、解脱に達するまでに段階が何かあるのですか?
解脱には段階も過程もない。「ある」ときは完全かつ完璧に存在し、「ない」ならば単純にないのだ。

あなたが持っているものを私にもください。

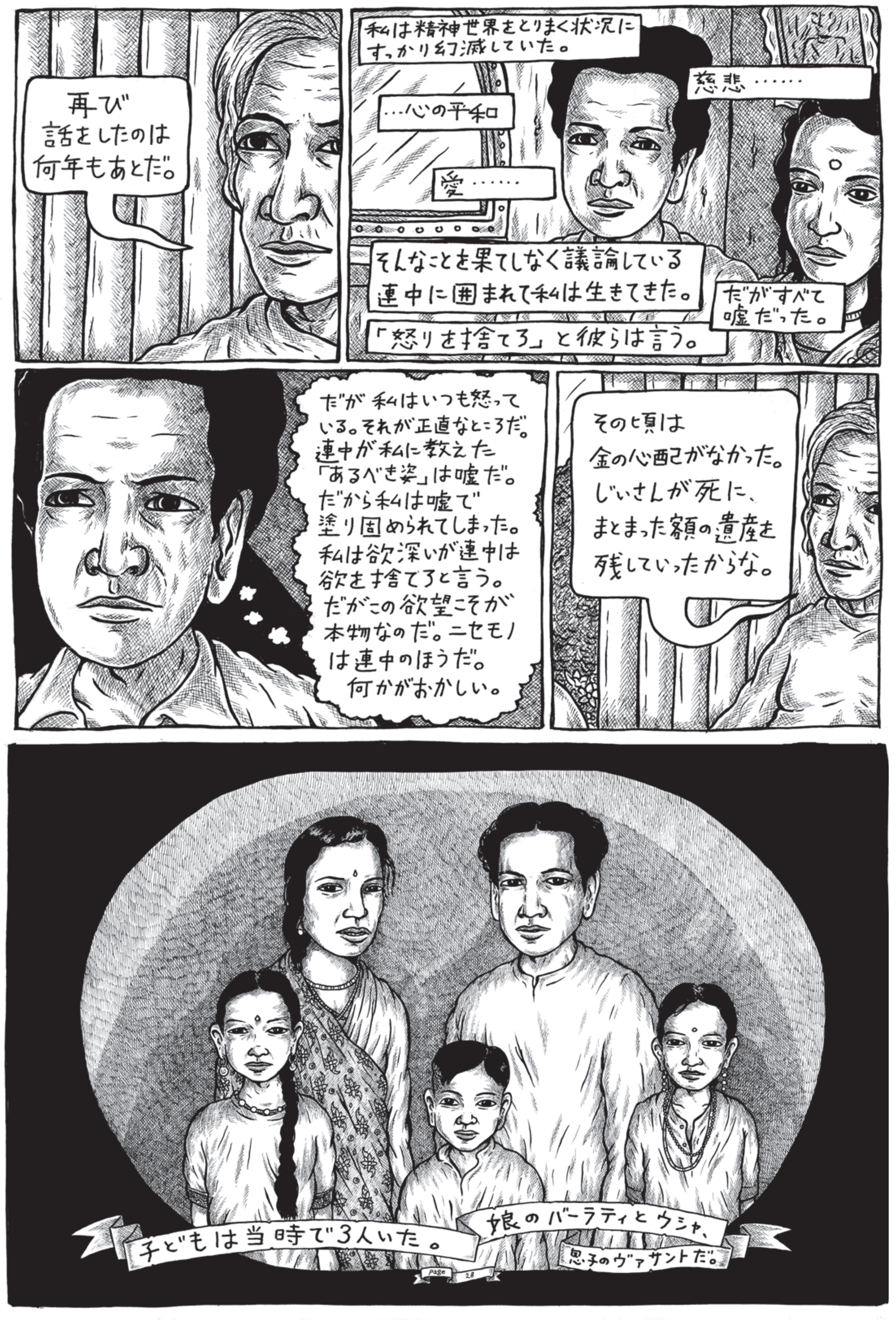
あの
聞いてますか?
「それ」を
私にください。
「それ」を
やろう。
だがおまえに
受け取れるかな?
エラそうに! 私に受け取れないはずがない。私は7年もサダナ*を
やってきた。私が受け取れないならいったい誰が受け取れる?
そもそも彼が持っている「それ」とはいったいなんだ?
*サダナ:霊的な修業のこと。


そのような宗教家のもとをおとずれたのはこれが最後だった。
1943年、私は学位を修了しないまま大学をあとにした。
彼が持っている「それ」とはなんだ?
この疑問が頭からはなれなかった。
ブッダやイエスをはじめ、あの
聖人連中がそろって到達したという
あの境地の正体はいったいなんだ?
マハルシも同じ境地に達したことに
なっている。彼は解脱したというが、
彼と私のいったいどこがちがう?
WHAT IS THAT STATE?
私は自分のために
自分ひとりで答えを探すしかなかった。


でもあなたは、そのあいだずっと神智学協会に関わっていたんでしょう?
ああ。巡回講演もしたしジョージ・アルンデールの私設秘書もした。
協会に送られてきた雑多な刊行物に目を通して彼のために要約をつくったりもした。
1943年、神智学協会の講演から戻った私はクスマと結婚した。祖母が選んだ女だった。
クスマ・クマリ
J.クリシュナムルティと会ったのはいつですか?
最初に会ったのは、第二次大戦が終わってあいつがインドに戻ったときだった。


だが私は側近なんかではなかったし、大して親しくもなかった。あいつが「世界教師」だという話も半信半疑だった。むしろくだらないと思って批判的だった。神智学協会が救世主を育成してどうする? 救世主は自然に生まれるものだ。
それでもあいつがマドラスで講演するときはいつもついていって話を聞いた。プライベートで会うこともあった。
きのうあなたは、霊的存在である大師についての質問に「彼らの存在を否定したことはない」と答えましたね。
ええ。
私の質問はこうです。いるのかいないのか? 明確な答えがほしいんです。

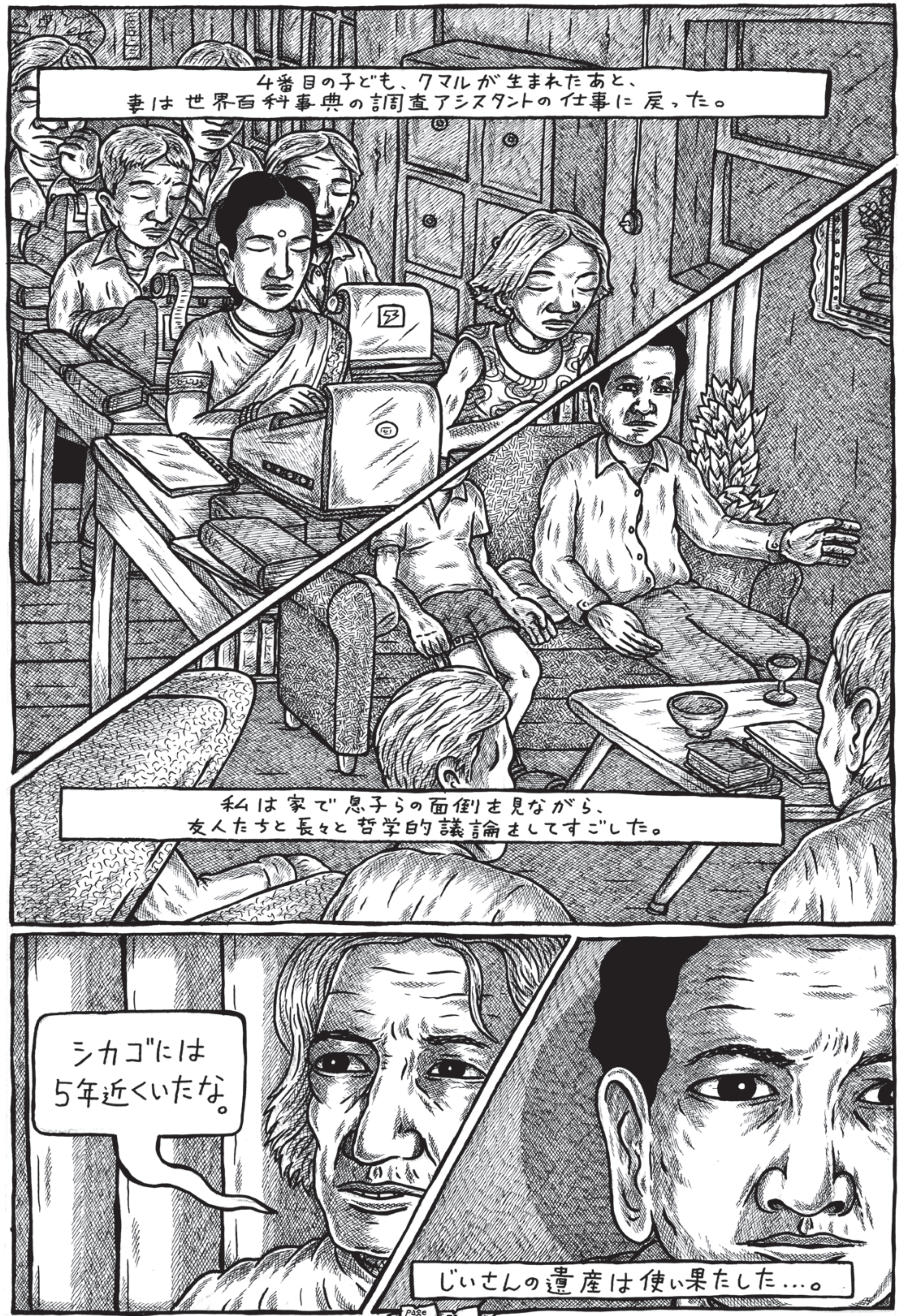
私が発した言葉は権威を持つのです。
どうしていつもそんなあいまいな返事なんですか？誰にでもわかるように全部さらけ出したらどうです？
答えを求める欲望から解放されて初めて問いを理解できるのです。
またそんな言い方を！あなたがいつも私に投げかけてくるその形而上学的なたとえ話の裏に隠れている真意はいったいなんなんですか？
それはあなたの力では理解できないでしょう。
私に理解しようがないなら私に伝えることもできないじゃないですか。じゃあ私たちはここで何をしてるんです？あなたの話を聞きつづけて7年間も無駄にしてしまった。
あなたの貴重な時間をもっと他の人に使ったらいいでしょう。私はマドラスを出ます。さようなら！
ごきげんよう、いい旅を。
彼とはそれっきりなのですか？
page 27

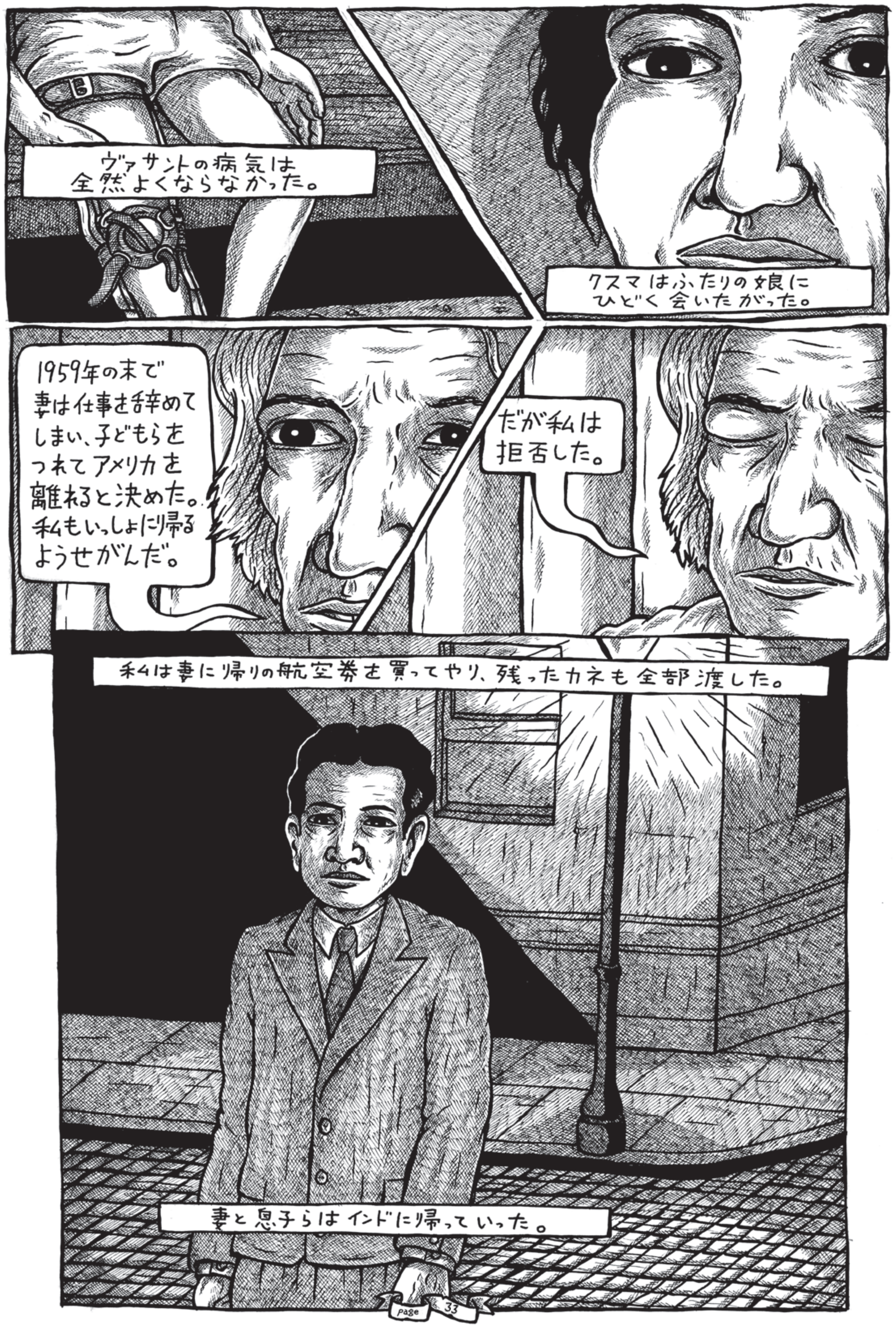

再び話をしたのは何年もあとだ。
私は精神世界をとりまく状況にすっかり幻滅していた。
慈悲……
…心の平和
愛……
そんなことを果てしなく議論している連中に囲まれて私は生きてきた。
「怒りを捨てろ」と彼らは言う。
だがすべて嘘だった。
だが私はいつも怒っている。それが正直なところだ。連中が私に教えた「あるべき姿」は嘘だ。だから私は嘘で塗り固められてしまった。私は欲深いが連中は欲を捨てろと言う。だがこの欲望こそが本物なのだ。ニセモノは連中のほうだ。何かがおかしい。
その頃は金の心配がなかった。じいさんが死に、まとまった額の遺産を残していったからな。
子どもは当時で3人いた。
娘のバーラティとウシャ、
息子のヴァサントだ。
page 28

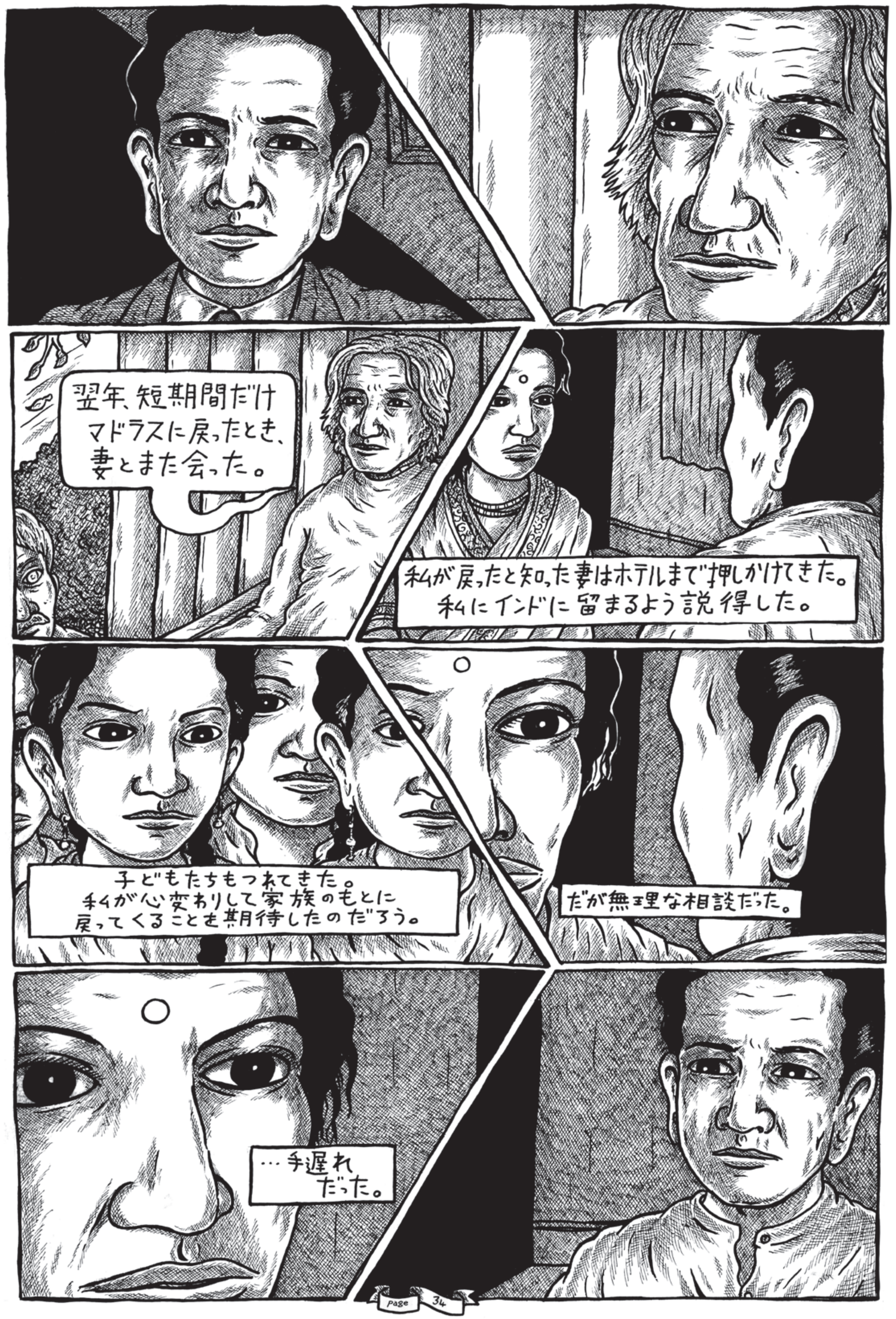
J.クリシュナムルティとのつながりがまったく切れたわけではなかった。1953年、私はマドラスで再び講演を聞いた。
終わりにさしかかり、あいつは同じ問いを何度も突きつけてきた。
IS WHAT DEATH?
死とは何か？
くりかえしくりかえし
あなたはいつも死について語るけれど、私にはさっぱり…。
そして突然途切れた。なぜか言葉がつづかなかった。
「わからない」という言葉が意識から消えた。私の中で何かが起こり、まるで霧のように消えてしまった。
…私はそのまま会場をあとにした。

それは言ってみれば「死」の体験だった。または無の境地か。なんとでも呼べばいい。この日以来、「考える」という行為に対する見方が変わった。自分自身の思考方法も変化した。他にもいろいろだ。
完全な無関心というやつだ。カネのことも家族のことも、神智学の仕事も、子どもの教育も。まったく関心がなくなってしまった。
それでも活動はつづけた。あちこち旅してまわった。あの「死」の感覚は自分の中から消えていった。だがそう思っただけだった。
IT WAS LIKE A FIRE
こんな精神状態が何年もつづいた。息子のヴァサントがポリオにかかっていたので、最善の治療を受けさせるために渡米を考えた。カネのことを心配して妻は反対した。だが結局1955年、ふたりの娘をおばに預けて、私は妻と息子をつれてアメリカに渡った。
内に秘めた炎のように燃えつづけていた
BURNING INSIDE

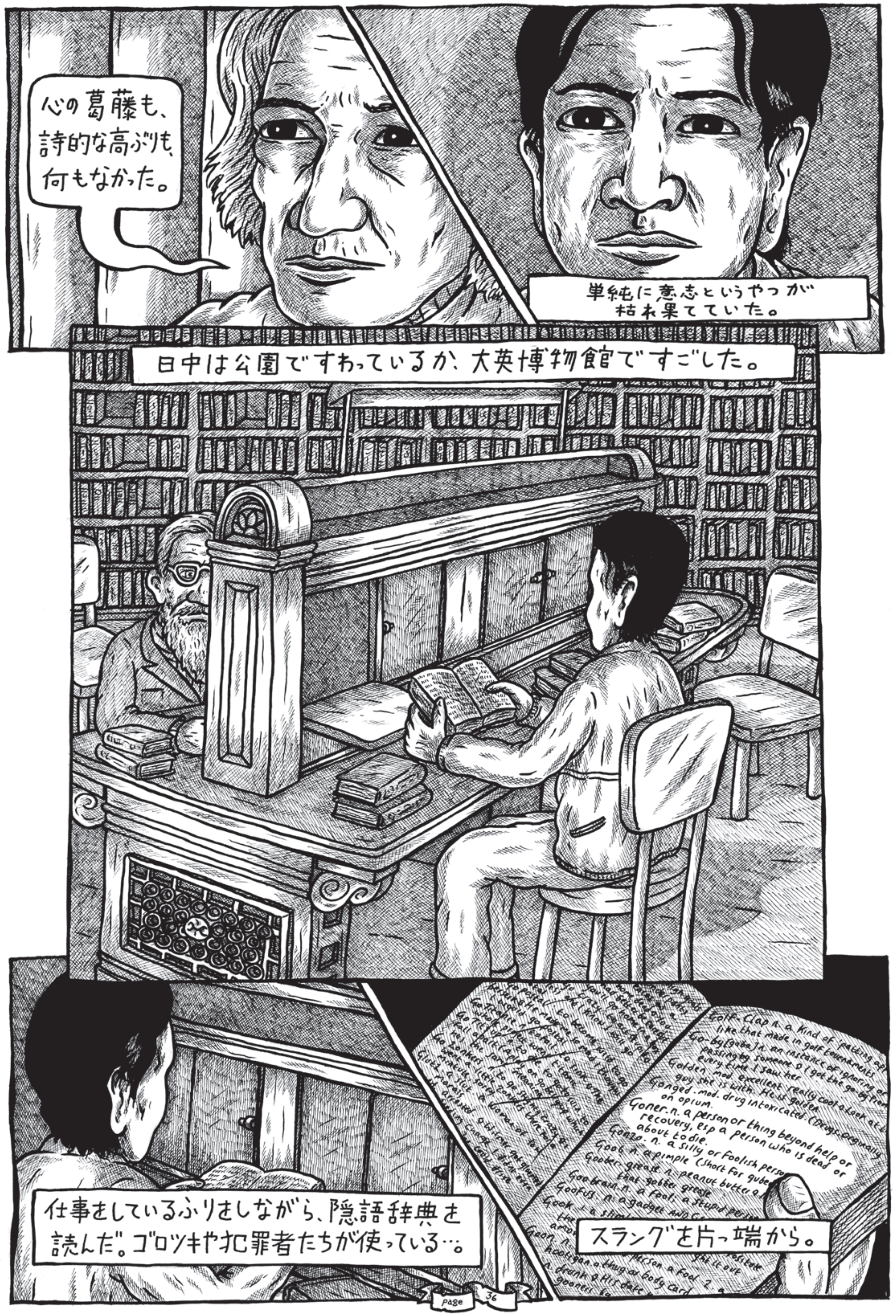
アメリカで数年がたち、だんだん資金繰りが厳しくなってきた。
Absolutely No Credit Don't Ask
だが神智学協会の友人の援助のおかげで、なんとかアメリカに留まることができた。
私はカネをかせぐため、焼き直した古い思想をぶらさげてアメリカ各地で講演をした。
だが受け売りの知識をオウム返しにくりかえすのは面白くなかった。しばらくしてやめてしまった。
1958年、クスマがまた妊娠した。
クスマは同時に一家のかせぎ頭だった。


4番目の子ども、クマルが生まれたあと、
妻は世界百科事典の調査アシスタントの仕事に戻った。
私は家で息子らの面倒を見ながら、
友人たちと長々と哲学的議論をしてすごした。
シカゴには5年近くいたな。
じいさんの遺産は使い果たした…。

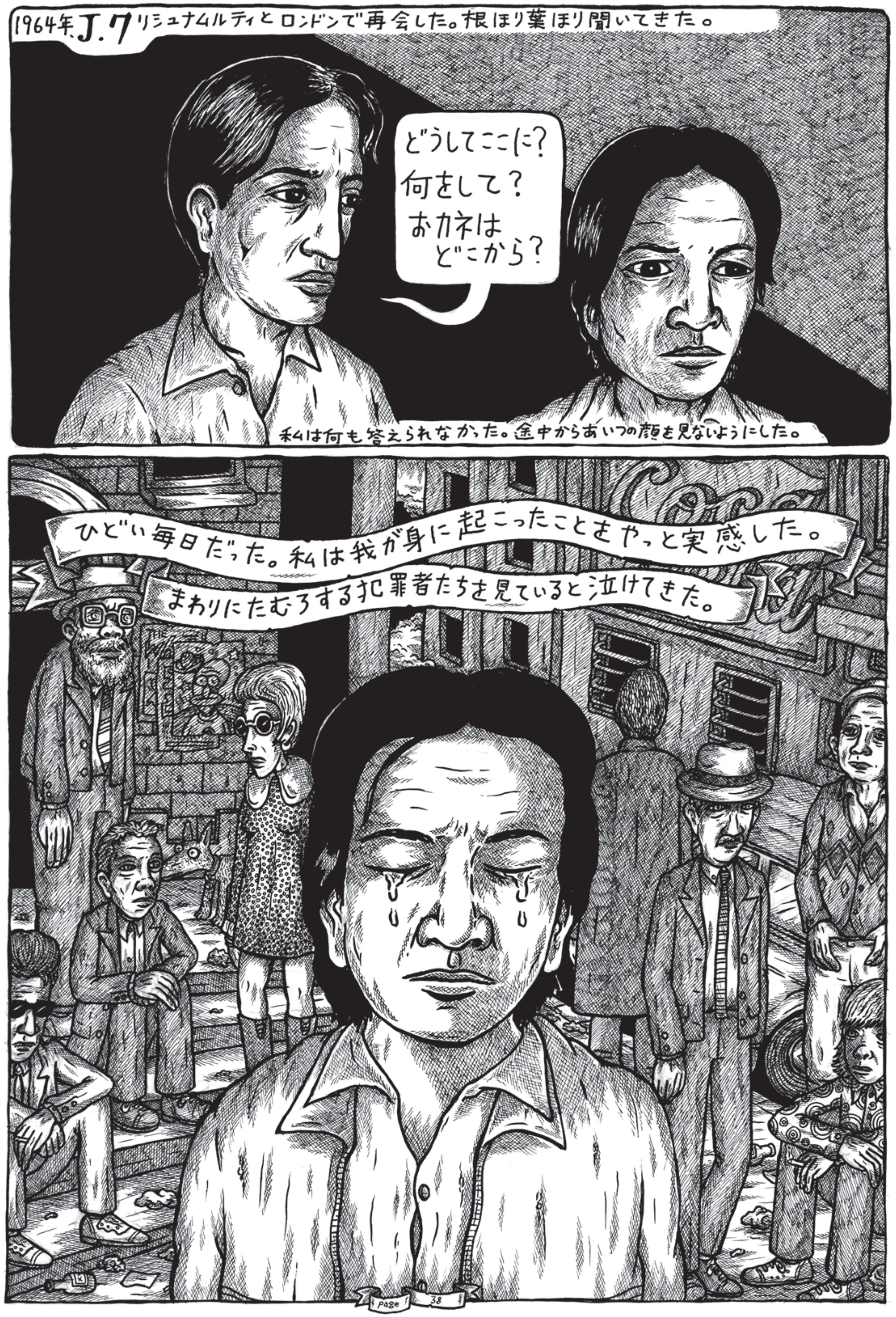

ヴァサントの病気は全然よくならなかった。
クスマはふたりの娘にひどく会いたがった。
1959年の末で妻は仕事を辞めてしまい、子どもらをつれてアメリカを離れると決めた。私もいっしょに帰るようせがんだ。
だが私は拒否した。
私は妻に帰りの航空券を買ってやり、残ったカネも全部渡した。
妻と息子らはインドに帰っていった。


翌年、短期間だけマドラスに戻ったとき、妻とまた会った。
私が戻ったと知った妻はホテルまで押しかけてきた。私にインドに留まるよう説得した。
子どもたちもつれてきた。私が心変わりして家族のもとに戻ってくることを期待したのだろう。
だが無理な相談だった。
…手遅れだった。

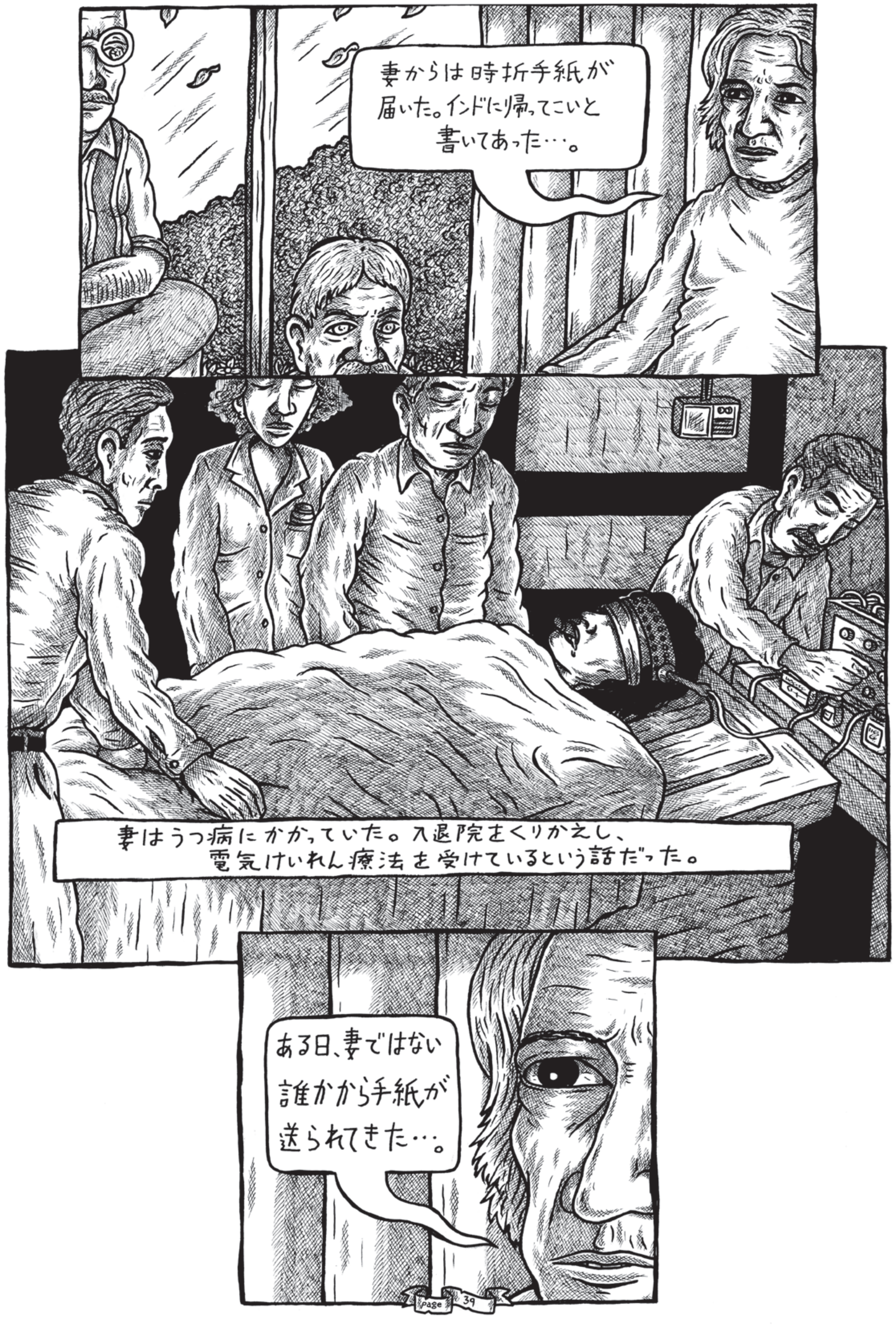
それから数ケ月、ヨーロッパ、東欧、そしてソ連…。あちこちを旅した。
イギリスについたときにはとうとう一文無しの宿無しになっていた。
Lord Joh
3年間、ロンドンの路上をさまよい歩くことになった。
まるで風に吹かれる枯葉みたいだった。
誘惑や欲世間と戦っているのだという陶酔感はなかった。
page 35

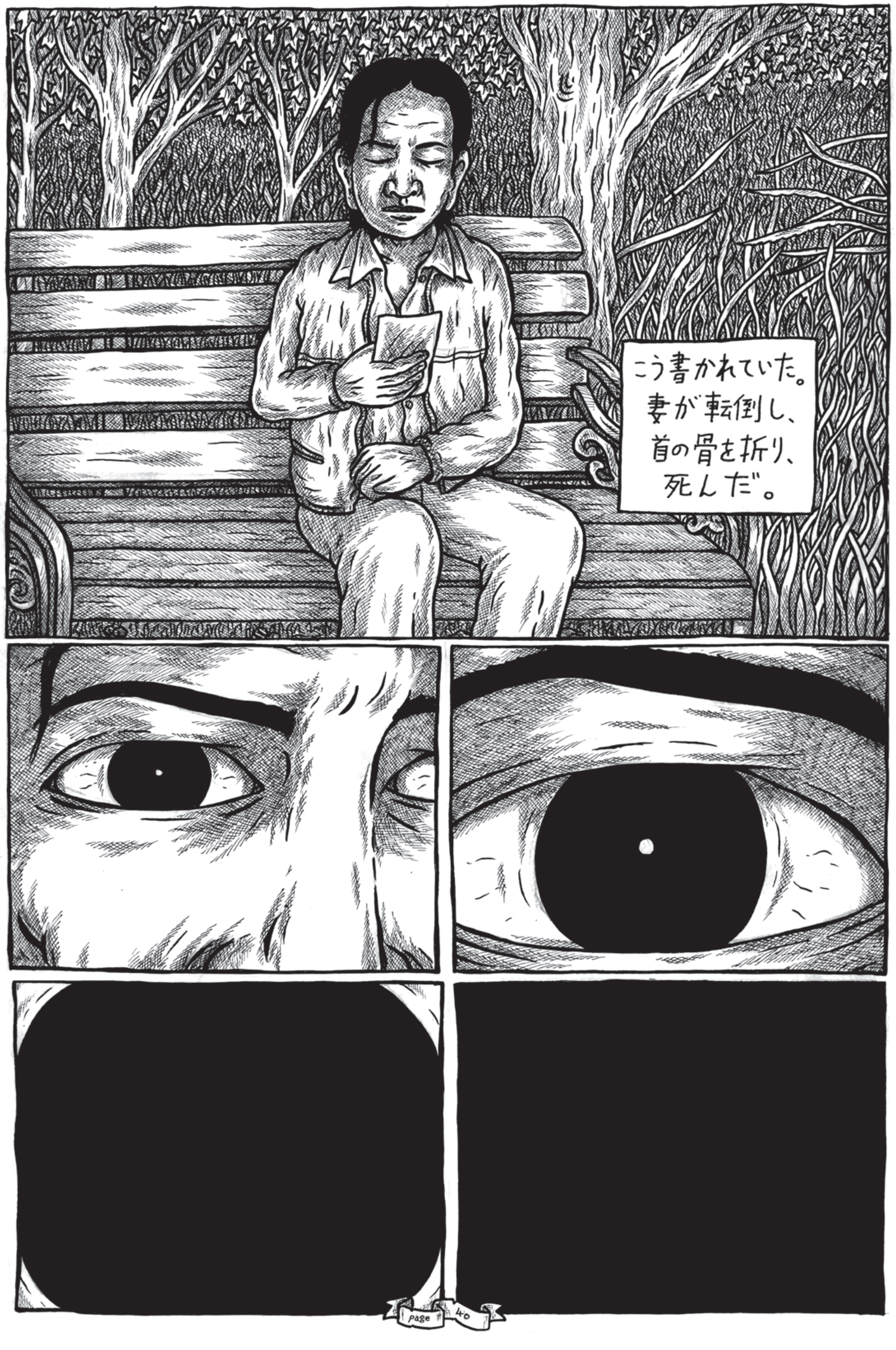

心の葛藤も、詩的な高ぶりも、何もなかった。
単純に意志というやつが枯れ果てていた。
日中は公園ですわっているか、大英博物館ですごした。
仕事をしているふりをしながら、隠語辞典を読んだ。ゴロツキや犯罪者たちが使っている…。
スラングを片っ端から。
page 36

私はよく電話ボックスに入り…。
女を買うことに興味はなかった。ただあの番号が私の目を引いた。
風俗チラシの電話番号をながめたものだ。
ただ数字を見つめつづけた。他にすることがなかった。
For Men
Swede Girl
NEW STUDENT
SEXY
24/7
V SEXY
NEW IN TOWN
Hotel/Home Visits
Spanking Fun With Sexy 19Yr Old
485 92
2 Minutes From Oxford Circus
ING
IF YOU DARE
実際、正気を失くしていた。
SPANKING
友人もなく… 家もなく… 夜は路上をさまよい歩いた。
…それがいつまでもつづいた。
page 37

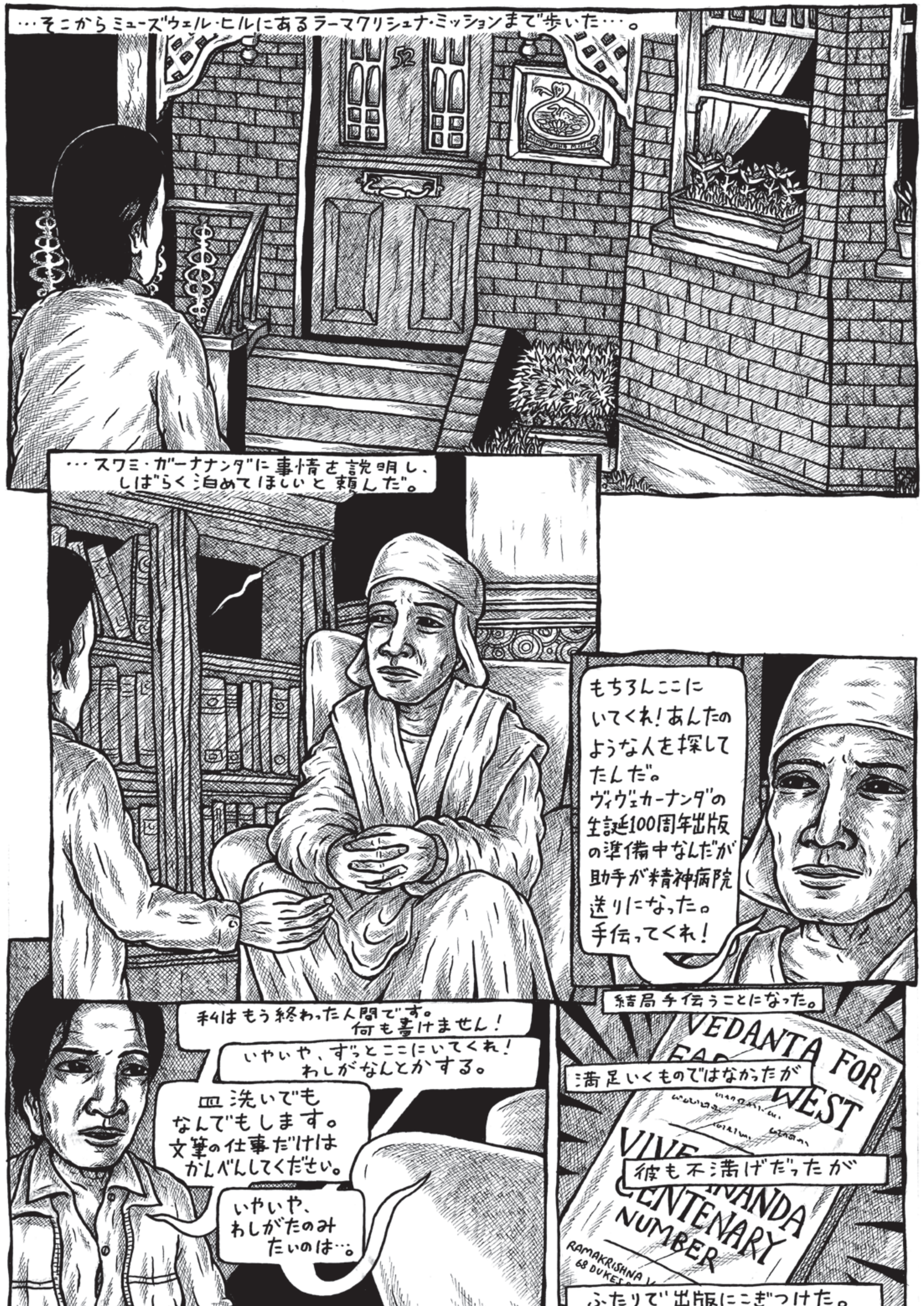


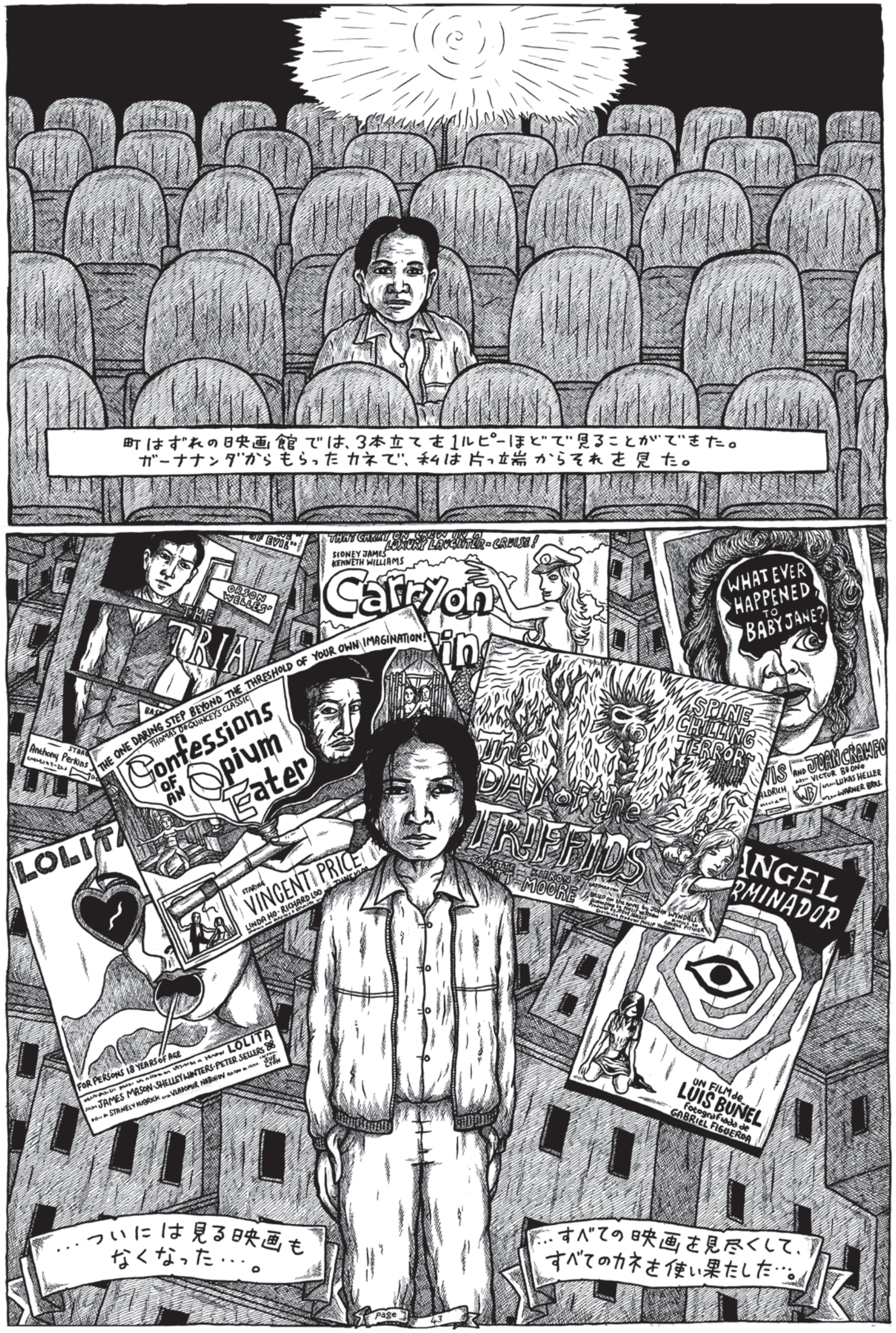
1964年J.クリシュナムルティとロンドンで再会した。根ほり葉ほり聞いてきた。
どうしてここに? 何をして? おカネはどこから?
私は何も答えられなかった。途中からあいつの顔を見ないようにした。
ひどい毎日だった。私は我が身に起こったことをやっと実感した。
まわりにたむろする犯罪者たちを見ていると泣けてきた。
page 38


妻からは時折手紙が届いた。インドに帰ってこいと書いてあった…。
妻はうつ病にかかっていた。入退院をくりかえし、電気けいれん療法を受けているという話だった。
ある日、妻ではない誰かから手紙が送られてきた…。

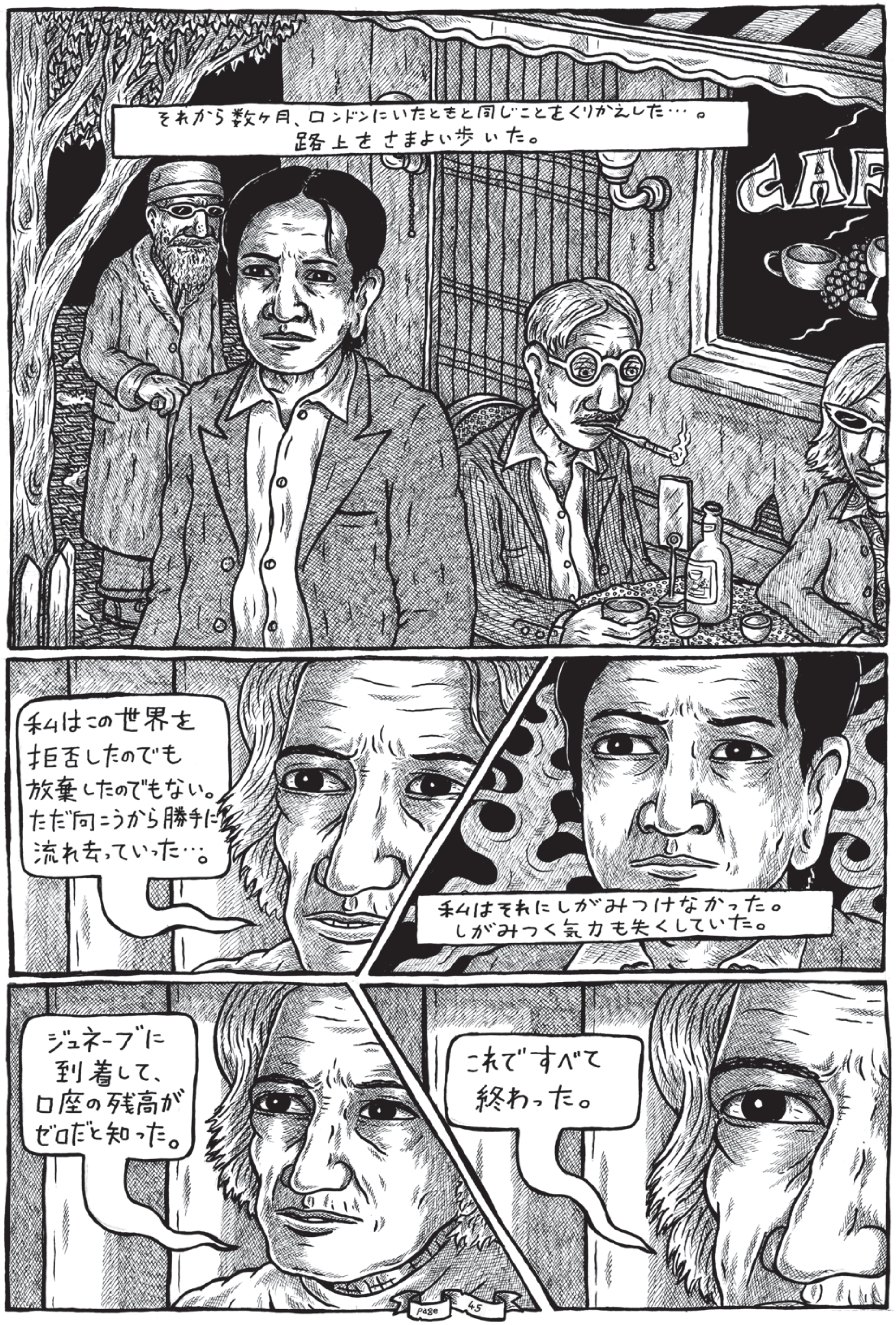

こう書かれていた。妻が転倒し、首の骨を折り、死んだ。

おい！帰るあてはないのか？
ない…です…。
ここはダメだ。イヤなら檻の中だ。
どこへ行けば？
何をすれば？
カネはなかった…。ポケットに5ペンスあったと思う。地下鉄で終点まで行った…。
GUARD ONLY
page 41


…そこからミューズウェル・ヒルにあるラーマクリシュナ・ミッションまで歩いた…。
…スワミ・ガーナナンダに事情を説明し、しばらく泊めてほしいと頼んだ。
もちろんここにいてくれ！あんたのような人を探してたんだ。ヴィヴェカーナンダの生誕100周年出版の準備中なんだが助手が精神病院送りになった。手伝ってくれ！
結局手伝うことになった。
私はもう終わった人間です。何も書けません！
いやいや、ずっとここにいてくれ！わしがなんとかする。
皿洗いでもなんでもします。文筆の仕事だけはかんべんしてください。
いやいや、わしがたのみたいのは…。
満足いくものではなかったが
VEDANTA FOR
WEST
彼も不満げだったが
CENTENARY
NUMBER
ふたりで出版にこぎつけた。
page 42

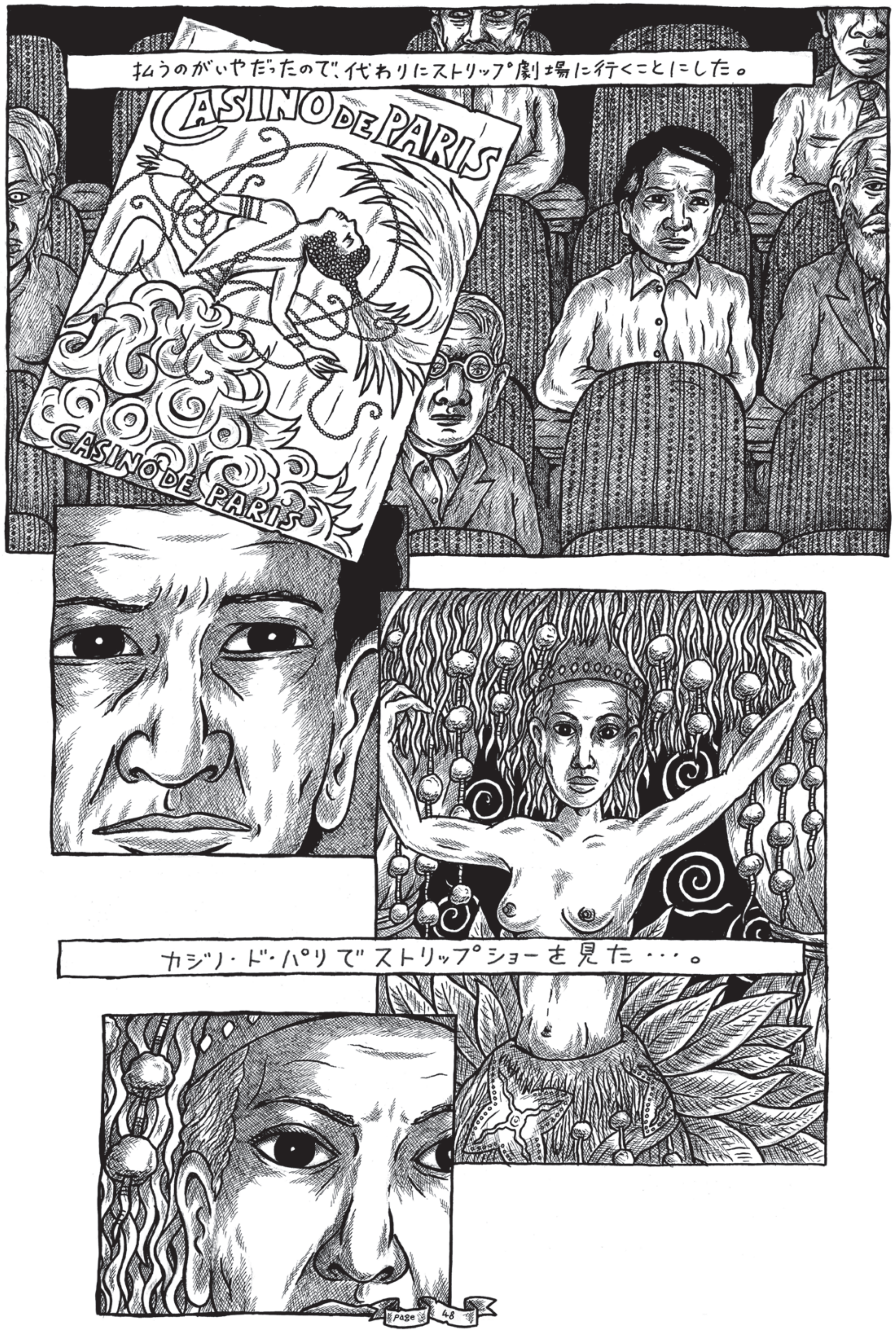

町はずれの映画館では、3本立てを1ルピーほどで見ることができた。
ガーナナンダからもらったカネで、私は片っ端からそれを見た。
THE TRIAL
Carry on
WHAT EVER HAPPENED TO BABY JANE?
THE ONE DARING STEP BEYOND THE THRESHOLD OF YOUR OWN IMAGINATION!
Confessions OF AN Opium Eater
VINCENT PRICE
SPINE CHILLING TERROR
The DAY of the TRIFFIDS
LOLITA
FOR PERSONS 18 YEARS OF AGE
ANGEL EXTERMINADOR
UN FILM de LUIS BUÑEL
…ついには見る映画もなくなった…。
…すべての映画を見尽くして、すべてのカネを使い果たした…。

ラーマクリシュナ・センターからの施し物と、
時々インド料理を教えたり、タロット占いをしたりして食いつないだ。
LA MAISON DE DIEU
XVI
LA MORT
XIII
PENDU
XII
LE DIABLE
XV
LA LUNE
それでも生活はどんどんキツくなった。万引きをして捕まったあと、私はイギリスを出てジュネーブに向かった。
ジュネーブ…？
私の古い銀行口座にカネが残っているかもしれないと思ったからだ。
だが手ちがいからパリで足止めを食らうハメになった。そこにしばらくいた。

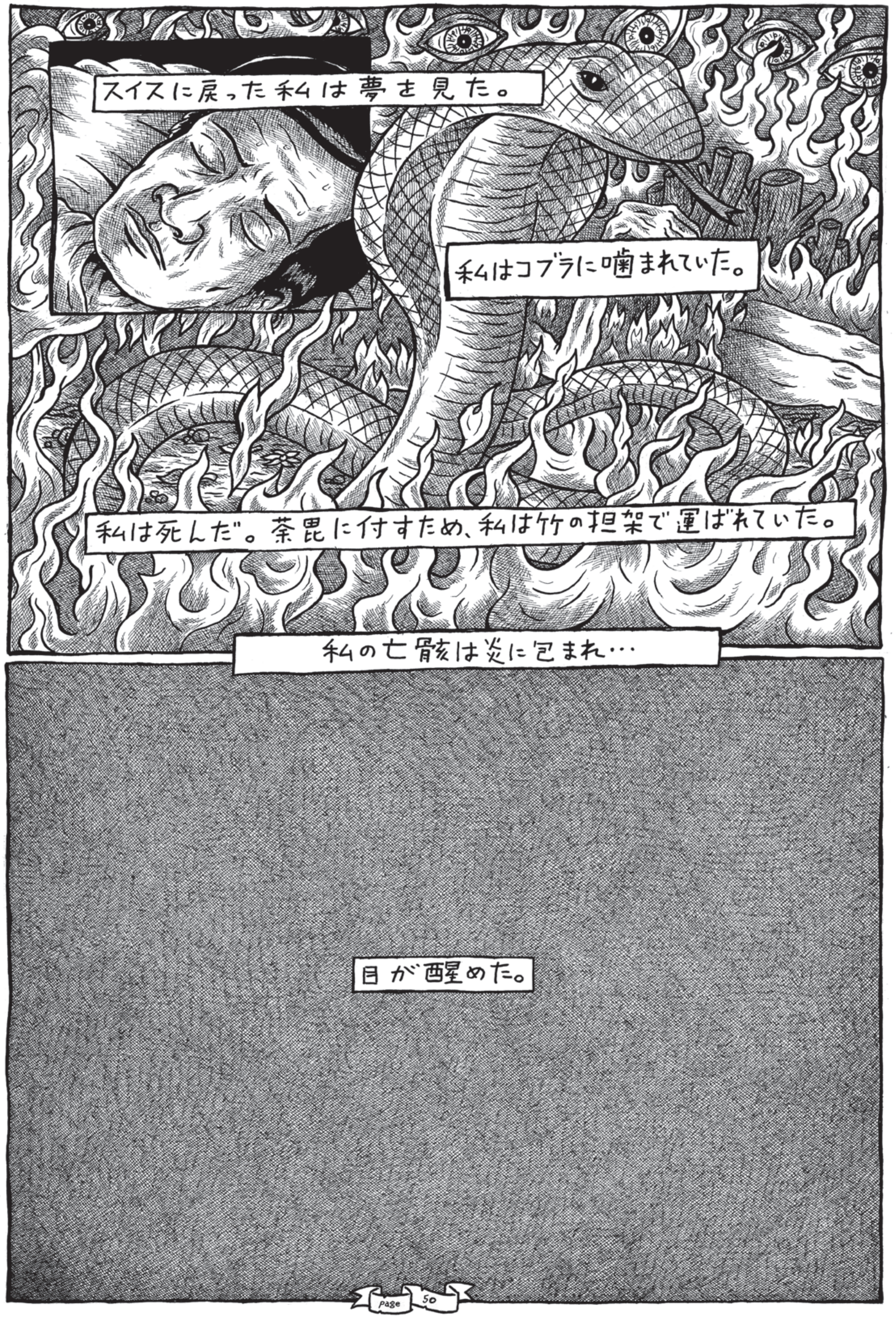

それから数ヶ月、ロンドンにいたときと同じことをくりかえした…。
路上をさまよい歩いた。
CAF
私はこの世界を拒否したのでも放棄したのでもない。ただ向こうから勝手に流れ去っていった…。
私はそれにしがみつけなかった。
しがみつく気力も失くしていた。
ジュネーブに到着して、口座の残高がゼロだと知った。
これですべて終わった。

インドには帰りたくなかった。子どもたちに会うのが怖かった。だが他に行くところがなかった。インド大使館に行って帰国したいと相談した。私は結局インド人だった。その事実からは逃れられなかった…。
INDIA
菩提樹の下にでもすわっていれば、誰かが食べ物をめぐんでくれるだろう。

私の経歴を知った領事は、私をすんなり帰国させることを渋った。彼は助手兼翻訳事務のヴァレンティン・ド・カーヴァンに助言を求めた。60代前半のスイス人だった。
話をしているうちに仲良くなった。
ヴァレンティンは仕事を辞めた。1964年の夏、私たちはスイスのザーネンという村で築300年のバンガローを借りた。
数年たって再びパリに行く機会があった。J.クリシュナムルティも偶然そこにいた。話を聞きにいこうと友人に誘われた。
おひとり2フランです。
TALKS
ところが行ったら入場料が必要だった。


払うのがいやだったので、代わりにストリップ劇場に行くことにした。
CASINO DE PARIS
CASINO DE PARIS
カジノ・ド・パリでストリップショーを見た・・・。

舞台の上でダンサーが踊っているのか・・・
それとも私が踊っているのか・・・
区別がつかなかった。ダンサーを見ているのは私でも誰でもなかった。

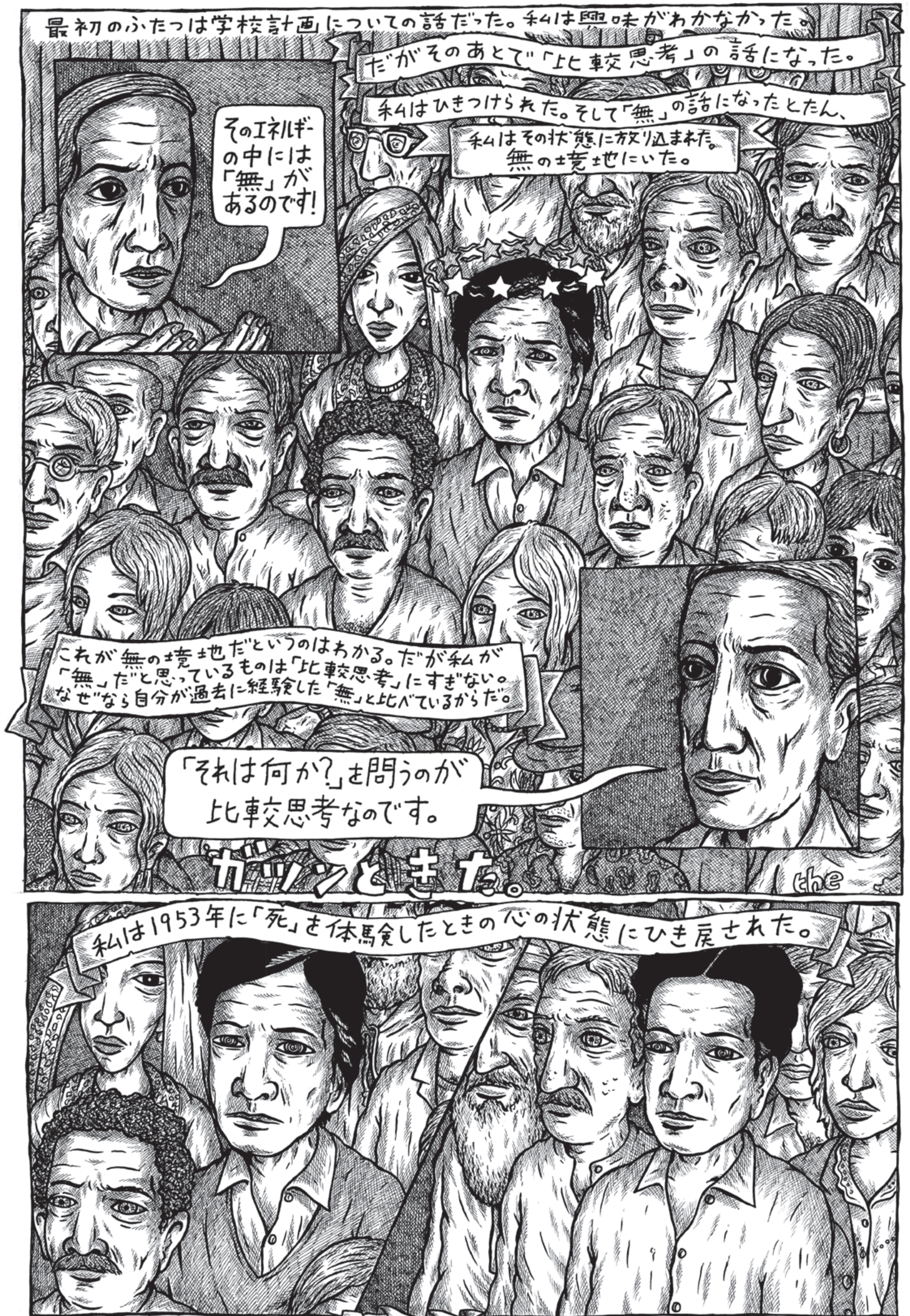

スイスに戻った私は夢を見た。
私はコブラに噛まれていた。
私は死んだ。荼毘に付すため、私は竹の担架で運ばれていた。
私の亡骸は炎に包まれ・・・
目が醒めた。

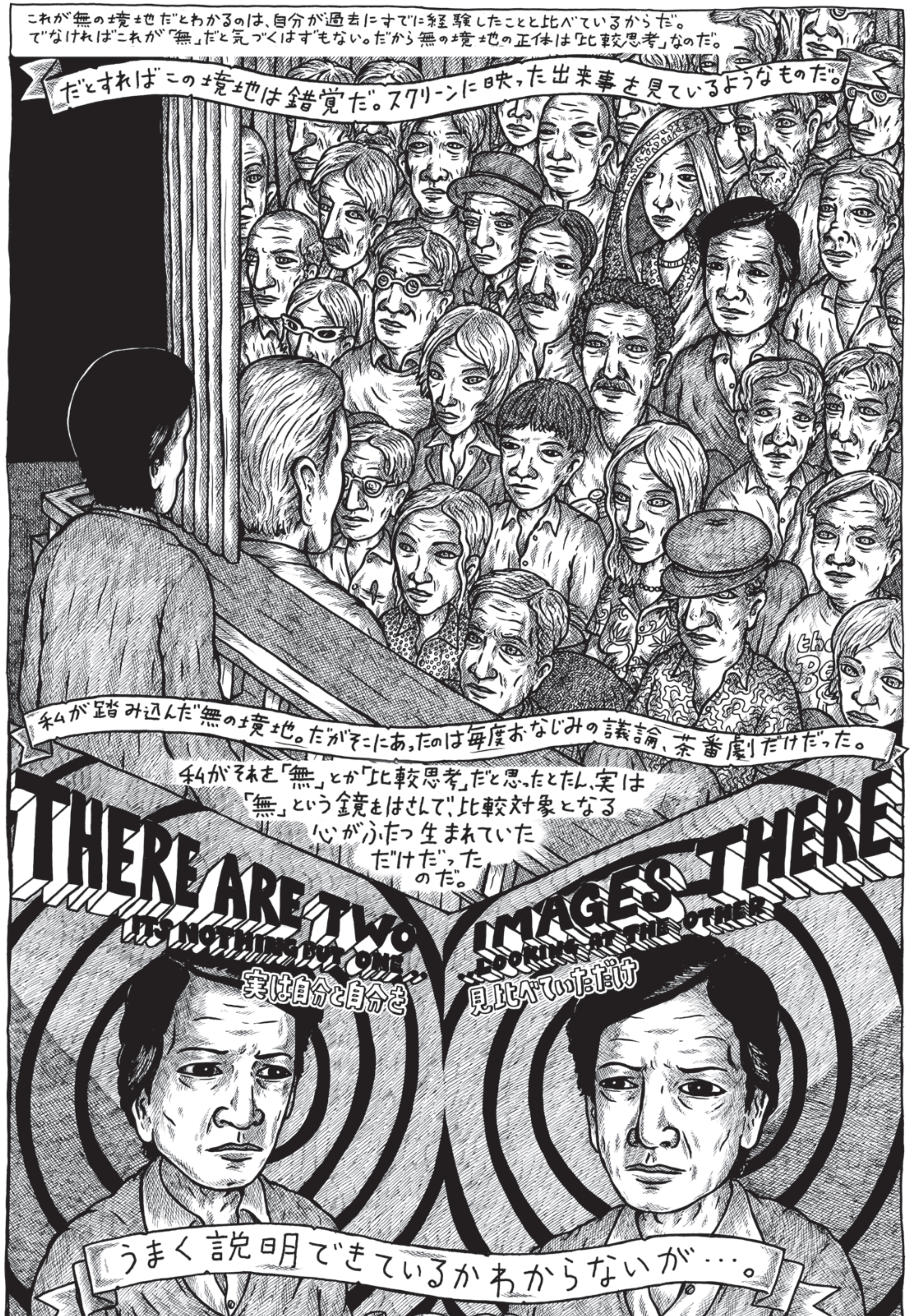
PART 2

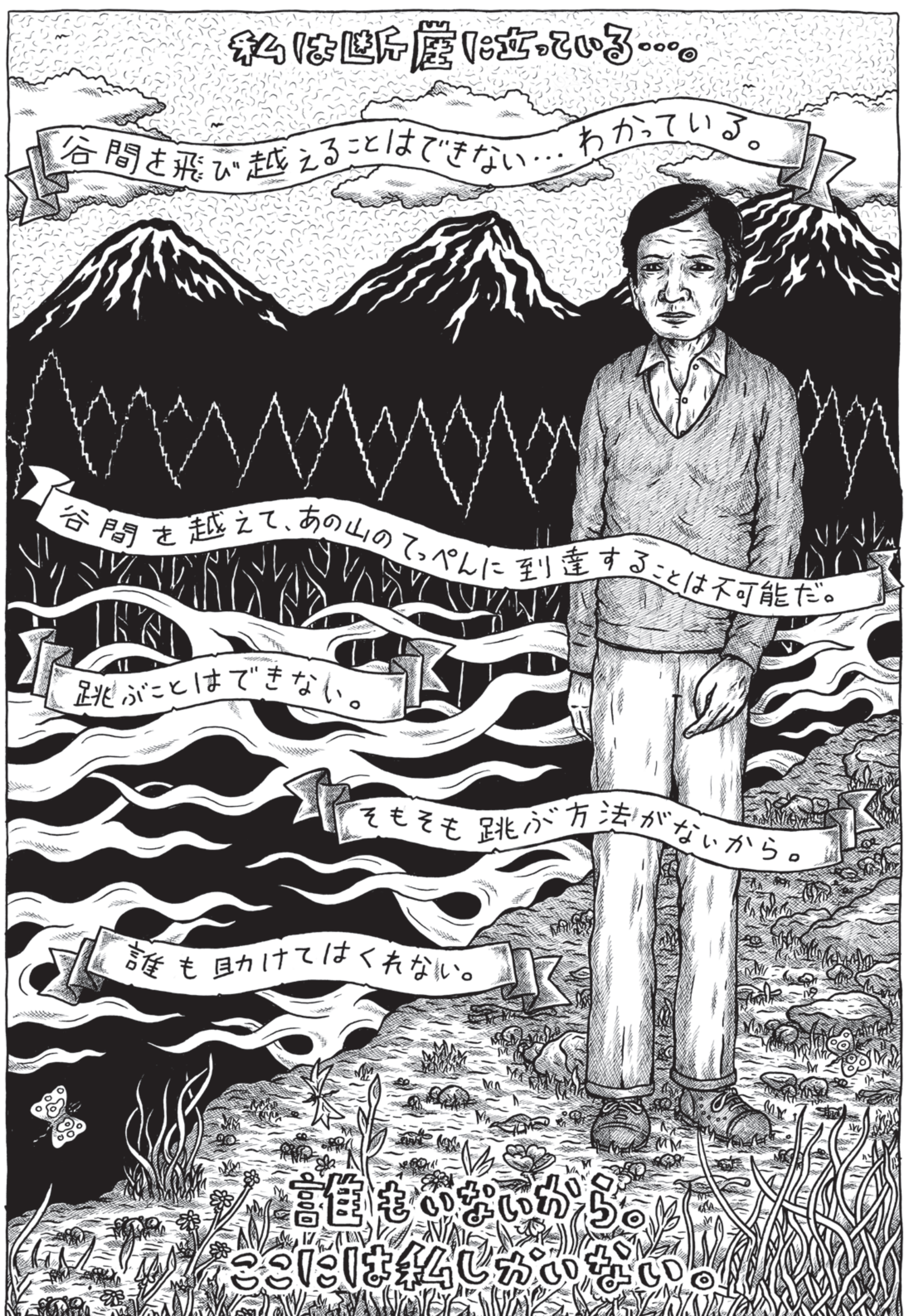
災難

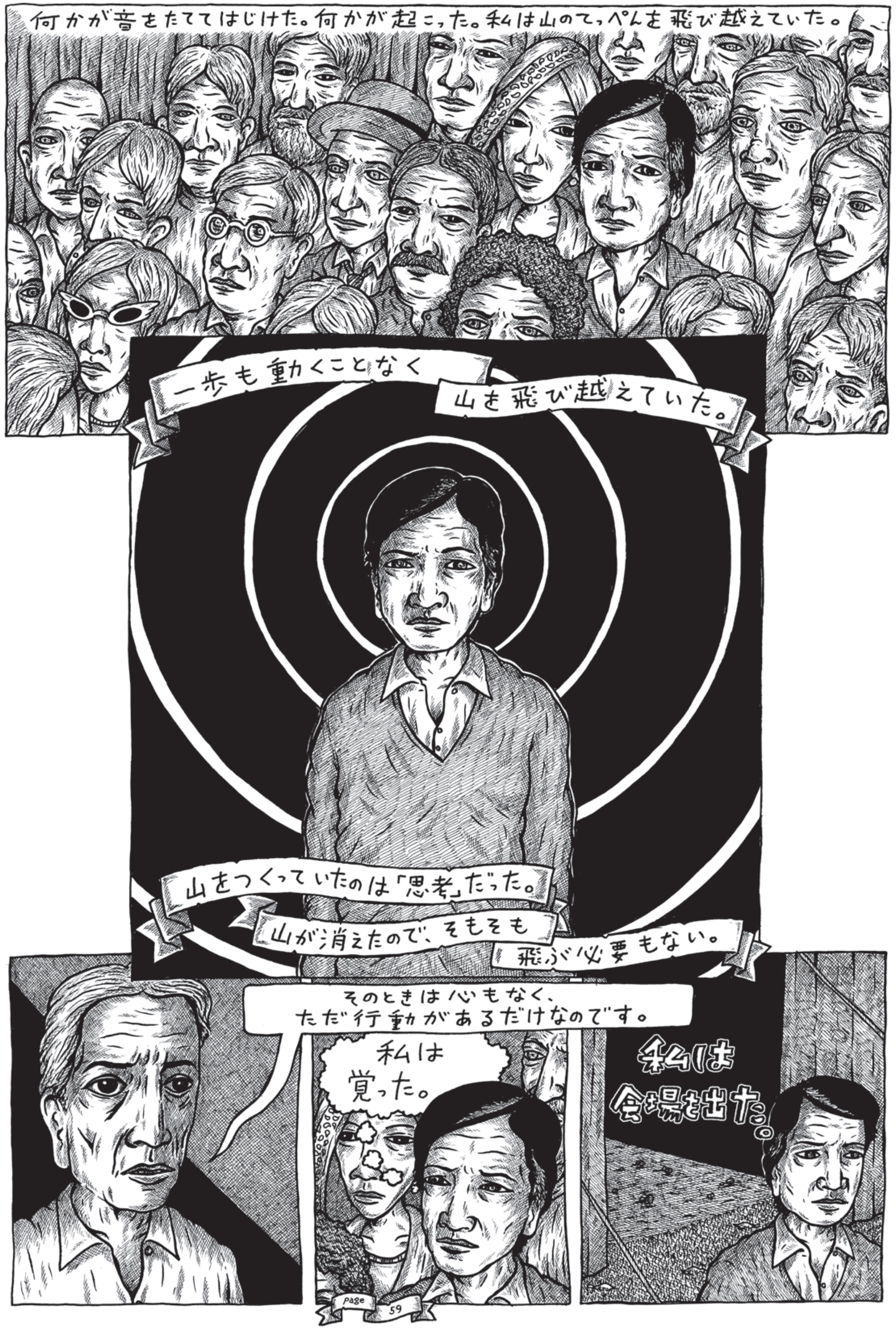
それから数年間、ヴァレンティンといっしょに静かに暮らした。
なんの予定もなかった。
関心事もなかった。
真理や真実の類について
話し合ったことは一度もなかった。
1966年頃から、自分の中で何か奇妙な
ことが起こっているのを感じるようになった。

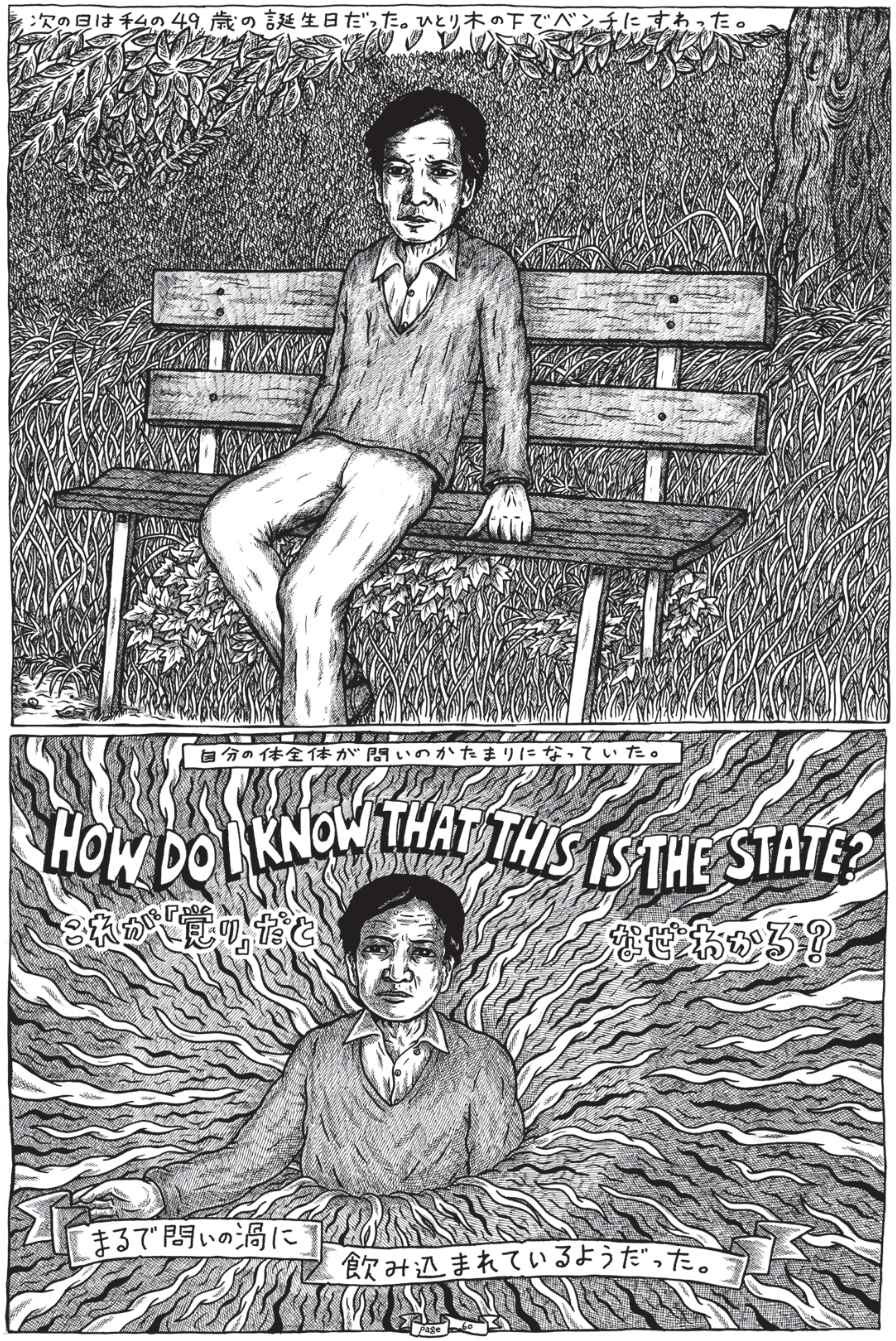
アスピリンを何千錠のんだかわからない。だが全然効かなかった。
四六時中、頭痛に悩まされるようになった。ひどい痛みだった。
パリから戻った2ヶ月後、J.クリシュナムルティがザーネンにやってきてテントで講演した。今度は無料だった。友人に無理やりつれていかれた。

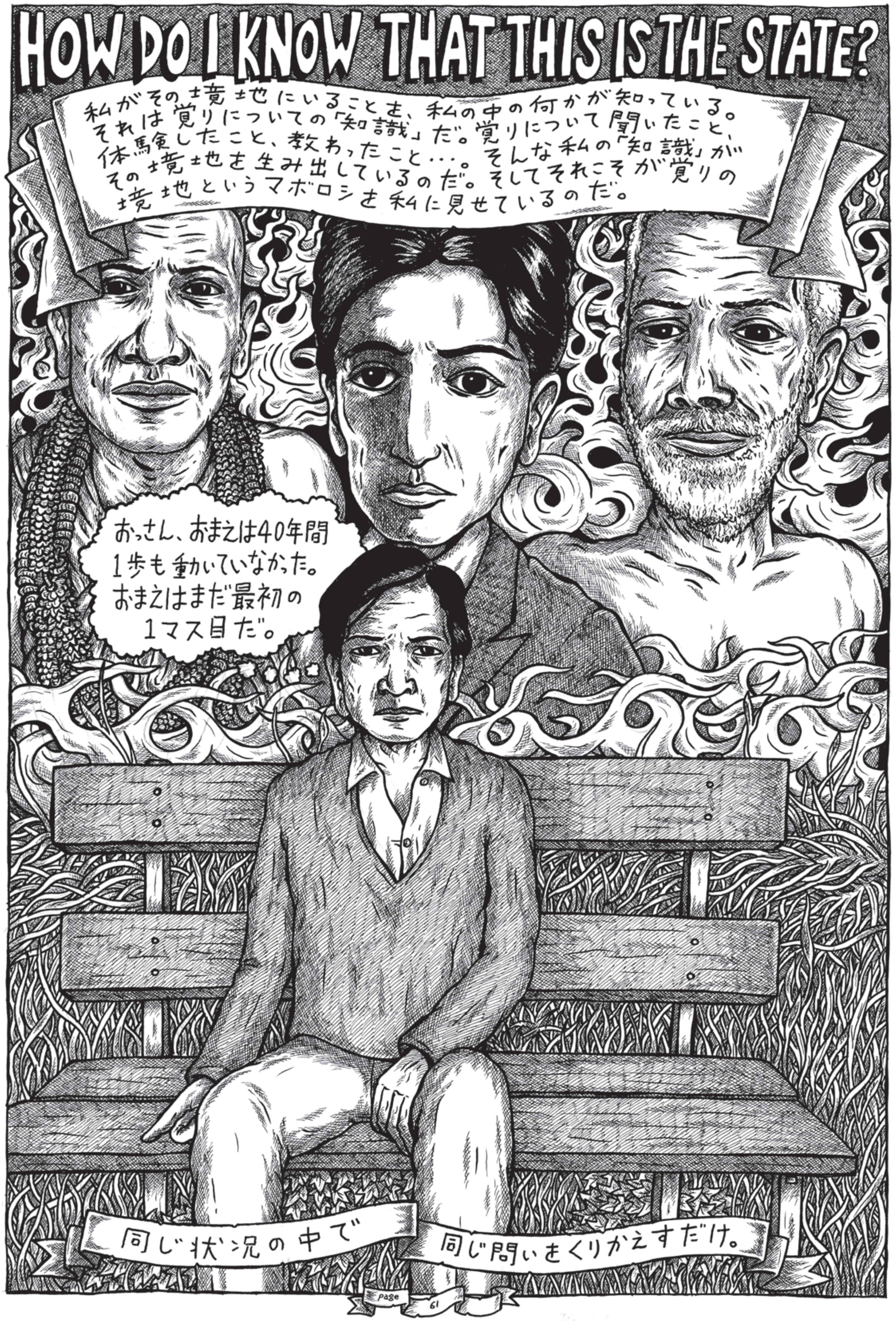

最初のふたつは学校計画についての話だった。私は興味がわかなかった。
だがそのあとで「比較思考」の話になった。
その エネルギーの中には「無」があるのです!
私はひきつけられた。そして「無」の話になったとたん、
私はその状態に放り込まれた。無の境地にいた。
これが無の境地だというのはわかる。だが私が「無」だと思っているものは「比較思考」にすぎない。なぜなら自分が過去に経験した「無」と比べているからだ。
「それは何か?」を問うのが比較思考なのです。
ガツンときた。
私は1953年に「死」を体験したときの心の状態にひき戻された。

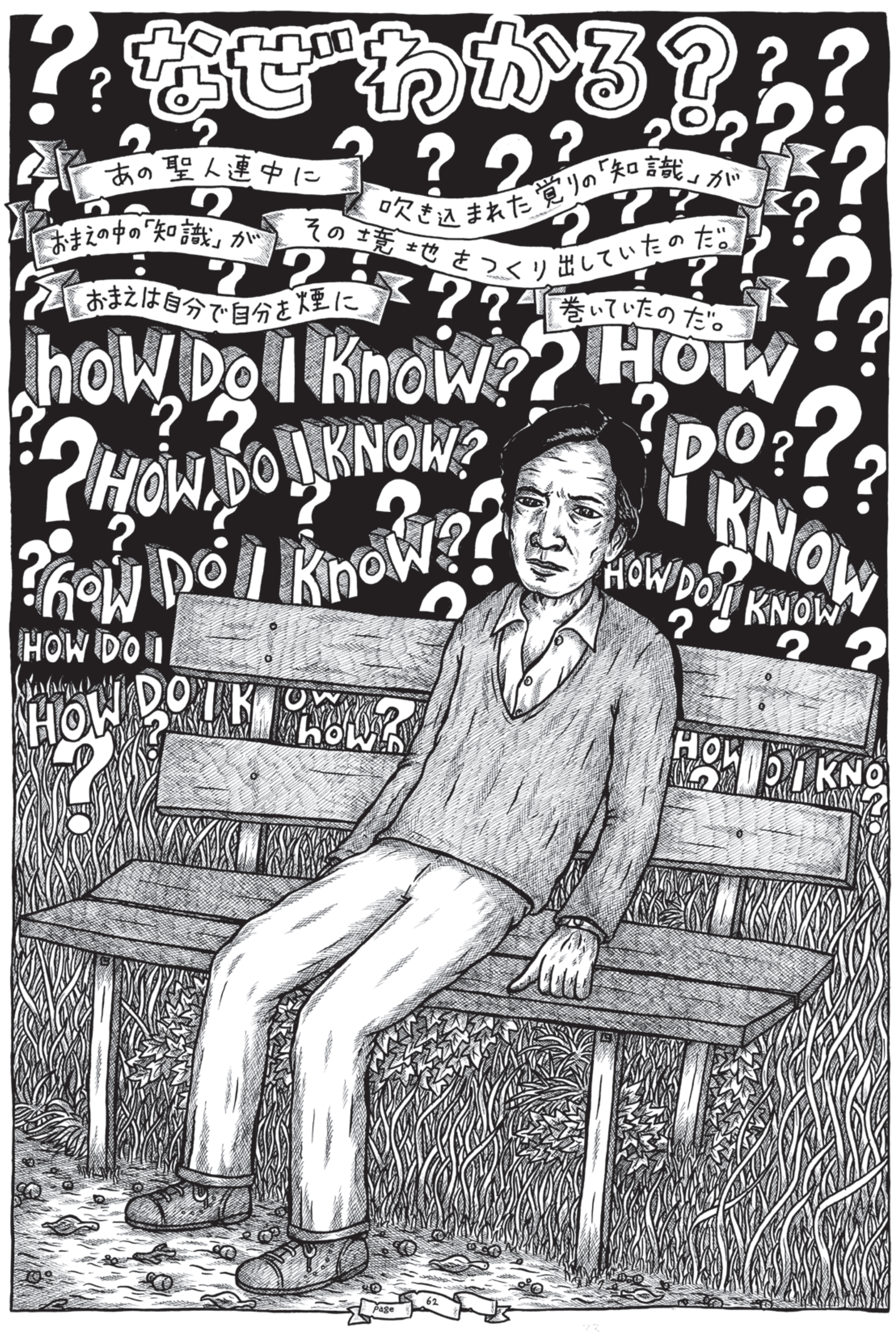

これが無の境地だとわかるのは、自分が過去にすでに経験したことと比べているからだ。
でなければこれが「無」だと気づくはずもない。だから無の境地の正体は「比較思考」なのだ。
だとすればこの境地は錯覚だ。スクリーンに映った出来事を見ているようなものだ。
私が踏み込んだ無の境地。だがそこにあったのは毎度おなじみの議論、茶番劇だけだった。
私がそれを「無」とか「比較思考」だと思ったとたん、実は「無」という鏡をはさんで、比較対象となる心がふたつ生まれていただけだったのだ。
THERE ARE TWO IMAGES THERE
"IT'S NOTHING BUT ONE ... LOOKING AT THE OTHER"
実は自分と自分を見比べていただけ
うまく説明できているかわからないが…。

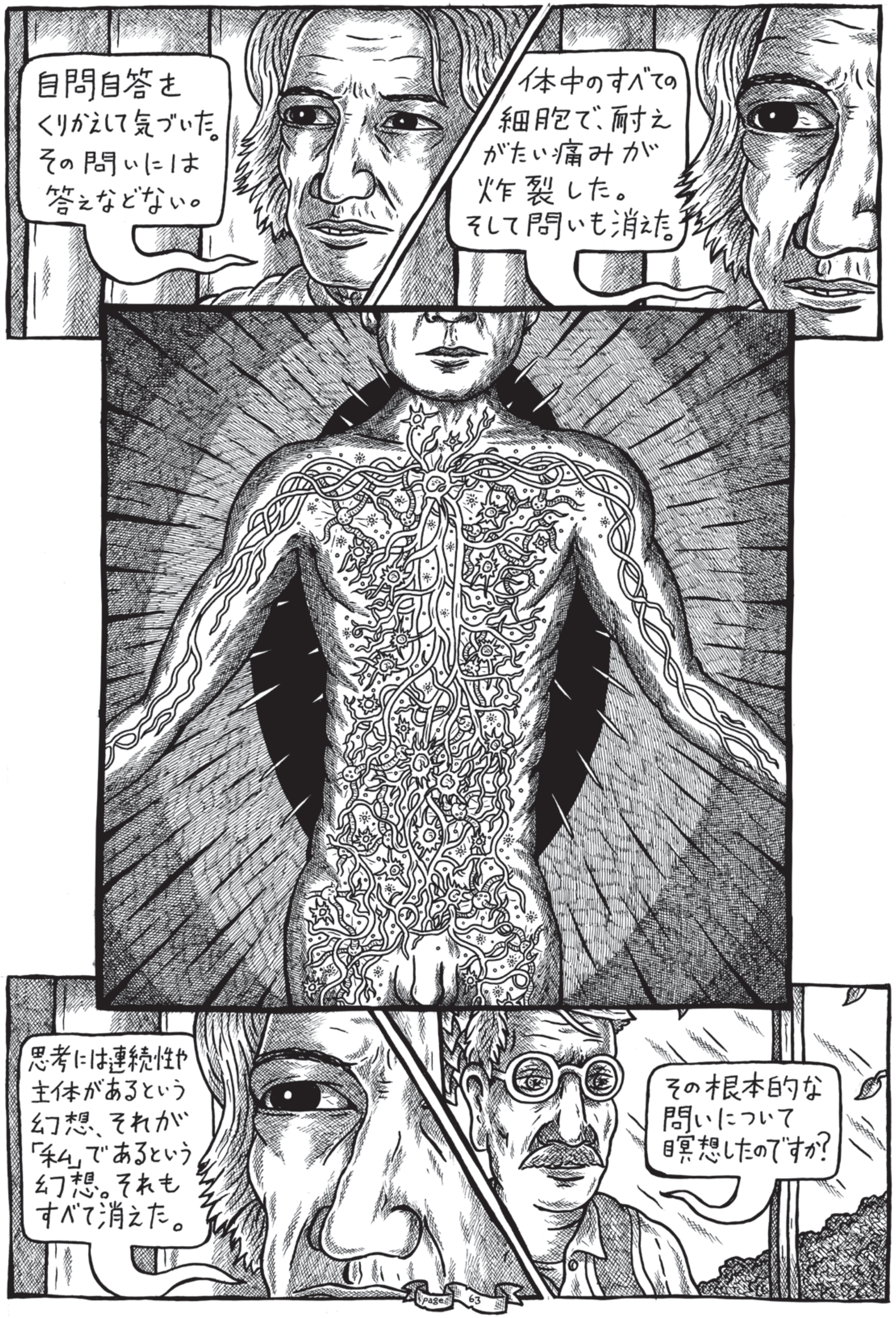

私は断崖に立っている…。
谷間を飛び越えることはできない…わかっている。
谷間を越えて、あの山のてっぺんに到達することは不可能だ。
跳ぶことはできない。
そもそも跳ぶ方法がないから。
誰も助けてはくれない。
誰もいないから。
ここには私しかいない。


何かが音をたててはじけた。何かが起こった。私は山のてっぺんを飛び越えていた。
一歩も動くことなく
山を飛び越えていた。
山をつくっていたのは「思考」だった。
山が消えたので、そもそも
飛ぶ必要もない。
そのときは心もなく、
ただ行動があるだけなのです。
私は
覚った。
私は
会場を出た。


次の日は私の49歳の誕生日だった。ひとり木の下でベンチにすわった。
自分の体全体が問いのかたまりになっていた。
HOW DO I KNOW THAT THIS IS THE STATE?
これが「覚り」だと
なぜわかる？
まるで問いの渦に
飲み込まれているようだった。


HOW DO I KNOW THAT THIS IS THE STATE?
私がその境地にいることを、私の中の何かが知っている。それは覚りについての「知識」だ。覚りについて聞いたこと、体験したこと、教わったこと…。そんな私の「知識」がその境地を生み出しているのだ。そしてそれこそが覚りの境地というマボロシを私に見せているのだ。
おっさん、おまえは40年間1歩も動いていなかった。おまえはまだ最初の1マス目だ。
同じ状況の中で
同じ問いをくりかえすだけ。
page 61


なぜわかる？
あの聖人連中に
吹き込まれた覚りの「知識」が
おまえの中の「知識」が
その境地をつくり出していたのだ。
おまえは自分で自分を煙に
巻いていたのだ。
hoW Do I KnoW?
HOW DO I KNOW
HOW, DO I KNOW?
hoW Do I KnoW?
HOW DO I KNOW
page 62


自問自答をくりかえして気づいた。その問いには答えなどない。
体中のすべての細胞で、耐えがたい痛みが炸裂した。そして問いも消えた。
思考には連続性や主体があるという幻想、それが「私」であるという幻想。それもすべて消えた。
その根本的な問いについて瞑想したのですか？

瞑想もクソもない。何もしていない。単純に問いが消えただけだ…。
BURNED ITSELF OUT
問いが自らを焼き尽くした。
「ついに答えを見つけた」という感動もない。私が体験し、ブッダやイエスも体験したとかいうあの「覚り」の感覚も消えていた。問いは消え、二度とよみがえることはなかった。なぜなら、もはやどんな問いも留まる余地がないからだ。空虚感も欠落感も喪失感もない。問いが突然消え、それでおしまいだ。
あとに残ったのは、この世界で生活するために必要なとてもカンタンな問いだけだ…。
すいません、空港はどっちですか？
すべての形而上学的な問いが消え失せた。

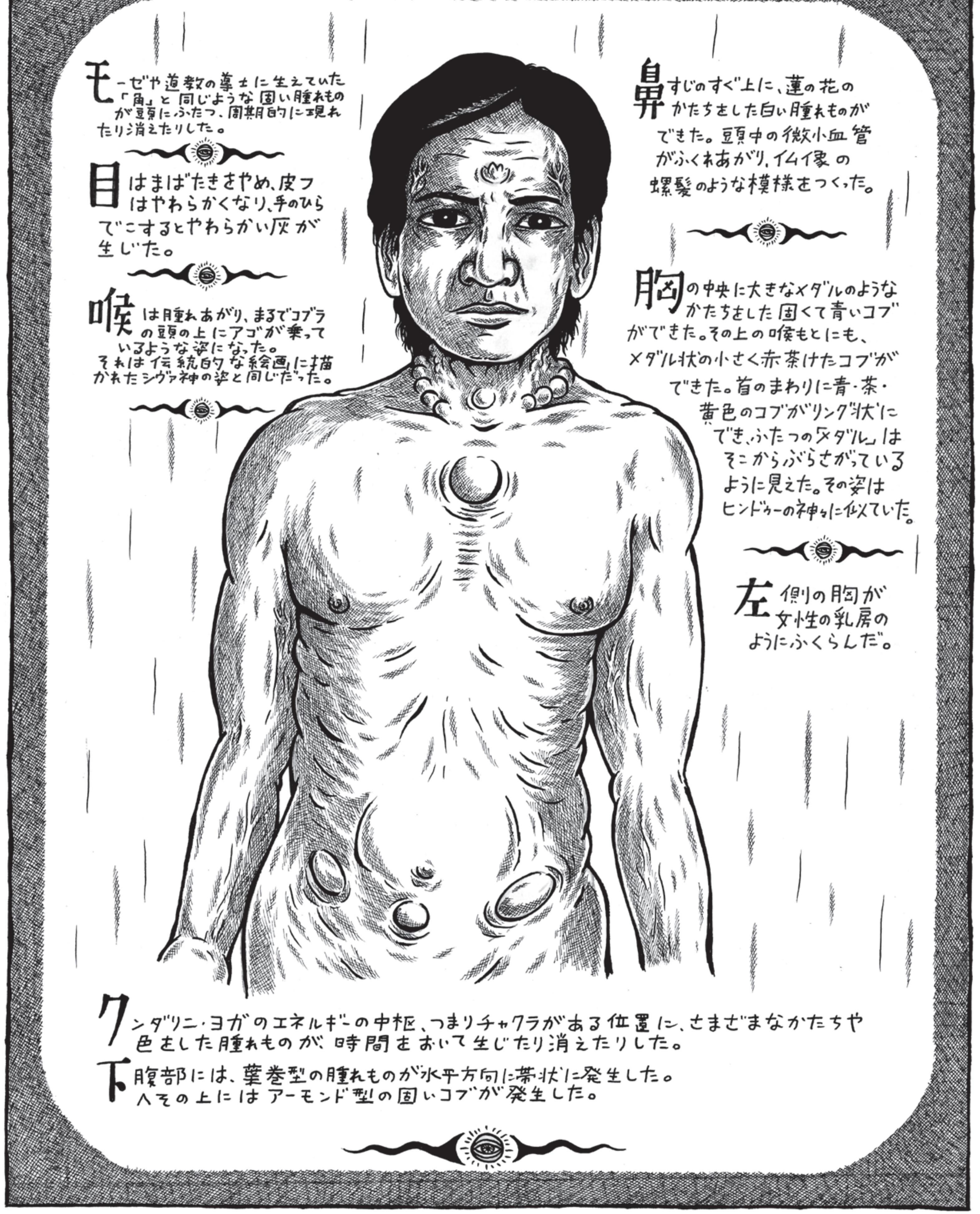
誕生日の翌日、きのう自分に起こったことを思い出そうとした。だが何も心に浮かんでこなかった。
記憶もイメージも、きのうもなかった。
ヴァレンティンがトマトスープをつくってくれた。見ても何かわからなかった。
トマトスープよ。
むむ…たしかに！味におぼえがある。
なんだっけ？
どんなにおいも同じに感じられて不快だった。区別できなかった。食べても主成分の味しかわからなかった。
私の五感はまとめ役を失ってバラバラに働いているようだった。当時は非常に違和感があったが、今では慣れてしまった。

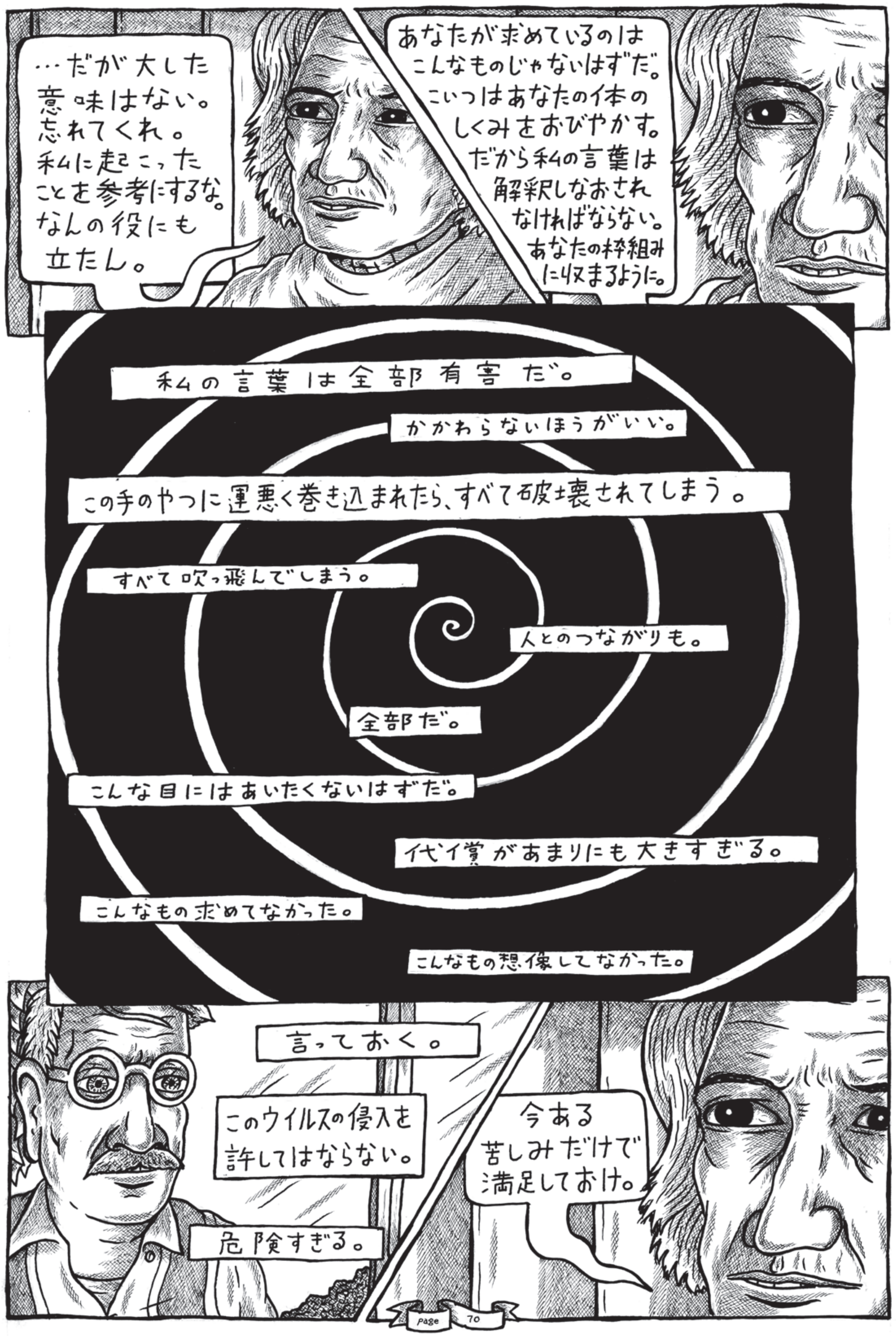
聴覚も変わった。バンガローがきしむ音がちがって聞こえた。犬が吠える声も、自分の中から響いてくるように感じた。すべての音が私の内部から聞こえてきた。今でもそうだ。
WOOF WOOF WOOF
WOOF
WOOF
WOOF WOOF WOOF
ヴァレンティンが部屋に入ってくる。私は彼女だと気づく…。
だが台所に行ってしまうと…。
FINISH
以上！
あとは空白のみ。彼女は存在せず、どんな姿だったかも思い出せなかった。
CLANG
BANG
CLANG

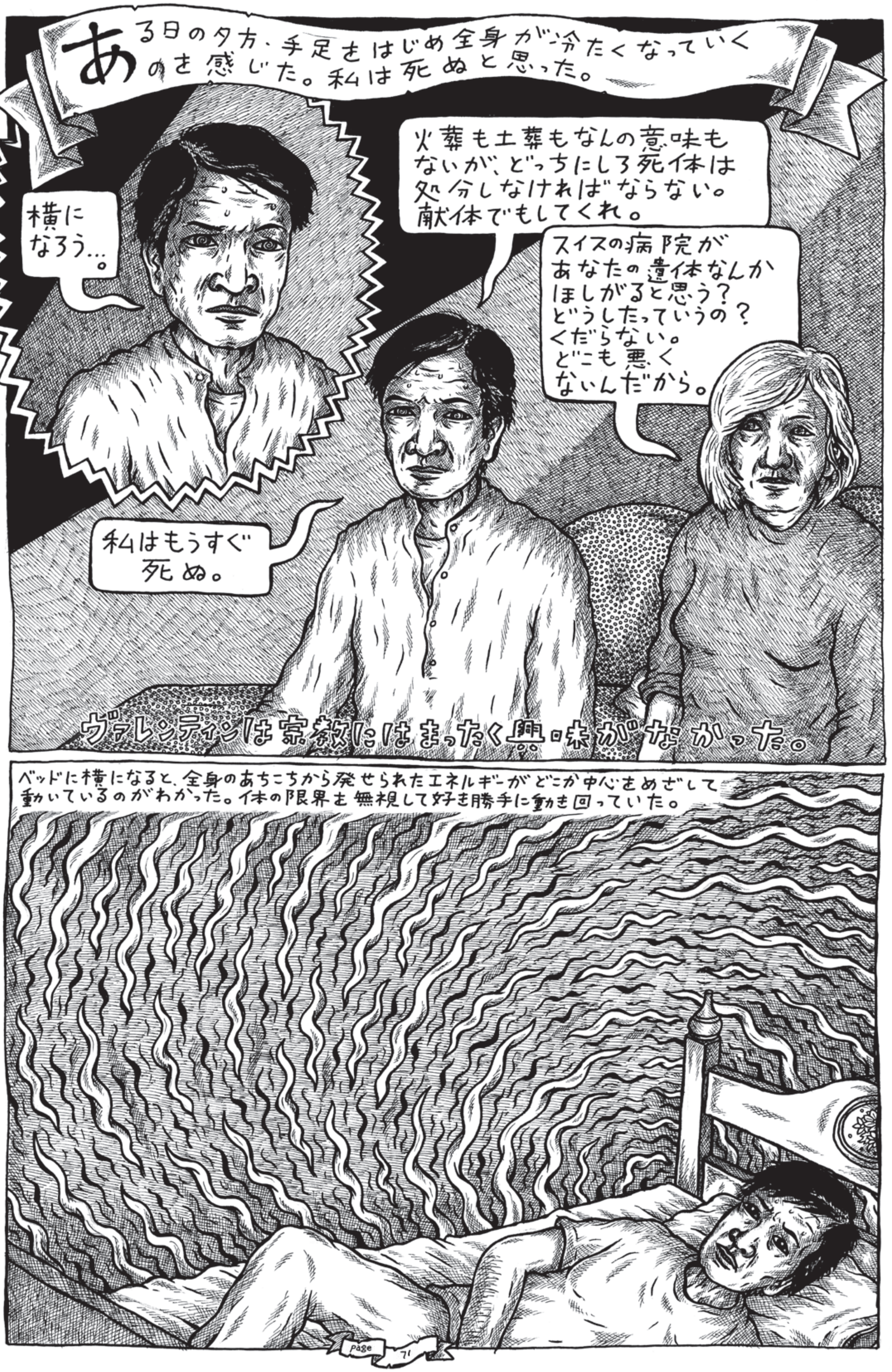
私の中から聞こえてくる
この音はなんだ？
CLANG BANG CLANG CLANG
何が起こっているのかわからなかった。まとめ役を失くした五感が
好き勝手に働き、ひとつにむすびつけることができなかった。
私の体は消えていた。自分で自分の体をさわると、その
さわったところだけ感じることができた。これはいまも元に戻っていない。
ヴァレンティンを呼んだ・・・。
私の体が
見えるか？
ええ。

視覚もおかしくなった。まるで頭の後ろに凹面鏡がついていて、
そこからパノラマ写真を見ているようだった。私は混乱した。
こんな異変が、災難が、
7日間つづいた。
どうして災難と
呼ぶんですか？
私にとっては
災難ではない。
だが、もっと
すばらしいことを
期待していた
連中にとっては
災難だろう。
肉体的変化
もありましたか？
ああ。頭と首に
腫れものができ
た。左の胸が
ふくらんできた…。

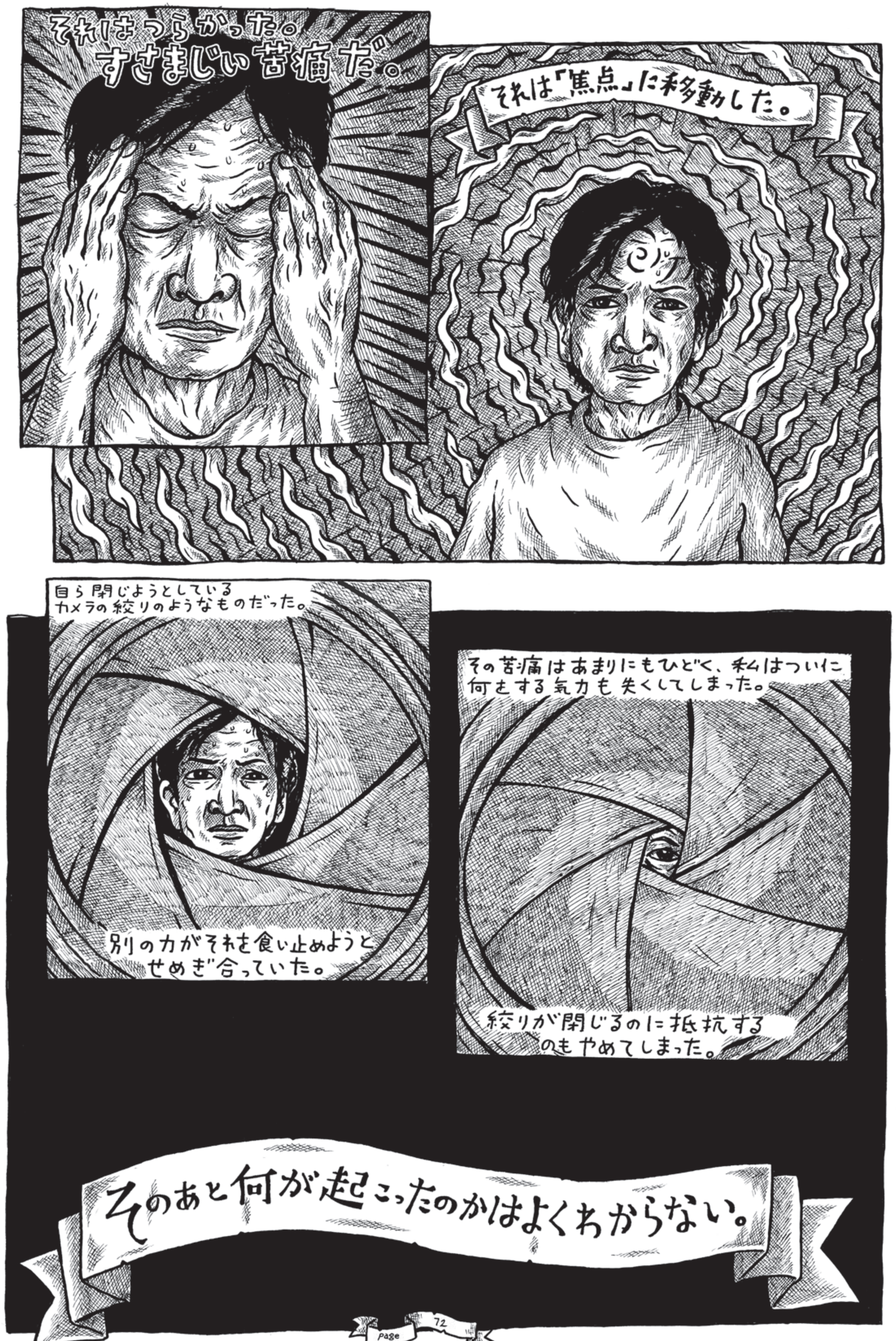
U.G.クリシュナムルティに現れた 肉体的変化





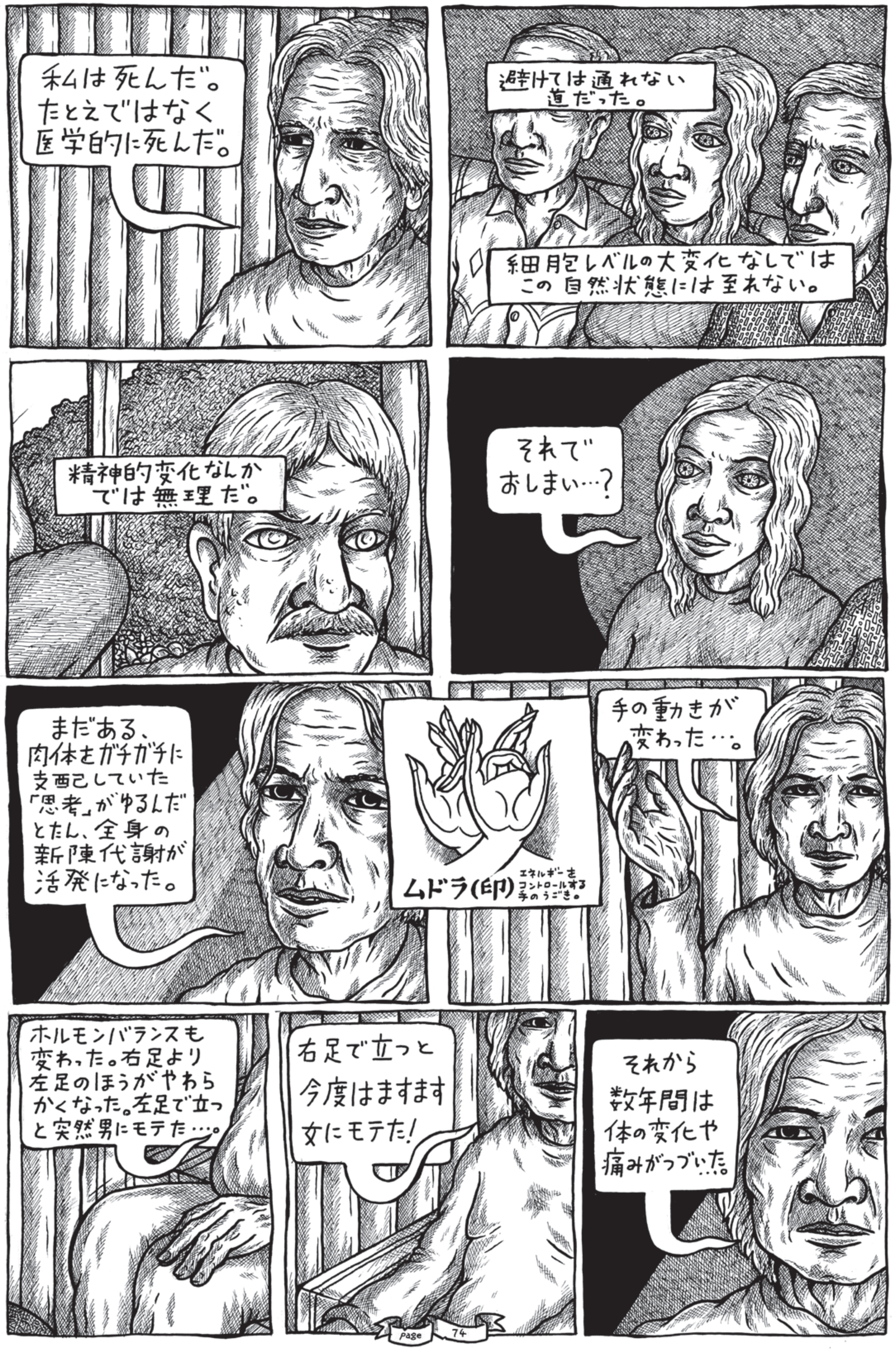


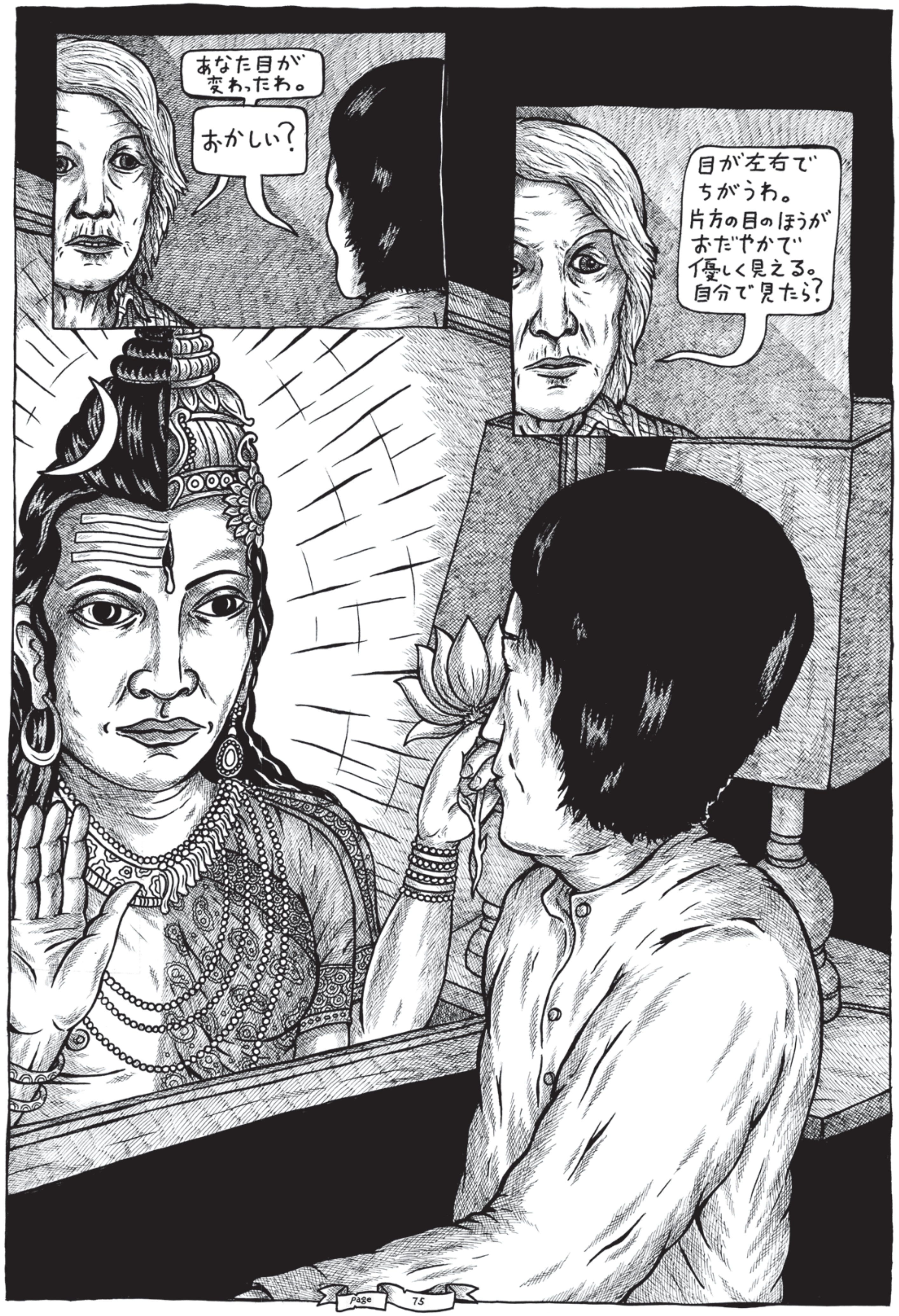
ある日の夕方、手足をはじめ全身が冷たくなっていくのを感じた。私は死ぬと思った。
横になろう…。
火葬も土葬もなんの意味もないが、どっちにしろ死体は処分しなければならない。献体でもしてくれ。
スイスの病院があなたの遺体なんかほしがると思う？どうしたっていうの？くだらない。どこも悪くないんだから。
私はもうすぐ死ぬ。
ヴァレンティンは宗教にはまったく興味がなかった。
ベッドに横になると、全身のあちこちから発せられたエネルギーがどこか中心をめざして動いているのがわかった。体の限界も無視して好き勝手に動き回っていた。



それはつらかった。すさまじい苦痛だ。
それは「焦点」に移動した。
自ら閉じようとしているカメラの絞りのようなものだった。
別の力がそれを食い止めようとせめぎ合っていた。
その苦痛はあまりにもひどく、私はついに何もする気力も失くしてしまった。
絞りが閉じるのに抵抗するのもやめてしまった。
そのあと何が起こったのかはよくわからない。

私は死んだ…
RING RING RING RING
もしもし
UG! ダグラスさんから お電話!

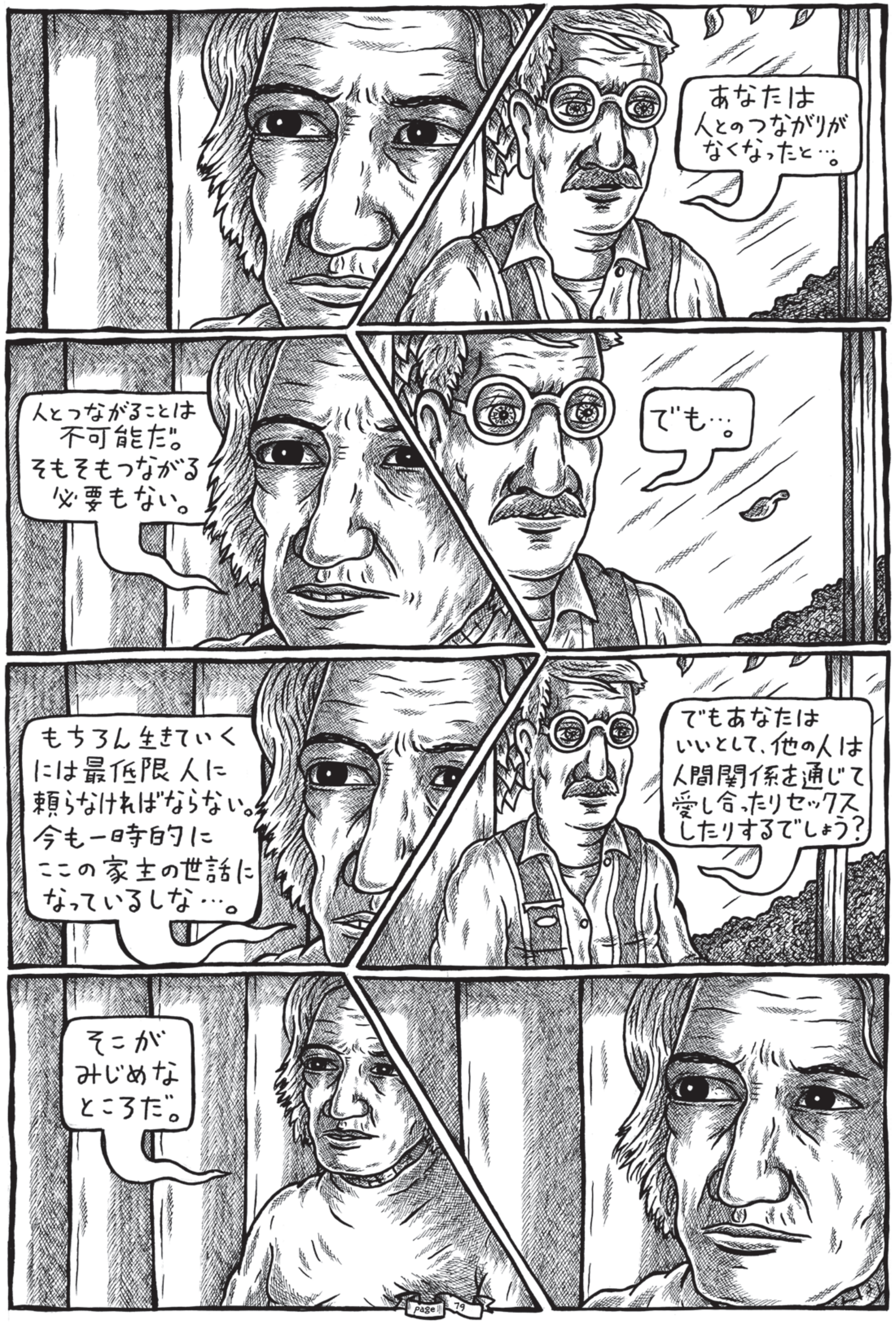

私は死んだ。たとえではなく医学的に死んだ。
避けては通れない道だった。
細胞レベルの大変化なしではこの自然状態には至れない。
精神的変化なんかでは無理だ。
それでおしまい…?
まだある、肉体をガチガチに支配していた「思考」がゆるんだとたん、全身の新陳代謝が活発になった。
ムドラ(印)
エネルギーをコントロールする手のうごき。
手の動きが変わった…。
ホルモンバランスも変わった。右足より左足のほうがやわらかくなった。左足で立つと突然男にモテた…。
右足で立つと今度はますます女にモテた!
それから数年間は体の変化や痛みがつづいた。

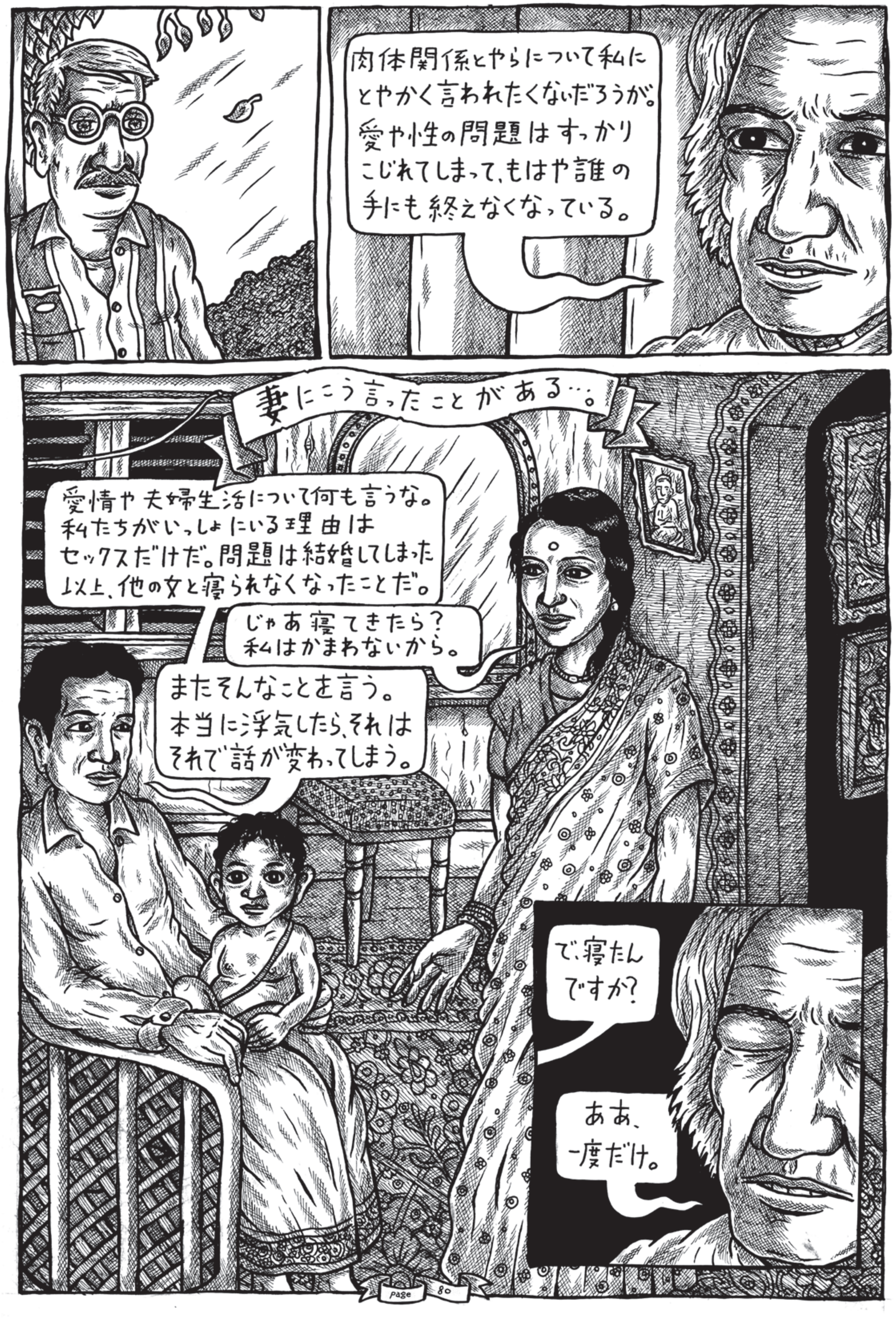

あなた目が変わったわ。
おかしい?
目が左右でちがうわ。片方の目のほうがおだやかで優しく見える。自分で見たら?

この種の変化は、実はたくさんの人間が経験しているはずだ。配管工や看護師、囚人がそうだ。彼らはみそぎやサダナなどの修業をまったくせずに同じような状態におちいる。
体が新しいリズムに落ちつくまで何年もかかった。
意識というやつはあまりにもピュアだ。だからピュアになろうとすればするほどかえって不純になっていく。そうなったら浄も不浄もすべて洗い出すしかない。いったん境界がくずれると水門が開き、ためこんでいたものが吐き出される。善悪も聖も俗も、ガキの頃うたった歌も、ロンドンの風俗チラシの番号も全部だ。
そのとき幻視体験とかありましたか?

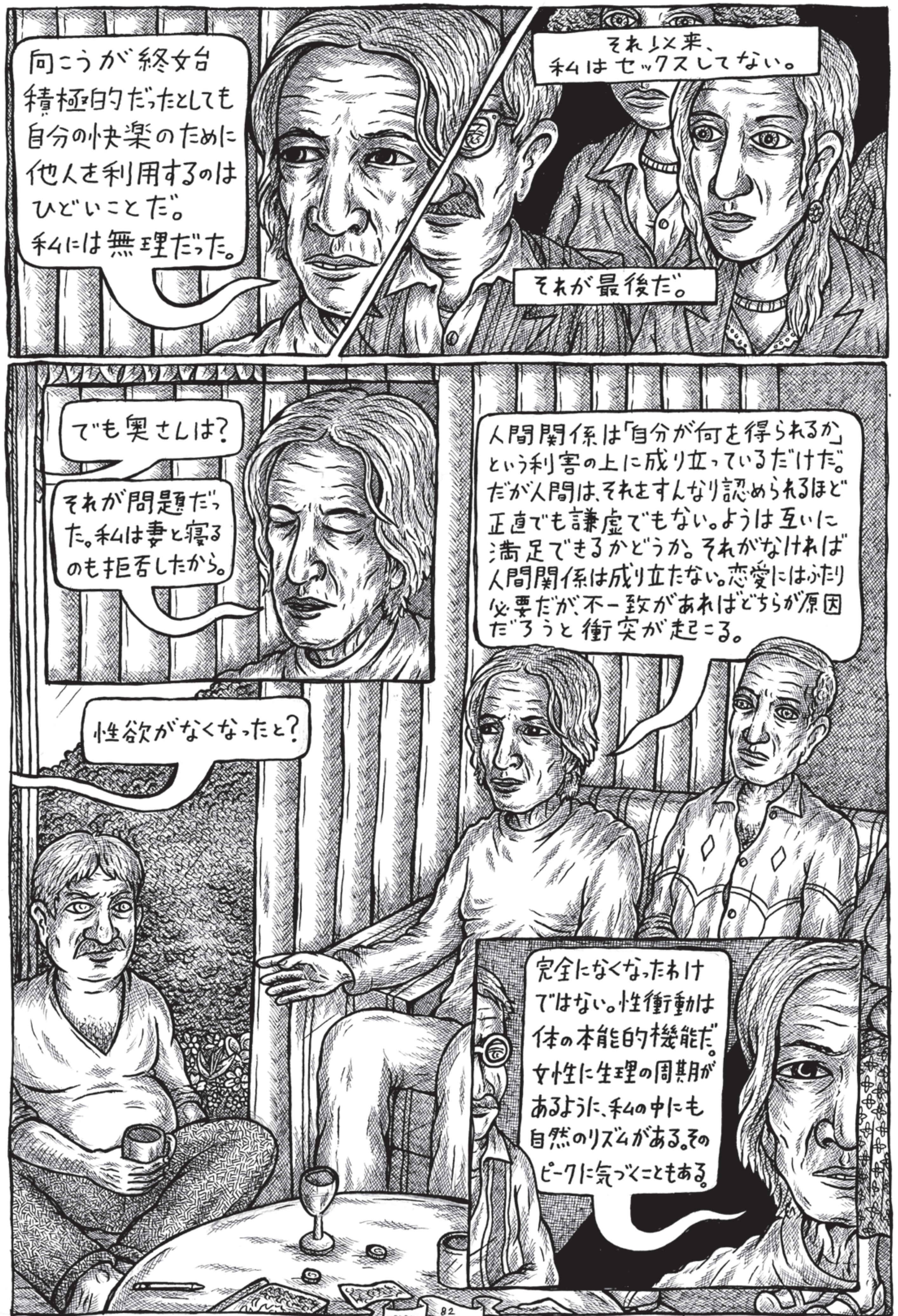
幻覚とも
妄想とも
ちがう…。
突然、自分自身の意識が、ブッダやイエス、
マハーヴィーラやソクラテスの意識になった…。
さらにたくさんの人間…
何百人、何千人という
人々の意識を体験
しては消えていった…。
有色人種に
なったこともあった…。
…長い髪と乳房の
ある女がふたり
現れた。次の
瞬間、私は
女になって髪と
乳房を感じ
た。不思議な
体験だった…

つまりそんな過去の人々の
経験が、今のあなたの
意識の一部をつくって
いる。でも私のような目
にあうと、自分の中から
全部流れ出してしまう。
どれも不純だから。
「聖者が街から
出ていった」と？
そのとおり…。
もうじゅうぶん
だろう。この
話題は
終わりだ…。
コーヒーは
いかがですか？
ありがとう。
疲れましたか？
だいじょうぶだ、
聞きたいならつづけるが。
何か質問は？

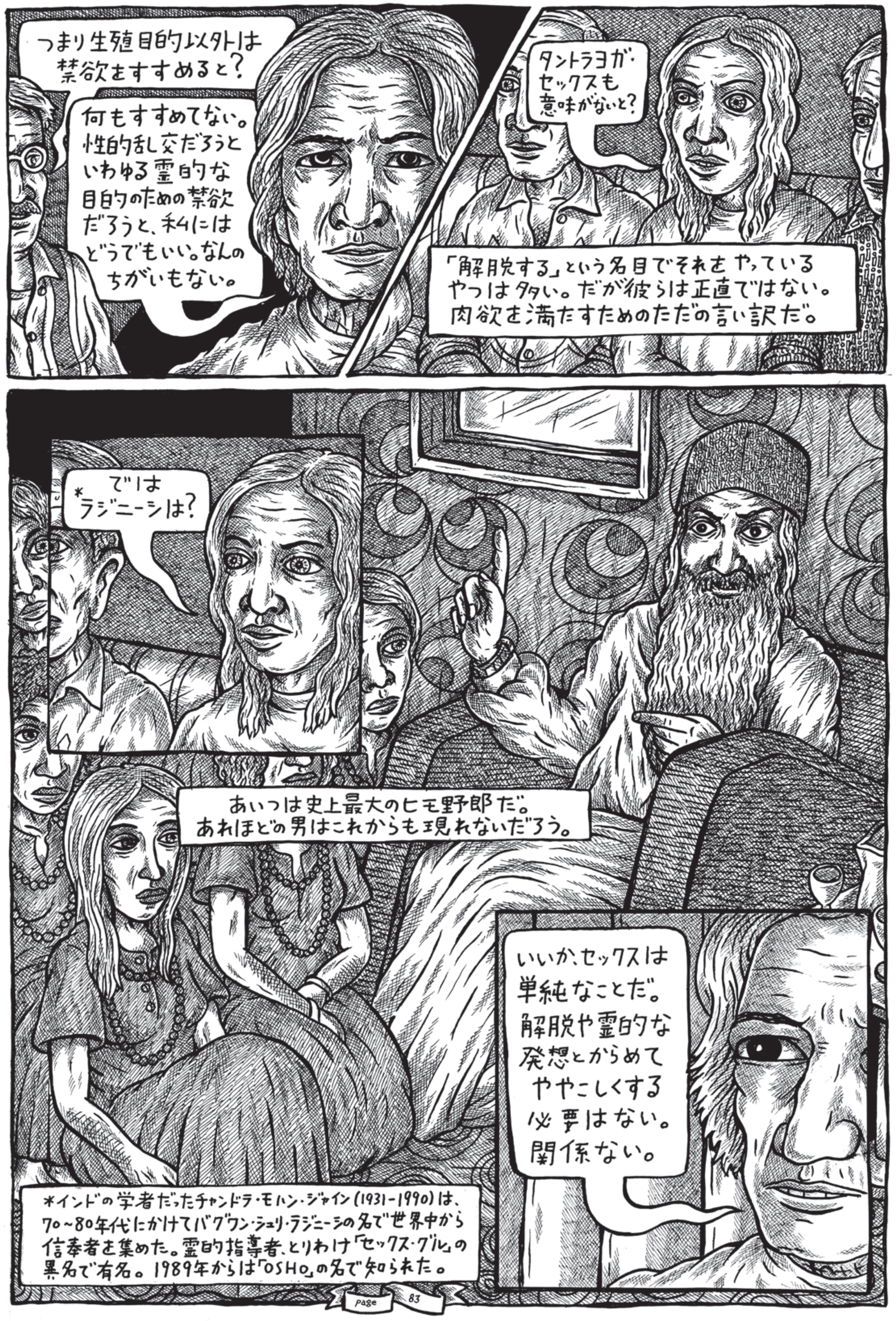

あなたは人とのつながりがなくなったと…。
人とつながることは不可能だ。そもそもつながる必要もない。
でも…。
もちろん生きていくには最低限人に頼らなければならない。今も一時的にここの家主の世話になっているしな…。
でもあなたはいいとして、他の人は人間関係を通じて愛し合ったりセックスしたりするでしょう?
そこがみじめなところだ。


肉体関係とやらについて私にとやかく言われたくないだろうが。愛や性の問題はすっかりこじれてしまって、もはや誰の手にも終えなくなっている。
妻にこう言ったことがある…。
愛情や夫婦生活について何も言うな。私たちがいっしょにいる理由はセックスだけだ。問題は結婚してしまった以上、他の女と寝られなくなったことだ。
じゃあ寝てきたら? 私はかまわないから。
またそんなことを言う。本当に浮気したら、それはそれで話が変わってしまう。
で、寝たんですか?
ああ、一度だけ。

アメリカにいた頃、テキサスで講演したことがあった。聴講者の中にいた年上の女と知り合った。ホテル代がもったいないからと言って、彼女は私を自宅に招いた。
だがそう何回もしなかった…。
誘惑されたわけではない。誘ったか誘われたか、自分からその気になったかはこの際どうでもいい。私は彼女を道具あつかいしているような気分になった。それが問題だった。

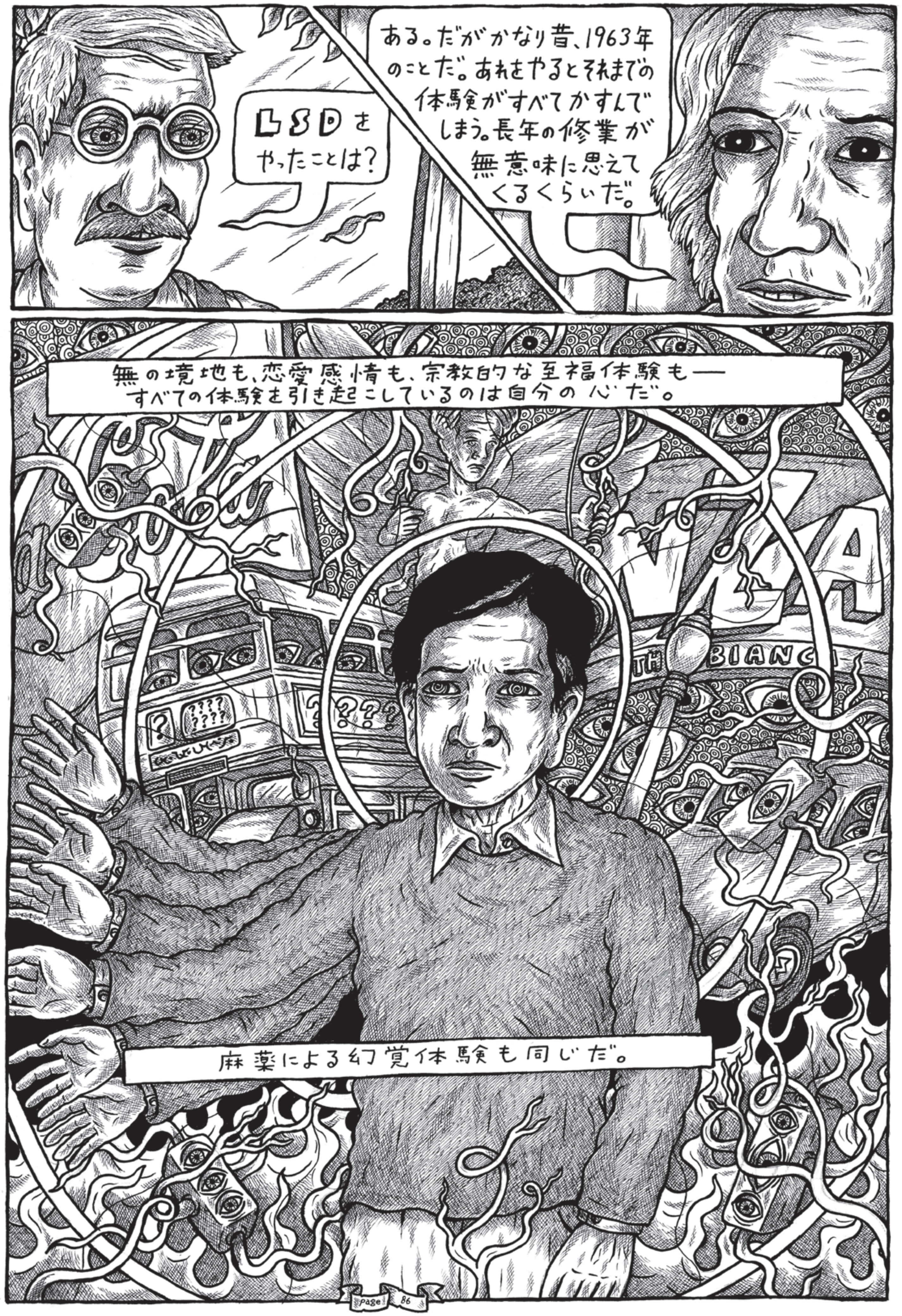


向こうが終始積極的だったとしても自分の快楽のために他人を利用するのはひどいことだ。私には無理だった。
それ以来、私はセックスしてない。
それが最後だ。
でも奥さんは？
それが問題だった。私は妻と寝るのも拒否したから。
人間関係は「自分が何を得られるか」という利害の上に成り立っているだけだ。だが人間は、それをすんなり認められるほど正直でも謙虚でもない。ようは互いに満足できるかどうか。それがなければ人間関係は成り立たない。恋愛にはふたり必要だが、不一致があればどちらが原因だろうと衝突が起こる。
性欲がなくなったと？
完全になくなったわけではない。性衝動は体の本能的機能だ。女性に生理の周期があるように、私の中にも自然のリズムがある。そのピークに気づくこともある。

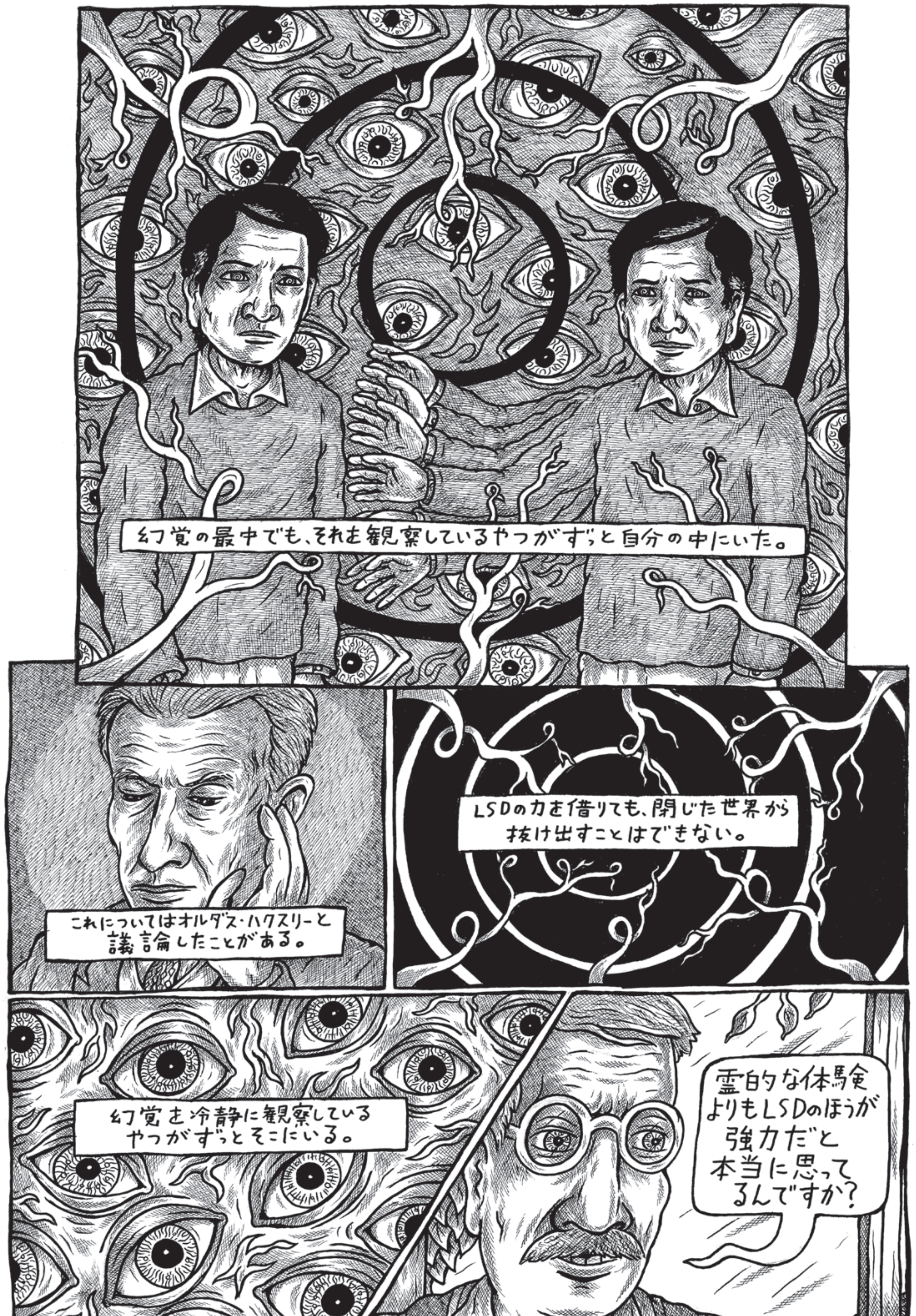

つまり生殖目的以外は禁欲をすすめると？
何もすすめてない。性的乱交だろうといわゆる霊的な目的のための禁欲だろうと、私にはどうでもいい。なんのちがいもない。
タントラヨガもセックスも意味がないと？
「解脱する」という名目でそれをやっているやつは多い。だが彼らは正直ではない。肉欲を満たすためのただの言い訳だ。
*ではラジニーシは？
あいつは史上最大のヒモ野郎だ。あれほどの男はこれからも現れないだろう。
いいか、セックスは単純なことだ。解脱や霊的な発想とからめてややこしくする必要はない。関係ない。
*インドの学者だったチャンドラ・モハン・ジャイン(1931-1990)は、70~80年代にかけてバグワン・シュリ・ラジニーシの名で世界中から信奉者を集めた。霊的指導者、とりわけ「セックス・グル」の異名で有名。1989年からは「OSHO」の名で知られた。

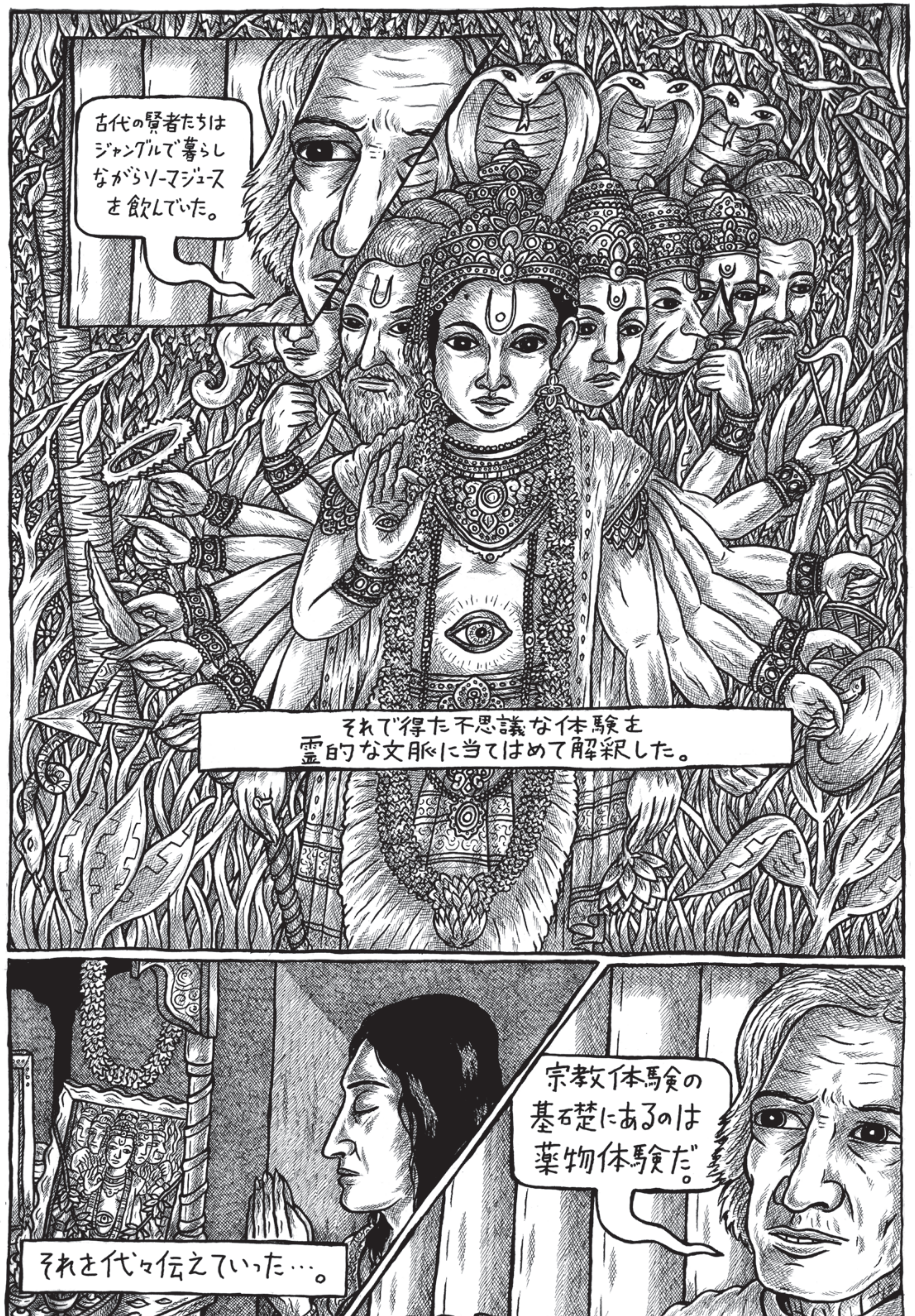
今のあなたにとっては？
私にはもうできない。禁欲とかそういう理由ではない。ただ感覚が以前とは変わってしまった。
あらゆる種類の快楽が消えてしまった。今でも喜びの感覚はあるが、これまでとは別種のものだ。モノを食べたときに喜びがある。食べものを口に入れる。血液が胃に押しよせる。そこに至福がある。
便座にすわったときも同じ。
腸の動きが私をサマディの境地へと導く。
人間が追求する快楽は、食欲であれ性欲であれ信仰であれ、どれも文化によって条件づけされてしまったものだ。
人間はセックスを快楽として自分の思考に組み込んでしまった。だがもともとはただの生殖行為だ。

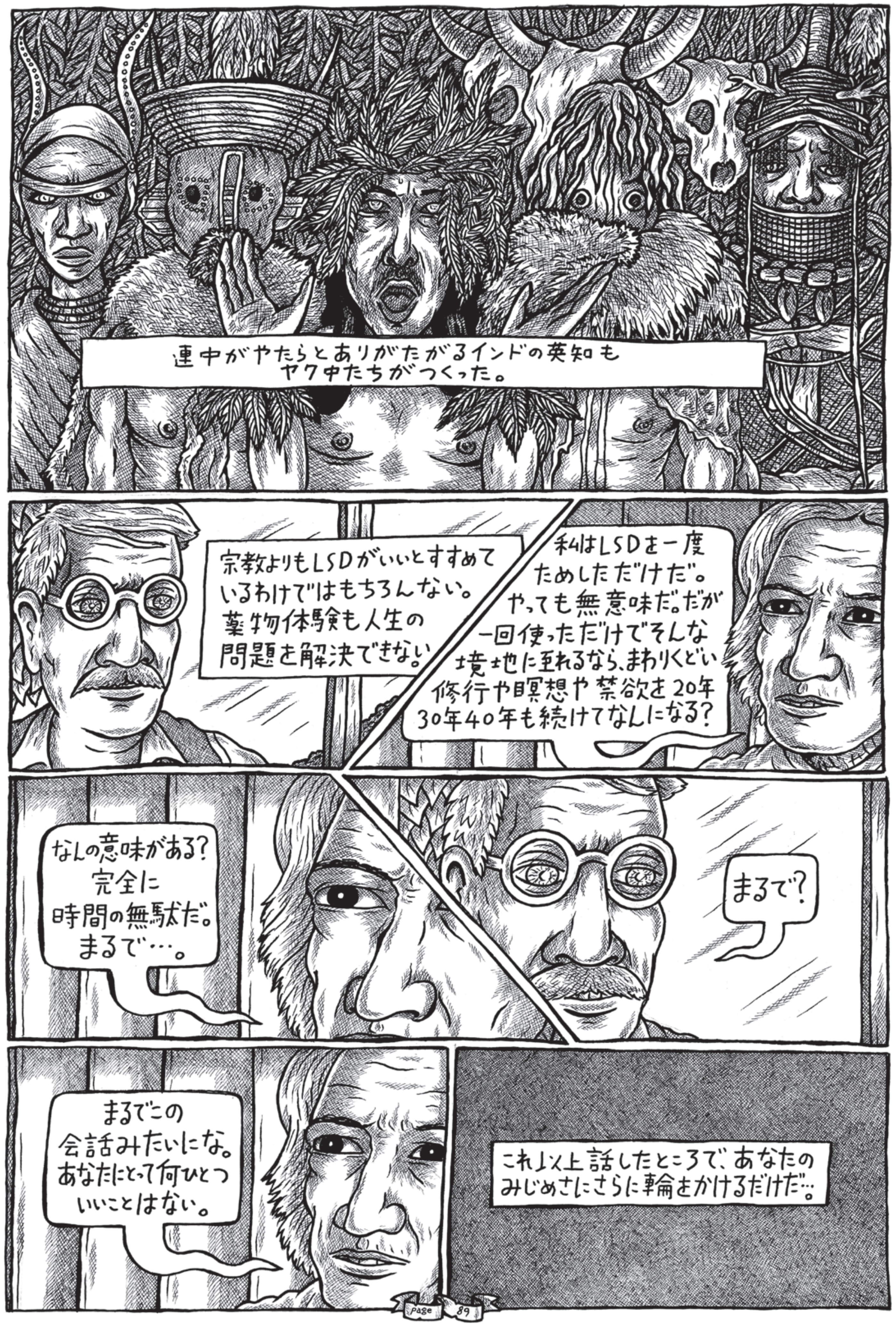
もっとも性的快楽は人生の中でただひとつ直接的な体験に近いと言える。
それ以外は他人に刷り込まれた二次的なものにすぎない。
絶頂感にしても、一度それを体験してしまうとそれが記憶に残る。覚えた快楽を何度も求めるようになる。そうなった時点で、もう既存の枠組みにはめ込まれている。
クスリはどうでしょう？
薬物による体験はまちがいなく強烈だ。だがその体験も結局は思考が生み出したものにすぎない。



LSDをやったことは？
ある。だがかなり昔、1963年のことだ。あれをやるとそれまでの体験がすべてかすんでしまう。長年の修業が無意味に思えてくるくらいだ。
無の境地も、恋愛感情も、宗教的な至福体験も——すべての体験を引き起こしているのは自分の心だ。
麻薬による幻覚体験も同じだ。


幻覚の最中でも、それを観察しているやつがずっと自分の中にいた。
これについてはオルダス・ハクスリーと議論したことがある。
LSDの力を借りても、閉じた世界から抜け出すことはできない。
幻覚を冷静に観察しているやつがずっとそこにいる。
霊的な体験よりもLSDのほうが強力だと本当に思ってるんですか？

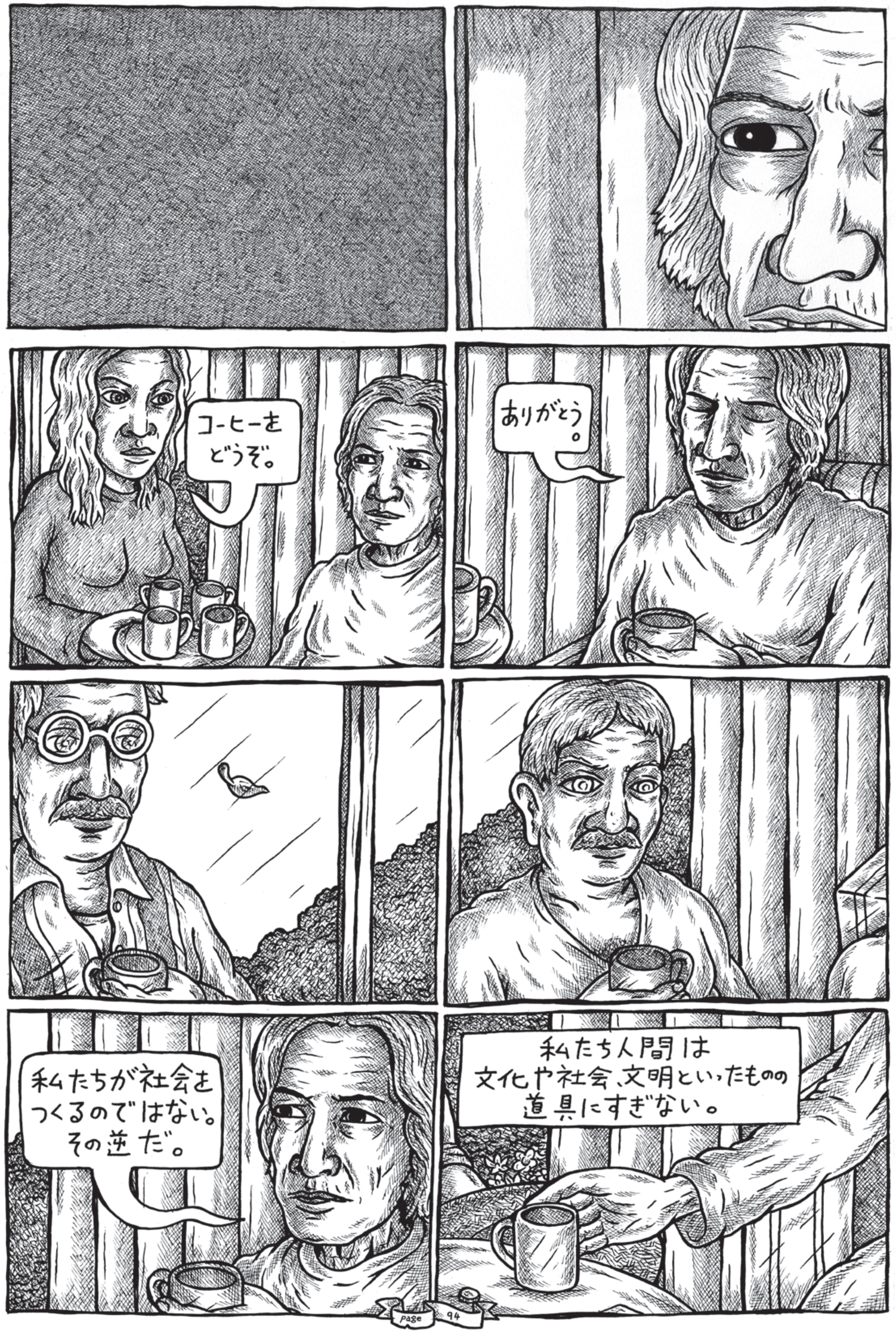

古代の賢者たちはジャングルで暮らしながらソーマジュースを飲んでいた。
それで得た不思議な体験を霊的な文脈に当てはめて解釈した。
それを代々伝えていった…。
宗教体験の基礎にあるのは薬物体験だ。



連中がやたらとありがたがるインドの英知も
ヤク中たちがつくった。
宗教よりもLSDがいいとすすめているわけではもちろんない。薬物体験も人生の問題を解決できない。
私はLSDを一度ためしただけだ。やっても無意味だ。だが一回使っただけでそんな境地に至れるなら、まわりくどい修行や瞑想や禁欲を20年30年40年も続けてなんになる？
なんの意味がある？完全に時間の無駄だ。まるで…。
まるで？
まるでこの会話みたいにな。あなたにとって何ひとついいことはない。
これ以上話したところで、あなたのみじめさにさらに輪をかけるだけだ…。
page 89

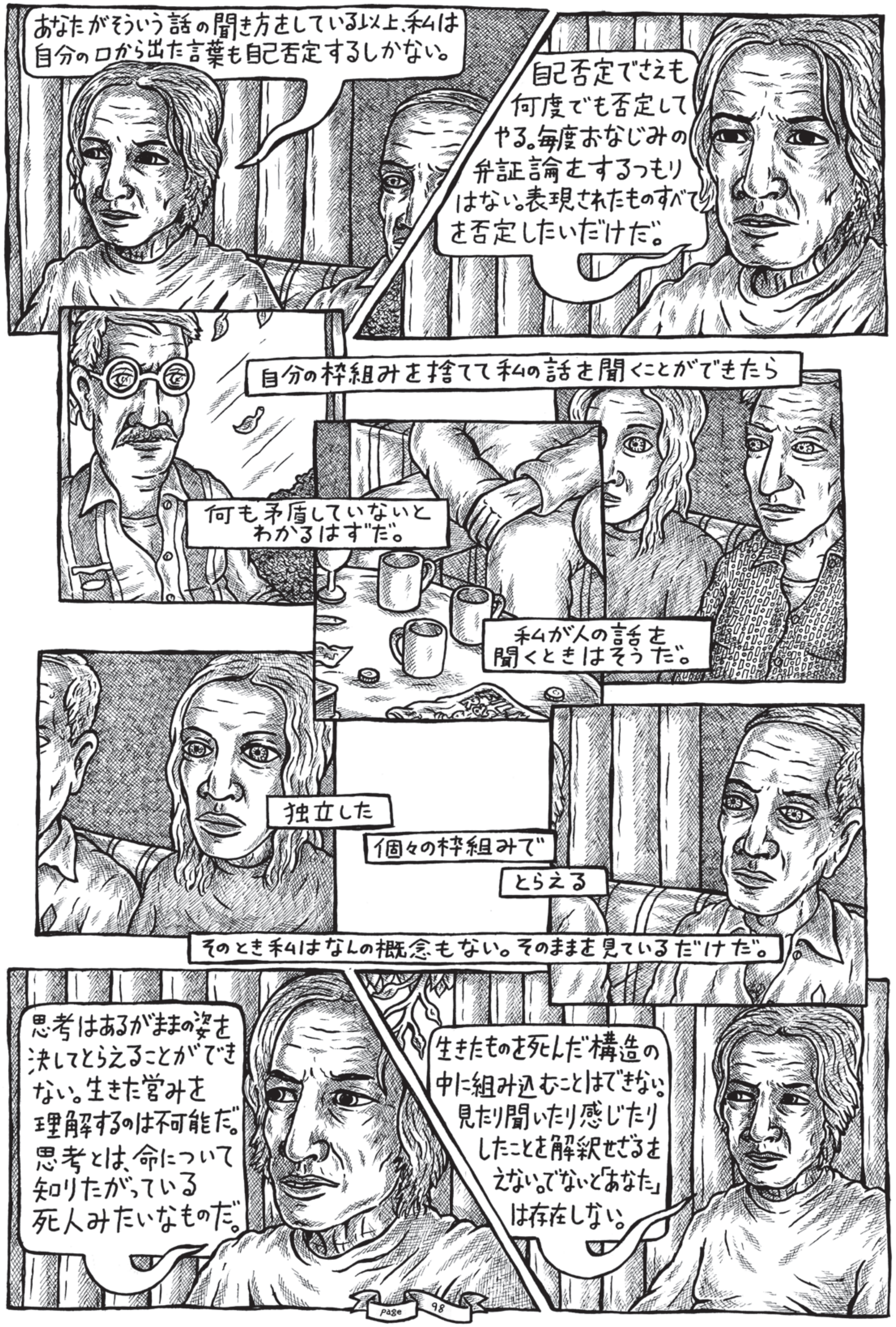
PART 3

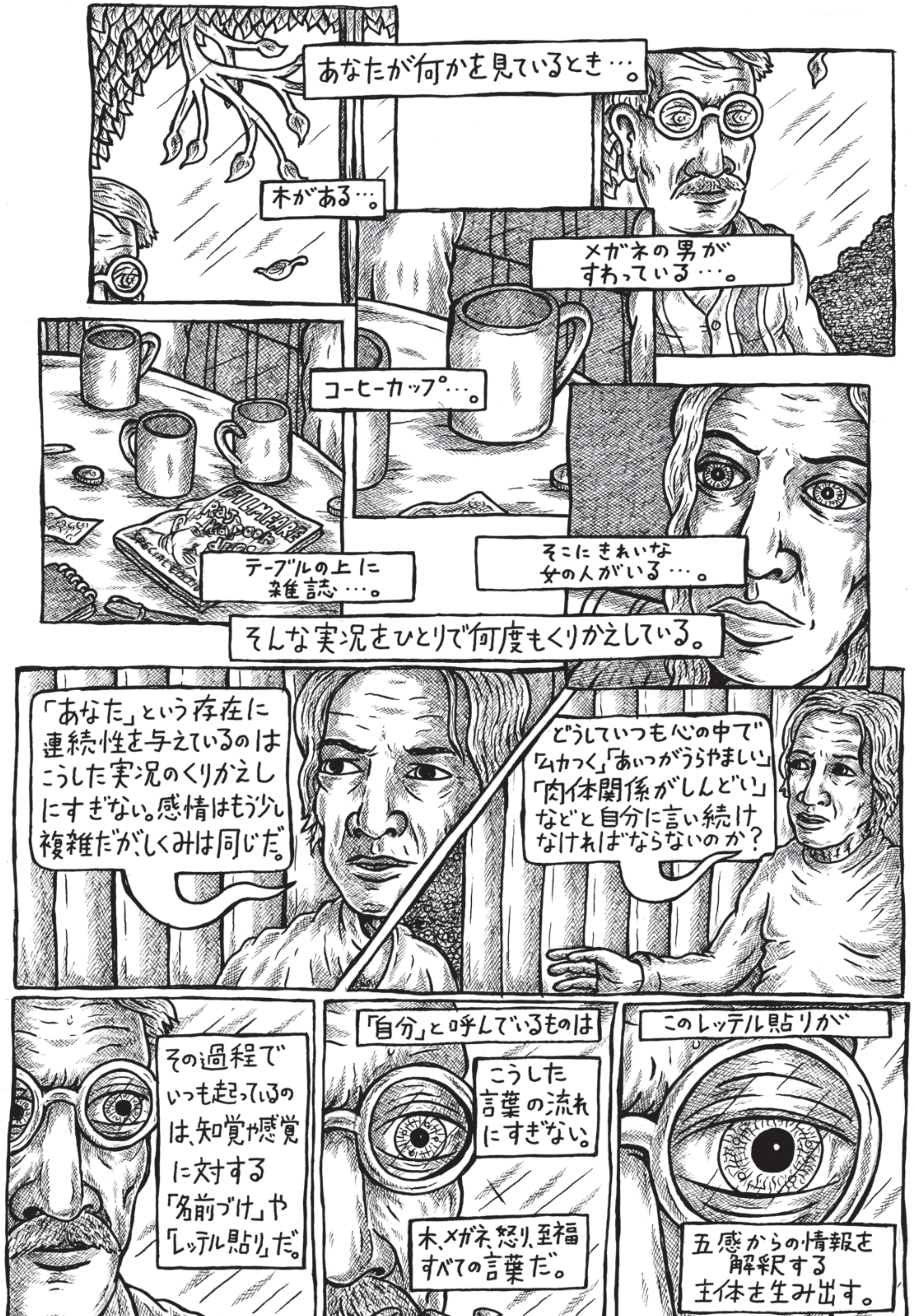
恐怖こそ神


コーヒーを
どうぞ。
ありがとう。
私たちが社会を
つくるのではない。
その逆だ。
私たち人間は
文化や社会、文明といったものの
道具にすぎない。

「世界意識」――もっといい言い方があればいいのだが――
人類の経験や思考や感情の集合体という意味だ。
これは芸術、文化、言語、あらゆる媒体を介して
世代から世代へと受け継がれる……。
BLAH BLAH BLAH

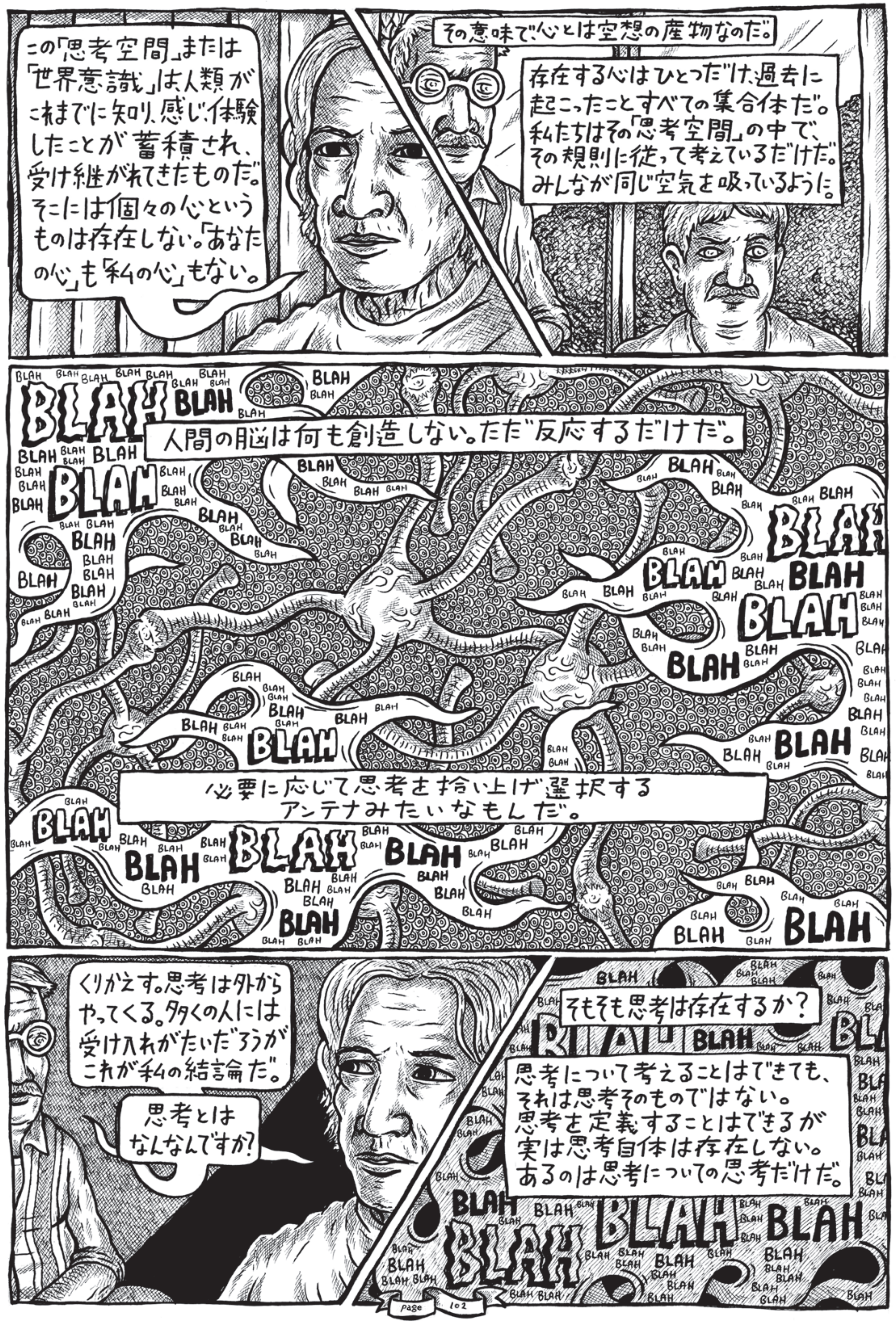
世界意識は自らの維持というそれだけの目的で私たちをつくった。他に理由はない。あなたを条件づけているのは、文化や言語、社会や歴史だ。100%そうだ。
あなたは自分の意志で自分を変えたりコントロールしたりできると思っている。
人間性を高めたり知恵を深めたり覚りを開いたりできると思っている。
無理だ。
とっくにあやつられている。
あなたの中にあるのは、これまでため込んできた知識だけだ。他には何もない。それが「あなた」の正体だ。
でもこうしてお話を聞いて新しく得るものはあります。
嘘だ。対話に意味はない。あなたは私の話を聞いていない。聞いているのは自分の「思考」の声だ。
言いすぎではない。あなたは誰の話も聞くことはできない。
注意深く真剣に聞いているふりをしたって無駄だ。私もバカではない。
自分の解釈なしでは何も聞くことはできない。実際、あなたは聞いたことを必死に「理解」しようとしている。
あなたのやっている「理解」とは
UNDERSTAND
聞いた言葉に思考を加えて、自分にとってつじつまの合う、自分になじみのある「概念」におきかえることだ。
だが問題は、実際のところ私はなんの概念も提示していないことだ。

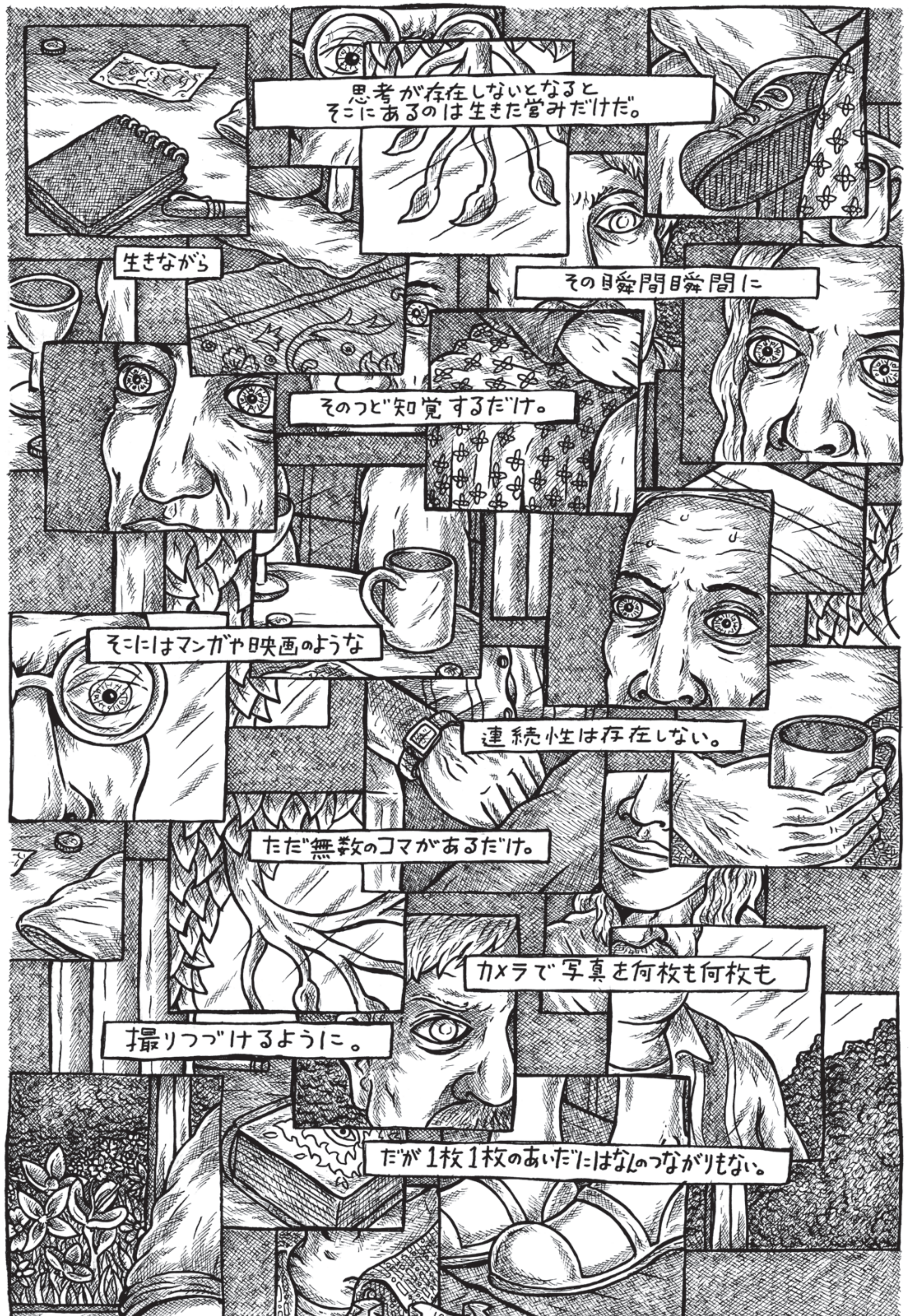

あなたがそういう話の聞き方をしている以上、私は自分の口から出た言葉も自己否定するしかない。
自己否定でさえも何度でも否定してやる。毎度おなじみの弁証論をするつもりはない。表現されたものすべてを否定したいだけだ。
自分の枠組みを捨てて私の話を聞くことができたら
何も矛盾していないとわかるはずだ。
私が人の話を聞くときはそうだ。
独立した
個々の枠組みで
とらえる
そのとき私はなんの概念もない。そのままを見ているだけだ。
思考はあるがままの姿を決してとらえることができない。生きた営みを理解するのは不可能だ。思考とは、命について知りたがっている死人みたいなものだ。
生きたものを死んだ構造の中に組み込むことはできない。見たり聞いたり感じたりしたことを解釈せざるをえない。でないと「あなた」は存在しない。


あなたが何かを見ているとき…。
木がある…。
メガネの男がすわっている…。
コーヒーカップ…。
テーブルの上に雑誌…。
そこにきれいな女の人がいる…。
そんな実況をひとりで何度もくりかえしている。
「あなた」という存在に連続性を与えているのはこうした実況のくりかえしにすぎない。感情はもう少し複雑だが、しくみは同じだ。
どうしていつも心の中で「ムカつく」「あいつがうらやましい」「肉体関係がしんどい」などと自分に言い続けなければならないのか？
その過程でいつも起っているのは、知覚や感覚に対する「名前づけ」や「レッテル貼り」だ。
「自分」と呼んでいるものは
こうした言葉の流れにすぎない。
木、メガネ、怒り、至福すべての言葉だ。
このレッテル貼りが
五感からの情報を解釈する主体を生み出す。

もちろんこうしたレッテル貼りは自分や他人を理解するとき必要だ。あなたが買いものするときも、空港をさがすときもだ。
BLAH BLAH BLAH BLAH BLAH BLAH BLAH BLAH BLAH BLAH BLAH BLAH BLAH BLAH BLAH BLAH
だがつまるところ、あなたはいつも自問自答しているにすぎない！
あなたはその感情を感じている「自分」が存在すると思っているが、それはまちがいだ。
じゃあ私がこのカップを手にするときは？カップを認識して腕を動かすとき、私は思考を使います。でも思考はその役割を果たすだけでは引き下がらない。思考そのものが主役であるかのようにその場にいすわり、支配を乗っ取るということですか？
そのとおり。思考は自分がエライとかんちがいしている成り上がりの独裁者だ。そいつは自分の連続性を保つのに必死だ。人が世界に対処する手助けをするだけでは飽き足らず、自分こそが支配者で、物事を変える力があると思いはじめる。

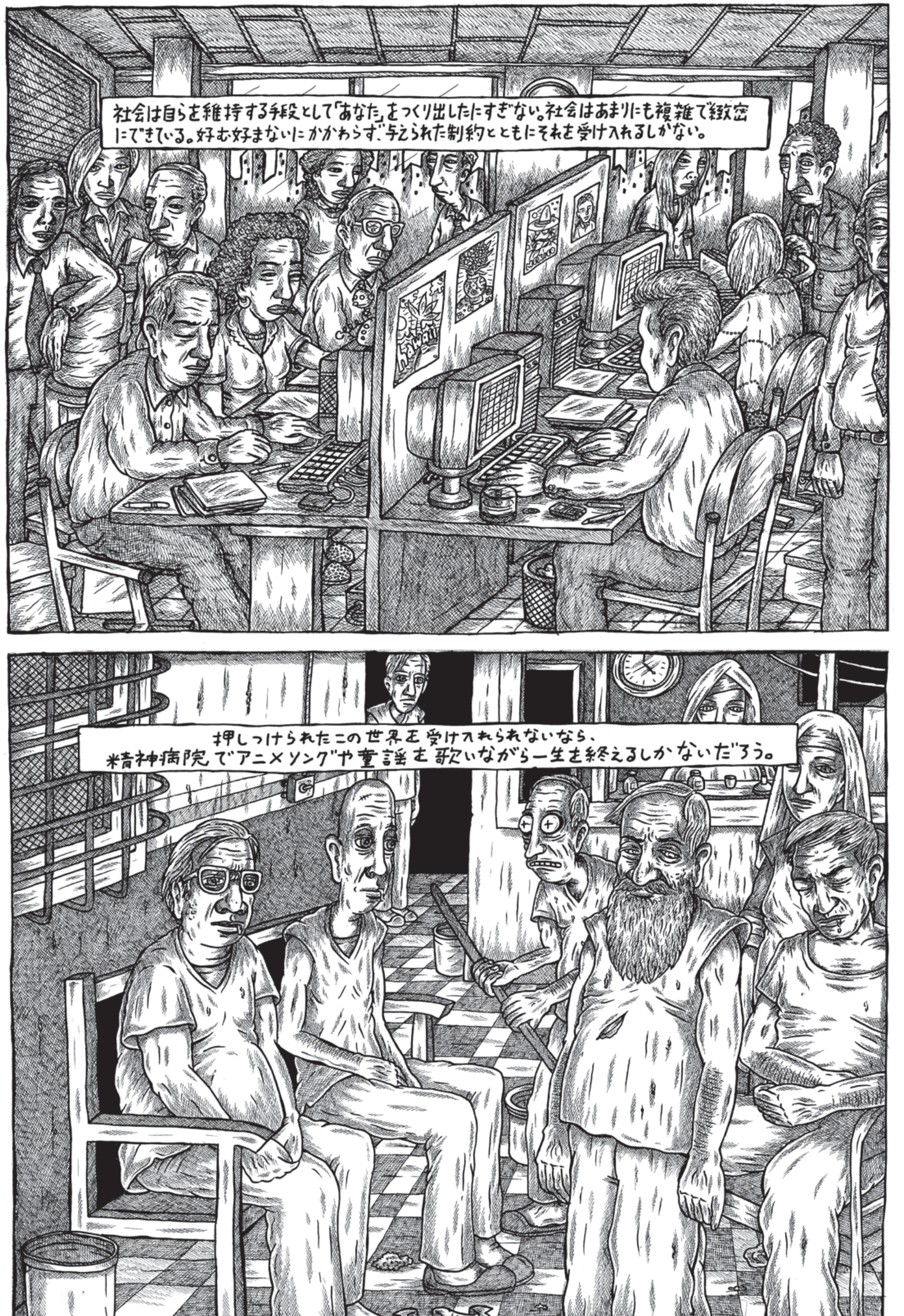
だが私の場合、そいつはもはや支配者の座からおりた。
私はもうそんなふうには機能していない。
思考は何度もカムバックを図った。王座を奪還して支配を取り戻そうとした。だが私にはもう通用しない。すべてが変わってしまった。
BLAH BLAH BLAH
思考は自分の中から自然発生するわけではない。そいつはいつも外からやってくる。まるで空気か電波信号のように私たちを取り巻いている。
page 101


この「思考空間」または「世界意識」は人類がこれまでに知り、感じ、体験したことが蓄積され、受け継がれてきたものだ。そこには個々の心というものは存在しない。「あなたの心」も「私の心」もない。
その意味で心とは空想の産物なのだ。
存在する心はひとつだけ。過去に起こったことすべての集合体だ。私たちはその「思考空間」の中で、その規則に従って考えているだけだ。みんなが同じ空気を吸っているように。
BLAH BLAH BLAH
人間の脳は何も創造しない。ただ反応するだけだ。
必要に応じて思考を拾い上げ選択するアンテナみたいなもんだ。
くりかえす。思考は外からやってくる。多くの人には受け入れがたいだろうがこれが私の結論だ。
思考とはなんなんですか?
そもそも思考は存在するか?
思考について考えることはできても、それは思考そのものではない。思考を定義することはできるが実は思考自体は存在しない。あるのは思考についての思考だけだ。
page 102

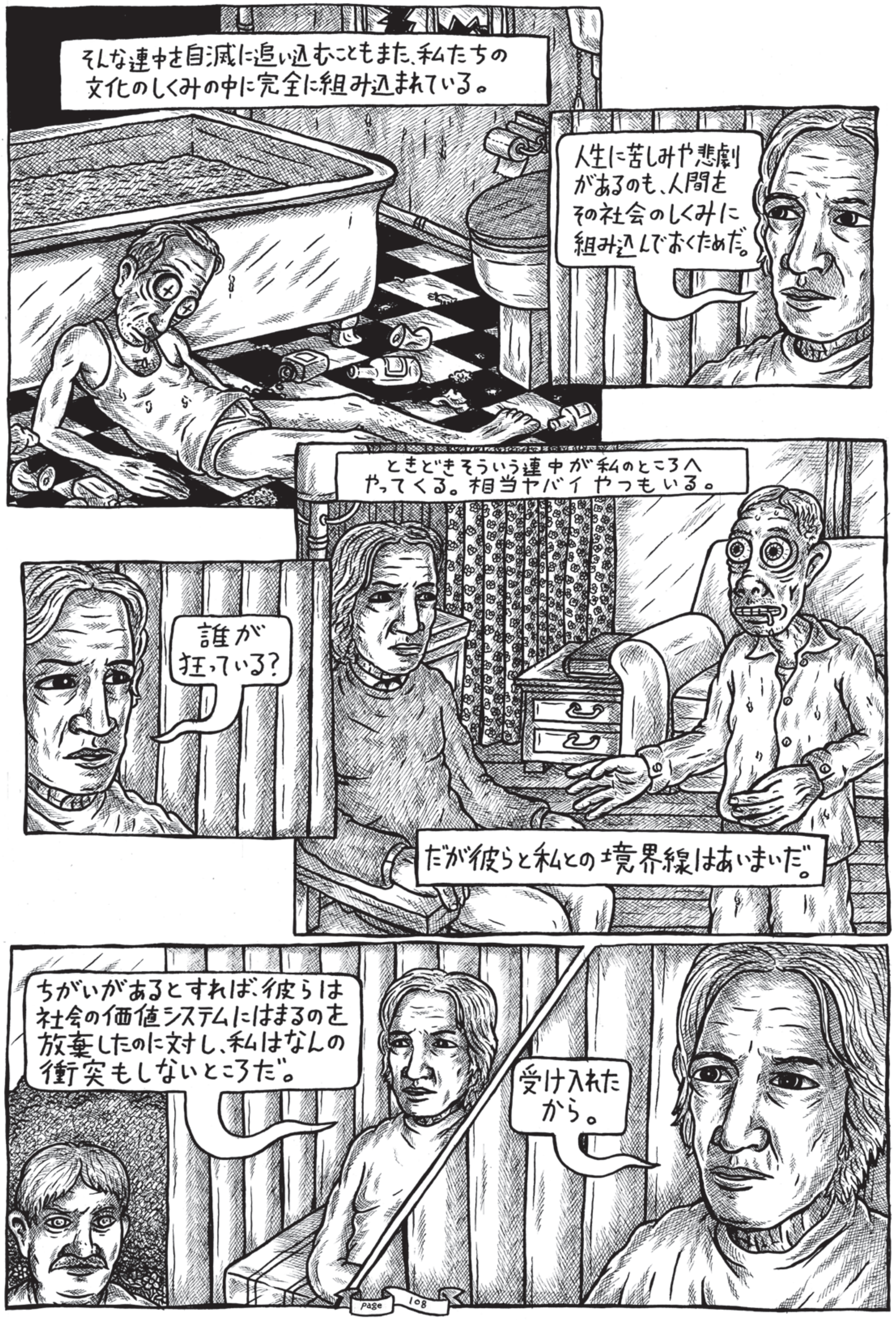

思考が存在しないとなると
そこにあるのは生きた営みだけだ。
生きながら
その瞬間瞬間に
そのつど知覚するだけ。
そこにはマンガや映画のような
連続性は存在しない。
ただ無数のコマがあるだけ。
カメラで写真を何枚も何枚も
撮りつづけるように。
だが1枚1枚のあいだにはなんのつながりもない。

知覚同士がつながっているように見せかけていた
支配者がもはやいなくなったということですか？
そうだ。私はすべての感覚が独立している。解釈が
入り込まないので、純粋で単純な知覚だけが残っている。
でもまとめ役である思考のスピードは相当
速いはずです。私の場合、そんなに速く
頭が回転している気がしないのですが…。
そんなことはない。あなたの思考は速い。
ゆっくり思考しようとしても無駄だ。「思考」とか
「まとめ役」というやつはあまりにもすばやく割り
込んでくる。それが問題なのだ。頭の回転の話
ではない。ほら、スポーツ番組でよくある…。
スローモーション？
そうだ。スローモーションだ。こうして腕を上げたとき、フィルムで
映すなら32コマほど必要だ。だが腕を動かして
いるすべての過程がバラバラに見えることはない。
スクリーン上に見えるのはなめらかな動きだけだ。

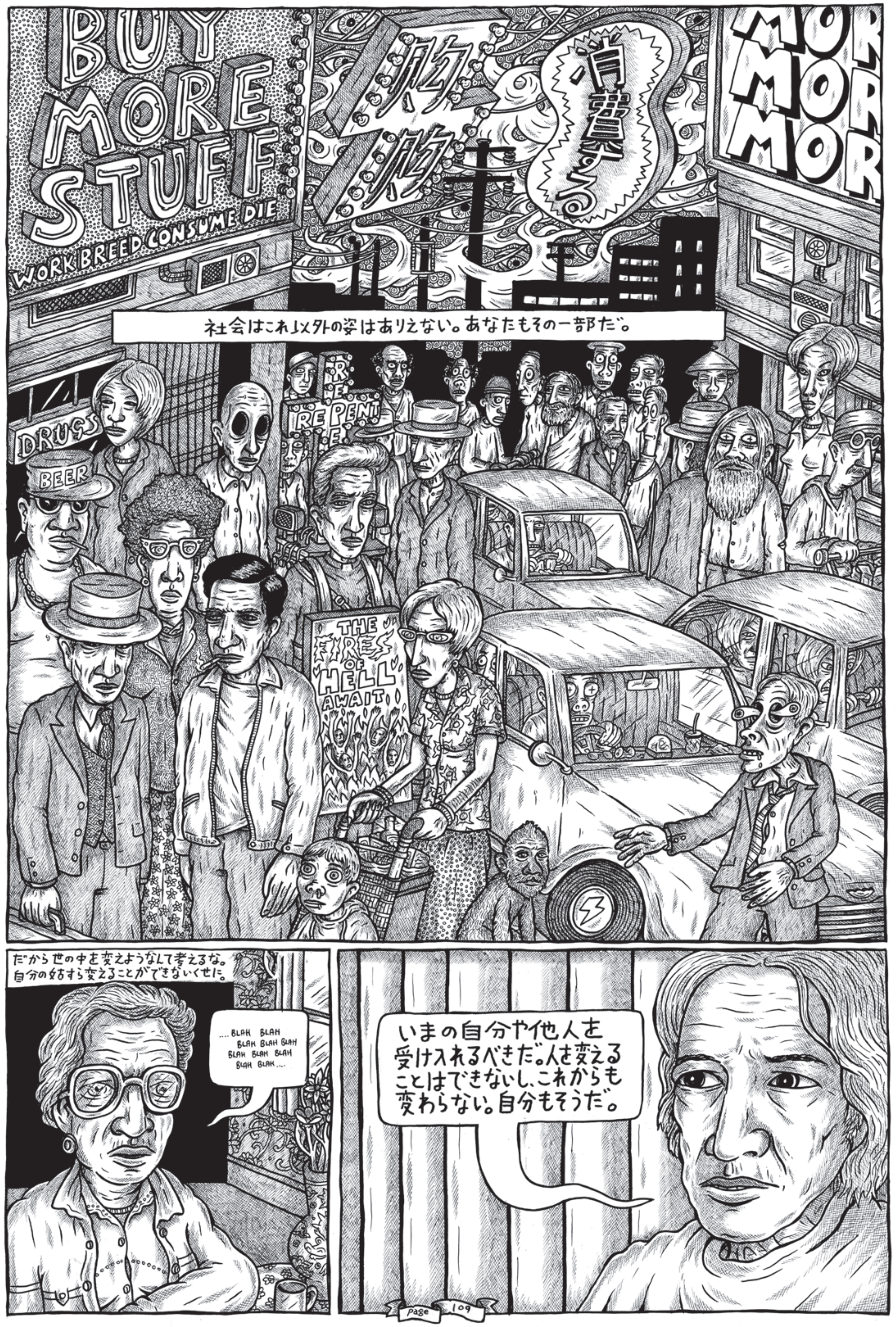
だが思考はこのコマとコマのあいだにまぎれ込んでいる。こいつはあまりにもすばやくスキマを埋めていくので、思考が機能しているように見えないだけだ。そのくらい速い…。
じゃあもっとゆっくり考えるようにしろと？
いいかよく聞け、はっきりさせておこう、自分から思考を切り離してながめる方法はない。試したことがあるのか知らないが…。自分の思考を切り離してながめたことあるか？
そもそもなぜそんなくだらないことに関わりたがる？
ナマの現実についてむやみに知ろうとするな！私たちの文化がつくり出した現実こそがあたりまえのものとして受け入れるべきだ。でなければこの世界で人間として正気で生きていくことは不可能だ。

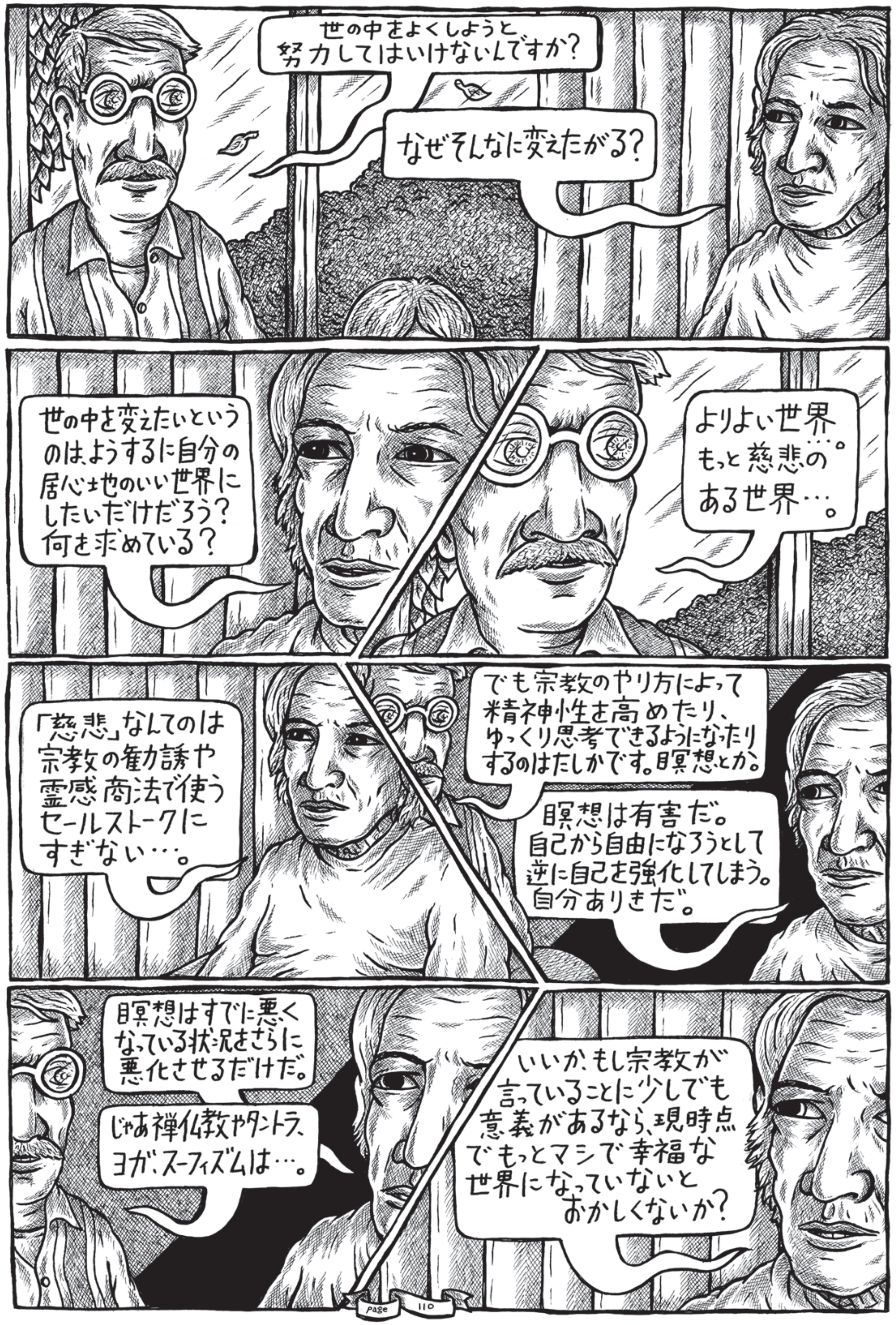

社会は自らを維持する手段として「あなた」をつくり出したにすぎない。社会はあまりにも複雑で緻密にできている。好む好まないにかかわらず、与えられた制約とともにそれを受け入れるしかない。
押しつけられたこの世界を受け入れられないなら、精神病院でアニメソングや童謡を歌いながら一生を終えるしかないだろう。

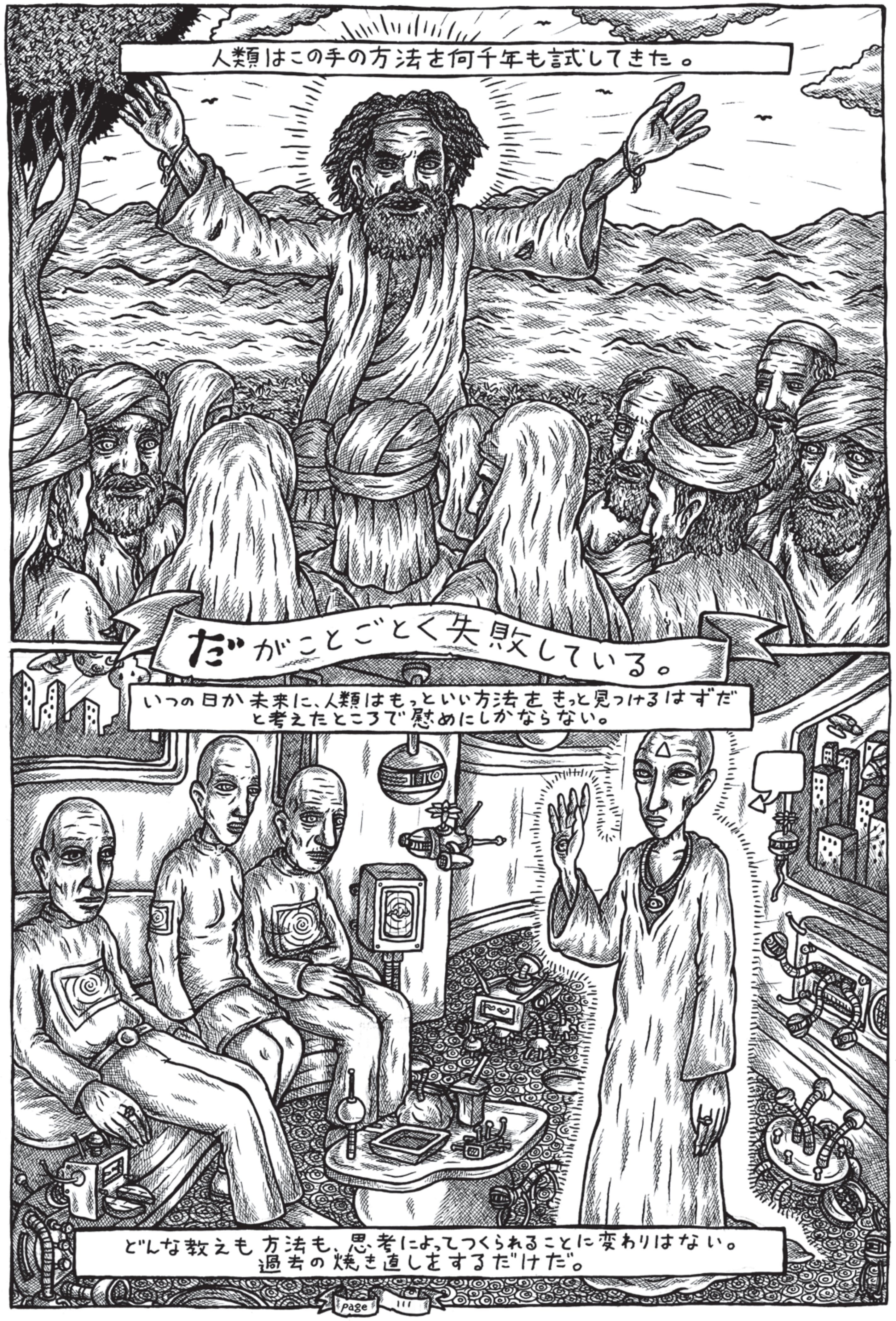
社会が関心を持っているのは、人間一人ひとりをその枠組みにはめ込んで社会を維持することだけだ。
だが社会は同時に別の考えも生み出した。人は変わりつづけなければならないという考えだ。ひとりの人間として自立することをすすめ、人には自由意志があるという思想を定着させた。だからあなたは成長したい、自分を変えたいと願う。
THE Key to HAPPINESS
HOW TO BE FREE
BEST SELLER
The Secret to Better You
THINK YOUR SELF RICH
これが私たちを神経症に陥れる。
人類は根本的にみんな神経症なのだ。
正気なやつなんているか? 社会の中で役割を果たすために人は神経症にならなければならない。社会の需要に応えて消耗するようにできている。
もちろん、中にはこの価値システムに自分をはめるのをやめてしまったやつもいる。
彼らはどんな役割も果たしたがらない。
K MART

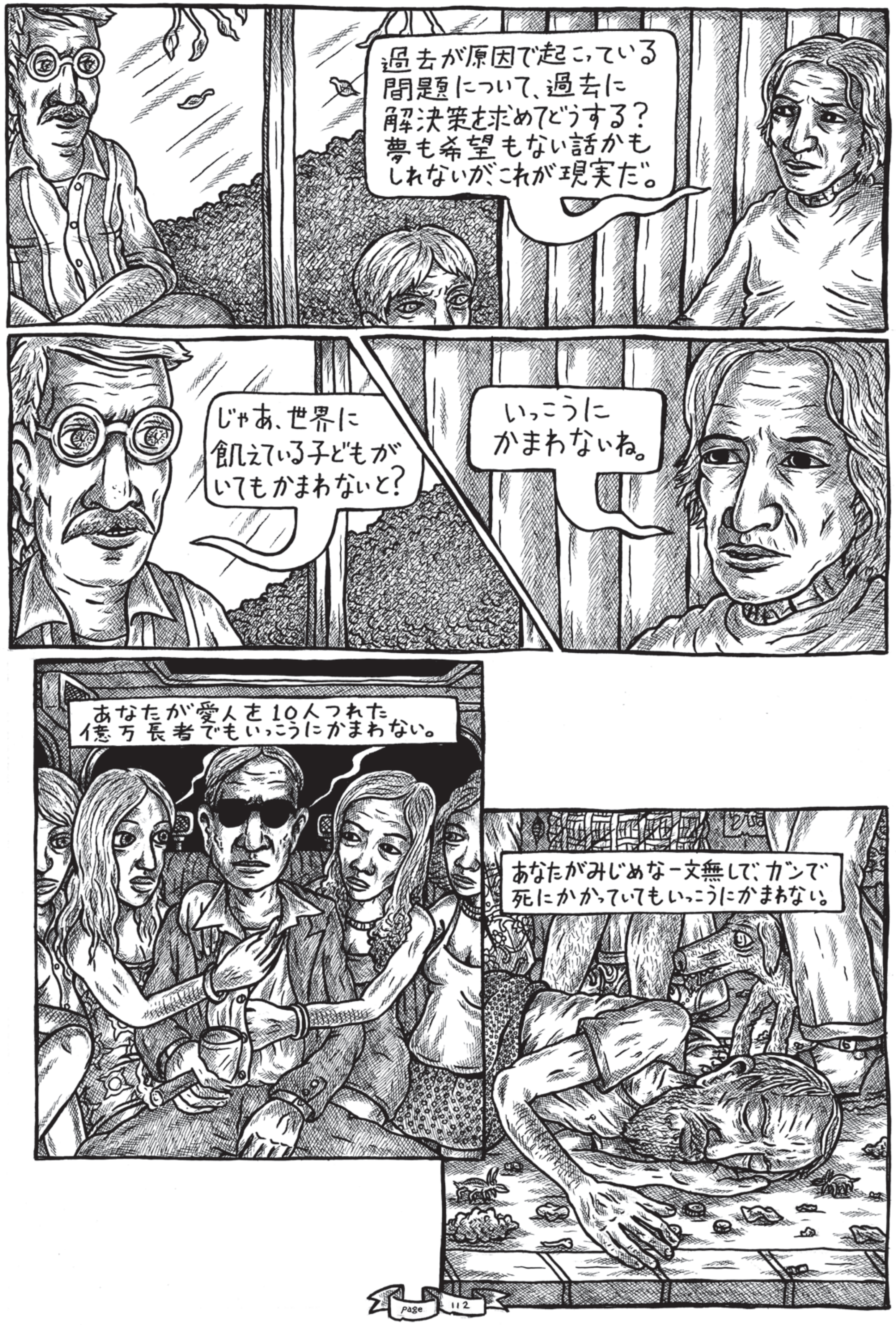


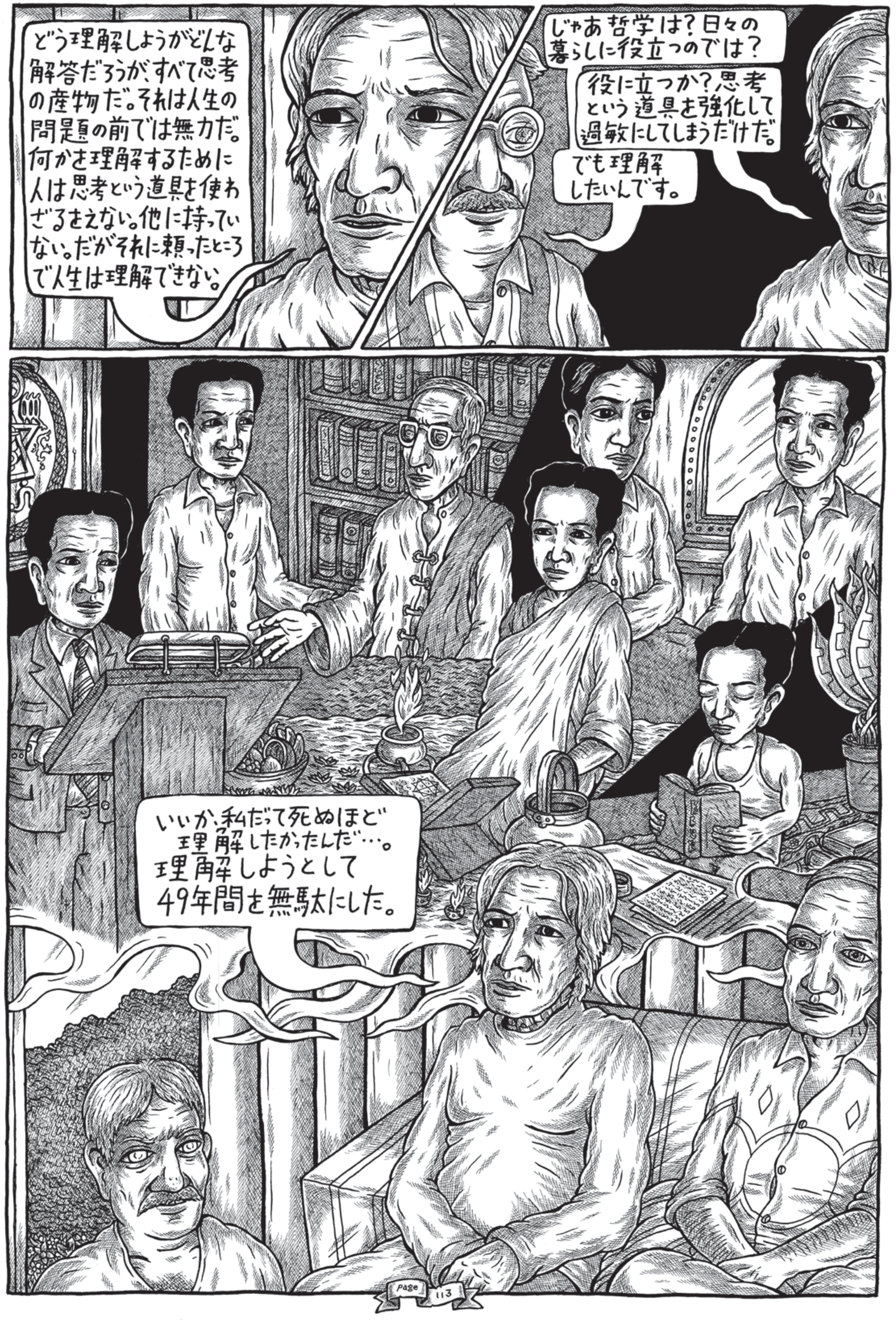
そんな連中を自滅に追い込むこともまた、私たちの文化のしくみの中に完全に組み込まれている。
人生に苦しみや悲劇があるのも、人間をその社会のしくみに組み込んでおくためだ。
ときどきそういう連中が私のところへやってくる。相当ヤバイやつもいる。
誰が狂っている?
だが彼らと私との境界線はあいまいだ。
ちがいがあるとすれば、彼らは社会の価値システムにはまるのを放棄したのに対し、私はなんの衝突もしないところだ。
受け入れたから。


BUY MORE STUFF
WORK BREED CONSUME DIE
消費する
MOR MOR MOR
社会はこれ以外の姿はありえない。あなたもその一部だ。
DRUGS
BEER
REPENT
THE FIRES OF HELL AWAIT
だから世の中を変えようなんて考えるな。自分の姑すら変えることができないくせに。
....BLAH BLAH BLAH BLAH BLAH BLAH BLAH BLAH BLAH BLAH....
いまの自分や他人を受け入れるべきだ。人を変えることはできないし、これからも変わらない。自分もそうだ。
page 109

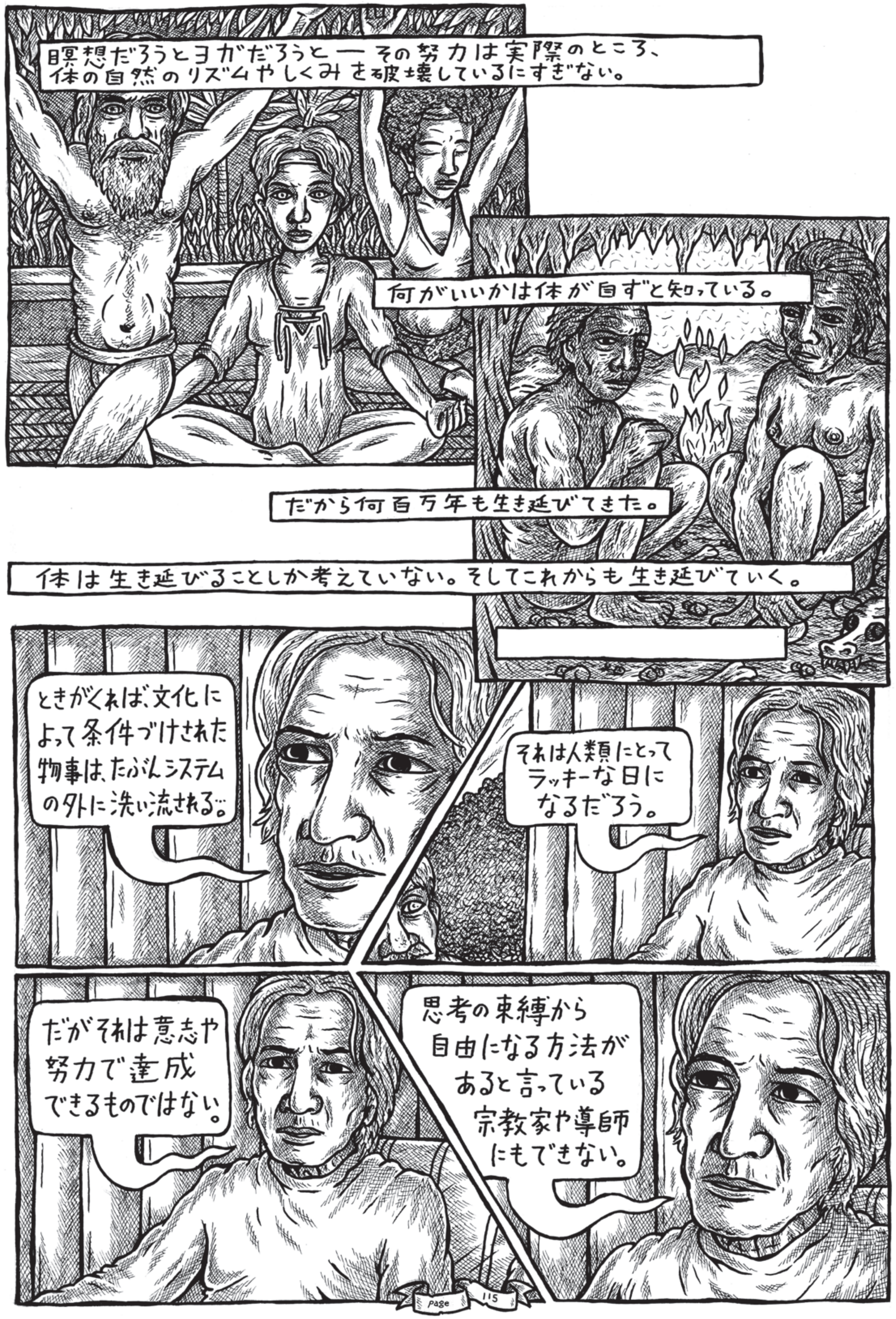

世の中をよくしようと努力してはいけないんですか？
なぜそんなに変えたがる？
世の中を変えたいというのはようするに自分の居心地のいい世界にしたいだけだろう？何を求めている？
よりよい世界…。もっと慈悲のある世界…。
「慈悲」なんてのは宗教の勧誘や霊感商法で使うセールストークにすぎない…。
でも宗教のやり方によって精神性を高めたり、ゆっくり思考できるようになったりするのはたしかです。瞑想とか。
瞑想は有害だ。自己から自由になろうとして逆に自己を強化してしまう。自分ありきだ。
瞑想はすでに悪くなっている状況をさらに悪化させるだけだ。
じゃあ禅仏教やタントラ、ヨガ、スーフィズムは…。
いいか、もし宗教が言っていることに少しでも意義があるなら、現時点でもっとマシで幸福な世界になっていないとおかしくないか？
page 110


人類はこの手の方法を何千年も試してきた。
だがことごとく失敗している。
いつの日か未来に、人類はもっといい方法をもっと見つけるはずだと考えたところで慰めにしかならない。
どんな教えも方法も、思考によってつくられることに変わりはない。過去の焼き直しをするだけだ。


過去が原因で起こっている問題について、過去に解決策を求めてどうする？夢も希望もない話かもしれないが、これが現実だ。
じゃあ、世界に飢えている子どもがいてもかまわないと？
いっこうにかまわないね。
あなたが愛人を10人つれた億万長者でもいっこうにかまわない。
あなたがみじめな一文無しで、ガンで死にかかっていてもいっこうにかまわない。


どう理解しようがどんな解答だろうが、すべて思考の産物だ。それは人生の問題の前では無力だ。何かを理解するために人は思考という道具を使わざるをえない。他に持っていない。だがそれに頼ったところで人生は理解できない。
じゃあ哲学は？日々の暮らしに役立つのでは？
役に立つか？思考という道具を強化して過敏にしてしまうだけだ。
でも理解したいんです。
いいか、私だって死ぬほど理解したかったんだ…。理解しようとして49年間を無駄にした。

私のまちがいは、なんでも頭で理解しようとしていたことだ。だがそもそも理解すべきことなんてあるか？
思考が無能な道具で、他に道具がないならば、理解すべきこととはいったいなんだ？
理解すべきことは何もない。
私がたどりついた結論だ。
これがイナズマのように私を打った。
だが、それがどうして私に起こったのかはわからない…。
…経験を通して得たものではないので、その方法をあなたと共有もできない。



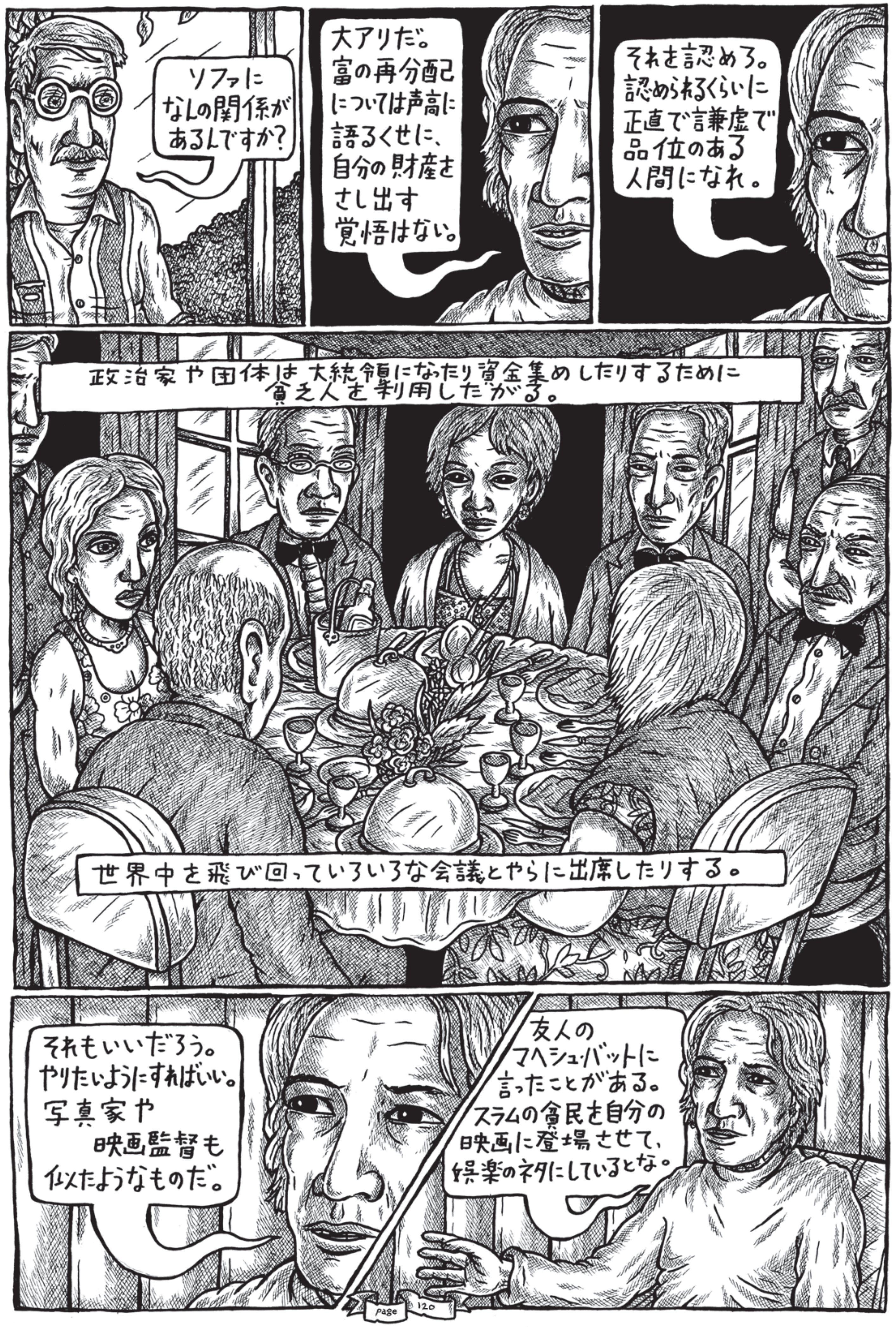
瞑想だろうとヨガだろうと ― その努力は実際のところ、体の自然のリズムやしくみを破壊しているにすぎない。
何がいいかは体が自ずと知っている。
だから何百万年も生き延びてきた。
体は生き延びることしか考えていない。そしてこれからも生き延びていく。
ときがくれば、文化によって条件づけされた物事は、たぶんシステムの外に洗い流される。
それは人類にとってラッキーな日になるだろう。
だがそれは意志や努力で達成できるものではない。
思考の束縛から自由になる方法があると言っている宗教家や導師にもできない。

つまり…。
逃げ道はない
自分でつくった思考というワナから抜け出そうとすればするほど、逆に思考を強化してがんじがらめになるだけだ。
じゃあ完全にあきらめろと？
ただし。あきらめることによって何か見返りを求めているのだとしたら、本当にあきらめたことにならない。そもそもあきらめるべきものなど存在しない。つまりもとから選択肢もない。
じゃあなぜあなたはここで教えを説いてるんです？
勝手に会いにきているのはそっちだ。

人はありがたい教えが乞えると信じて集まってくる。私はその幻想に一役買っているわけだ。この集まりがいかにバカげているか、私は指摘して彼らを幻滅させてやろうとしてきた。
それでも集まってくる。
声を荒げたこともあったが それでも戻ってくる。
私は自分がおちいったこの状態について説明し、「覚り」を得るために何をしても無駄だと伝えたいだけだ。
教えてくれ… なぜ何度もここにくる？ 何を求めている？
よりよい世界？
この世界はどこもおかしくないと思うが。パラダイスだ。
人類の進歩と発展のために…。
人類のことなんか本当に考えてるか？
…もちろん。
なぜ？ 人類なんか全部忘れろ。
人類なんか本当はどうでもいいんだろ？

自分や周囲をだまして世の中のことを気にかけているふりをする。困っている人や貧しい人を助けようとする。それもいい。だがそのために実際何をしている？
飢えている子どもなんか本当はどうでもいいんだろう…。
あなたは飢えていない。
それどころか丸々と肥っている。
なぜ飢えた子どもについて語る？彼らの空腹を満たすために何をしている？え？
何もしてないじゃないか。
正しく立派なことをしようとしている人たちについて悪く言うのはどうかと思いますが…。
人のことではない、おまえのことだ！

他人のことは言うな！おまえは何をしている？それを聞いているんだ。
おまえだ。
おまえに話している。何かを変えようとしたことあるのか？
何もしてない。
すわってテレビを見ているだけ。
まとまった金があればソファを買う…。
立派なソファをな。それでも私はかまわない…。

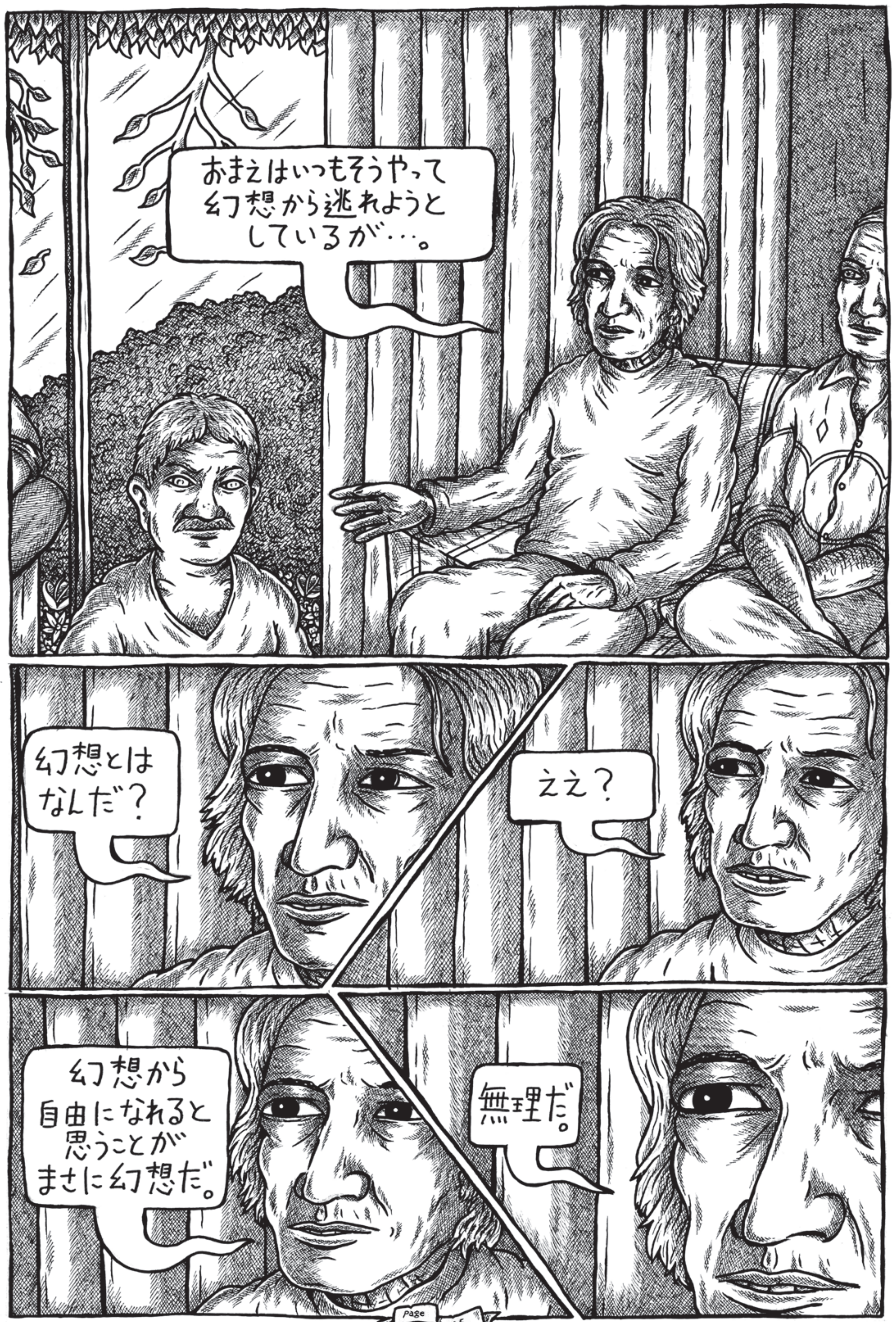

ソファになんの関係があるんですか？
大アリだ。富の再分配については声高に語るくせに、自分の財産をさし出す覚悟はない。
それを認めろ。認められるくらいに正直で謙虚で品位のある人間になれ。
政治家や団体は大統領になったり資金集めしたりするために貧乏人を利用したがる。
世界中を飛び回っていろいろな会議とやらに出席したりする。
それもいいだろう。やりたいようにすればいい。写真家や映画監督も似たようなものだ。
友人のマヘシュバットに言ったことがある。スラムの貧民を自分の映画に登場させて、娯楽のネタにしているとな。

他人の苦しみは一種の娯楽なのだ。
他人の苦しみに共感しているつもりでいるが、本当はちがう…。
…見て楽しんでいるだけだ。
FILMFARE
RAJ KAPOOR DIES
SPECIAL EDITION

毎日ここにやってくるおまえみたいに。
おまえはこの手のエンターテイメントが好きらしいな。
家に帰ってテレビでも見ていたほうが身のためだぞ。
本当に…。私は同じ話をくりかえすだけだ。退屈極まりないだろう。
私はただ理解したくて…。
おまえはひとりの生きている人間だ。人生について理解するのに誰の助けもいらない。
おまえにわからないなら誰にわかる？教えてくれ。
私が話す言葉や考えはすでに屍だ。屍が命に触れられるはずがない。だがおまえは生きている。

自分で自分のことがわからないなら、いったい誰に教えられる？
なんのためにここにくる？
なぜ…。
人生の目的が知りたくて…。

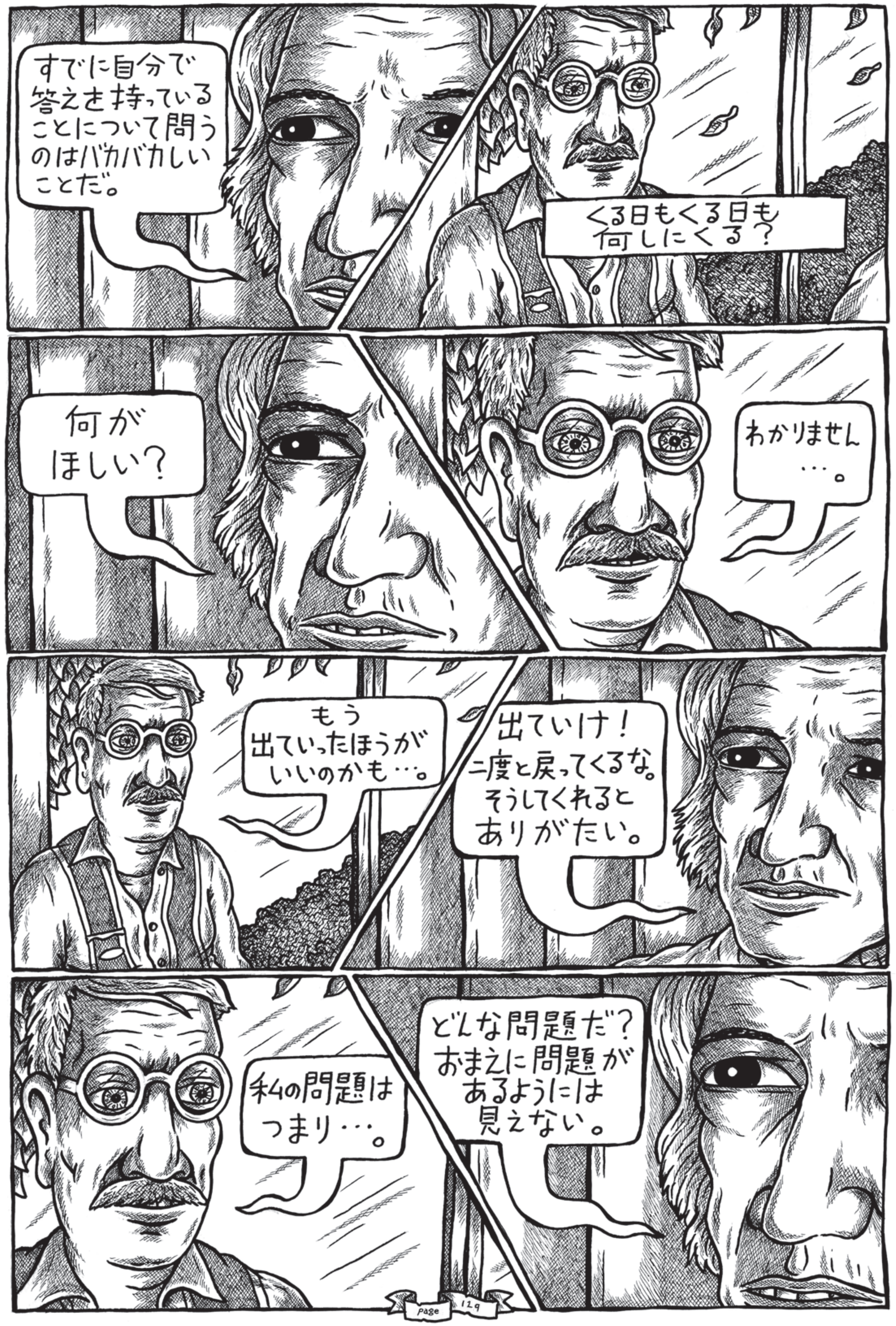
目的？
はい。
どんな目的だ？人生には目的も意味もない。
人生が無意味なのはよくわかっているはずだ。でなければ目的を探したりしない。
どうしたいんだ？
本当に…。
幻想から自由になりたいんです。

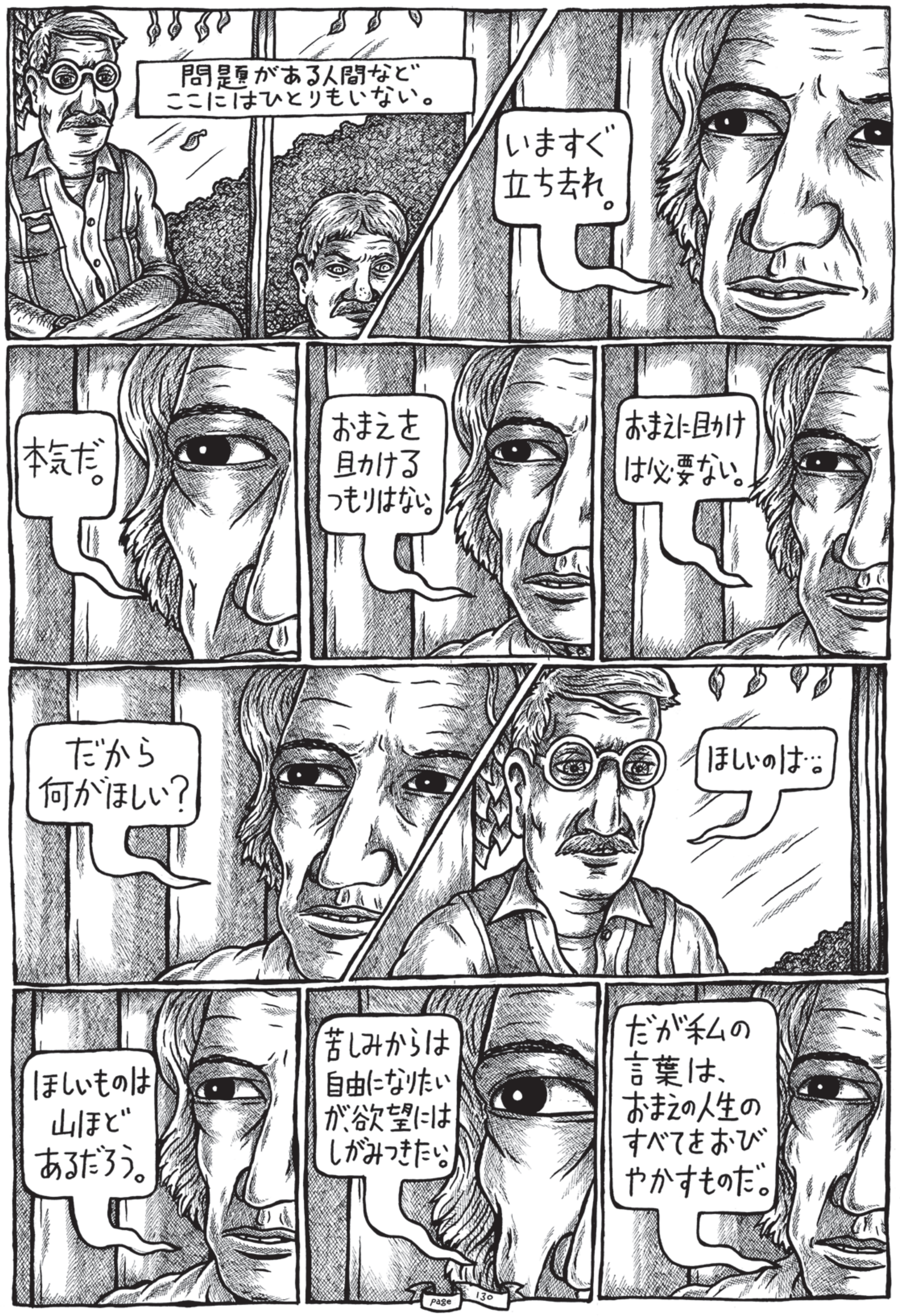

おまえはいつもそうやって幻想から逃れようとしているが・・・。
幻想とはなんだ?
ええ?
幻想から自由になれると思うことがまさに幻想だ。
無理だ。

幻想を幻想で、思想を思想で置き換えるだけだ。
そのくりかえしだ。
幻想がなければおまえも存在しない。
じゃあ私は何者なんですか?
なぜそんなことを聞く?まったく無意味な質問だ。それは次のことを前提にしている。つまり、自分が知っている「自分」とは別に、自分の知らない「自分」が存在しているはずだと。

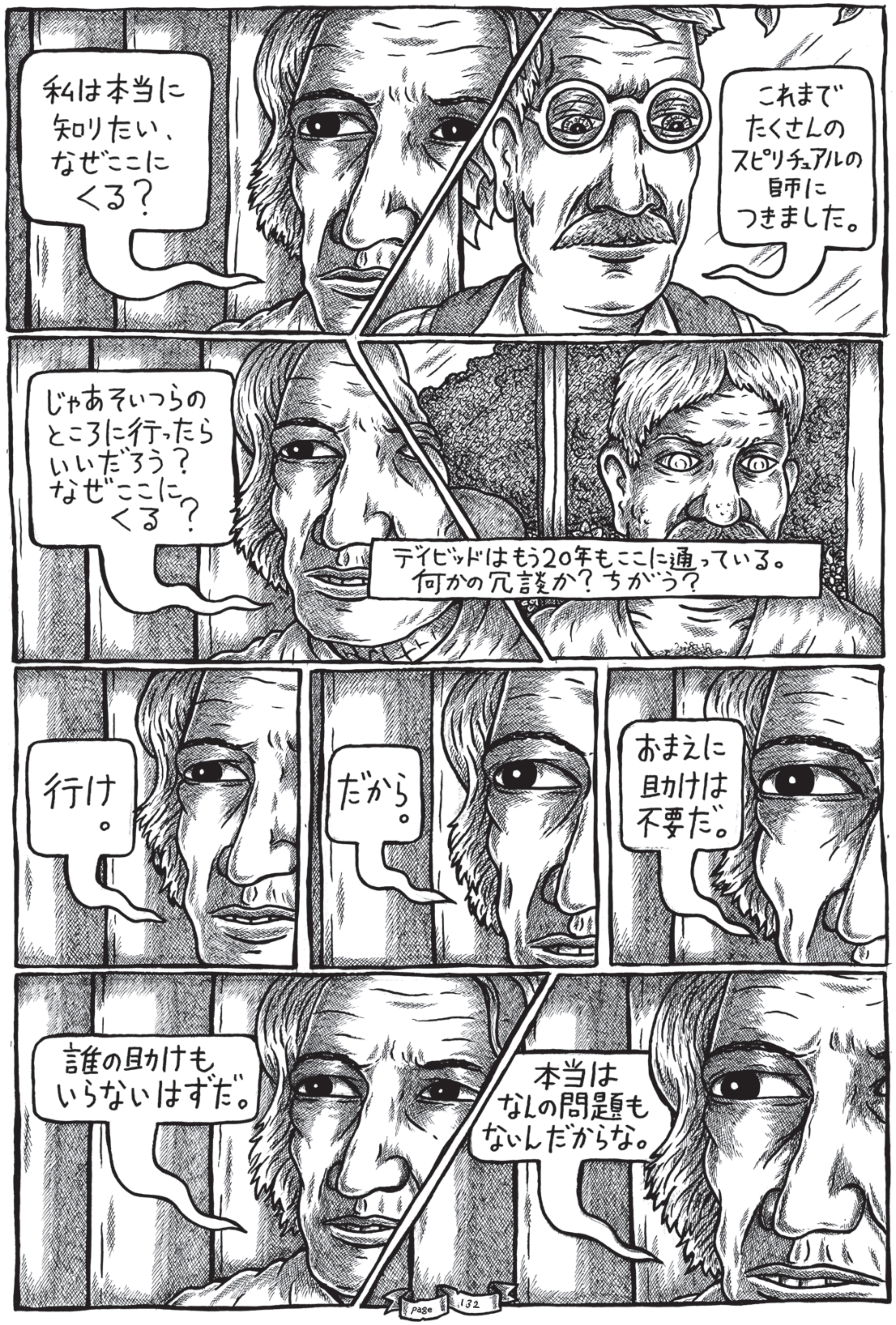
自分について何を知っている？話してみろ。
自分の名前…。
…自分の電話番号、いま住んでいる場所…。
そのとおり。自分の住所、出会った人々、読んだ本、これまで経験したこと、などなど。
そんな自分の情報なら、いくらでも機械的に挙げられるはずだ。
そしてそれがおまえのすべてだ。

なぜそれで満足しない？
なぜそれ以外のものを探そうとする？
自分自身について他に言うことは？
特にないです。
自分が何者かなんて質問はバカげていると思わんか？
知るべきことは他に何もない。おまえの問いはおまえがすでに持っている答えから生まれる。おまえが見たり感じたり、理解したと思っていることもすべてはおまえがもとから持っていた知識の産物だ。


すでに自分で答えを持っていることについて問うのはバカバカしいことだ。
くる日もくる日も何しにくる？
何がほしい？
わかりません…。
もう出ていったほうがいいのかも…。
出ていけ！二度と戻ってくるな。そうしてくれるとありがたい。
私の問題はつまり…。
どんな問題だ？おまえに問題があるようには見えない。


問題がある人間などここにはひとりもいない。
いますぐ立ち去れ。
本気だ。
おまえを助けるつもりはない。
おまえに助けは必要ない。
だから何がほしい？
ほしいのは…。
ほしいものは山ほどあるだろう。
苦しみからは自由になりたいが、欲望にはしがみつきたい。
だが私の言葉は、おまえの人生のすべてをおびやかすものだ。

文字通りすべてだ。
…おまえはそれを望んでいない。
おまえはそれには興味ないはずだ。
いまおかれている現実を直視したくないはずだ。
私が言いたいのはそれだけだ。
page 131

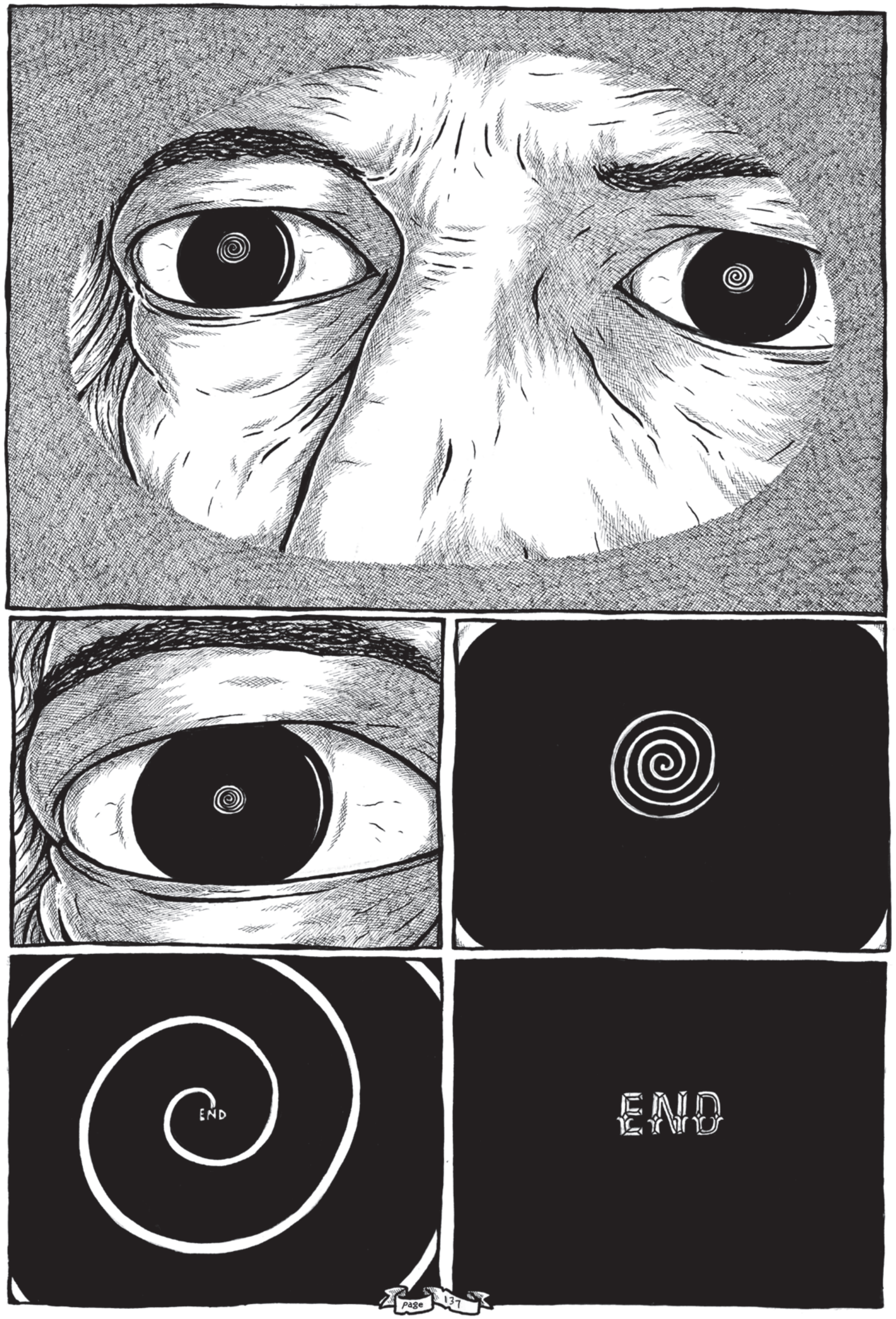

私は本当に知りたい、なぜここにくる？
これまでたくさんのスピリチュアルの師につきました。
じゃあそいつらのところに行ったらいいだろう？なぜここにくる？
デイビッドはもう20年もここに通っている。何かの冗談か？ちがう？
行け。
だから。
おまえに助けは不要だ。
誰の助けもいらないはずだ。
本当はなんの問題もないんだからな。
page 132

火事になったら必死でなんとかしようとするはずだ。そこで火遊びするやつなんていない。
おまえの話している問題はとても薄っぺらい。無意味でバカげたものだ。
おまえはこういう、「自帀との問答」というやつに慣れすぎてしまって、日課みたいになっているのだろう。
気休めだ…。
だが警告する。
この類の直撃をくらったら無事ではすまないぞ。

これはおまえが望んでいるものとはちがう。
喜びを失わずに苦しみだけから自由になることはできない。
一部ではすまない。おまえのすべてにおよぶ。
だから警告している。遊びでやるにはあまりに危険だ。
すべて焼き尽くすぞ。
どうした？何してる？
だから私はがんばって…。
がんばってない。
何をしている？
すわって人の話を聞いているだけだ。

おまえは何も
していない。
おまえは機械みたいだ。
自動的に反応しているだけだ。
おまえは
生きている
人間だ。
だがおまえは
恐怖している。
恐怖こそ
おまえの
神だ。

持っているものを
失う恐怖。
求めているものが
得られない恐怖。
冗談じゃない。
真剣に
言っている。
自分でなんとかしろ。
おまえは誰の助けも
いらない。
おまえに
勇気をやることは
できない。
ひとりで
立つ
勇気はな。


END
END

EPILOGUE

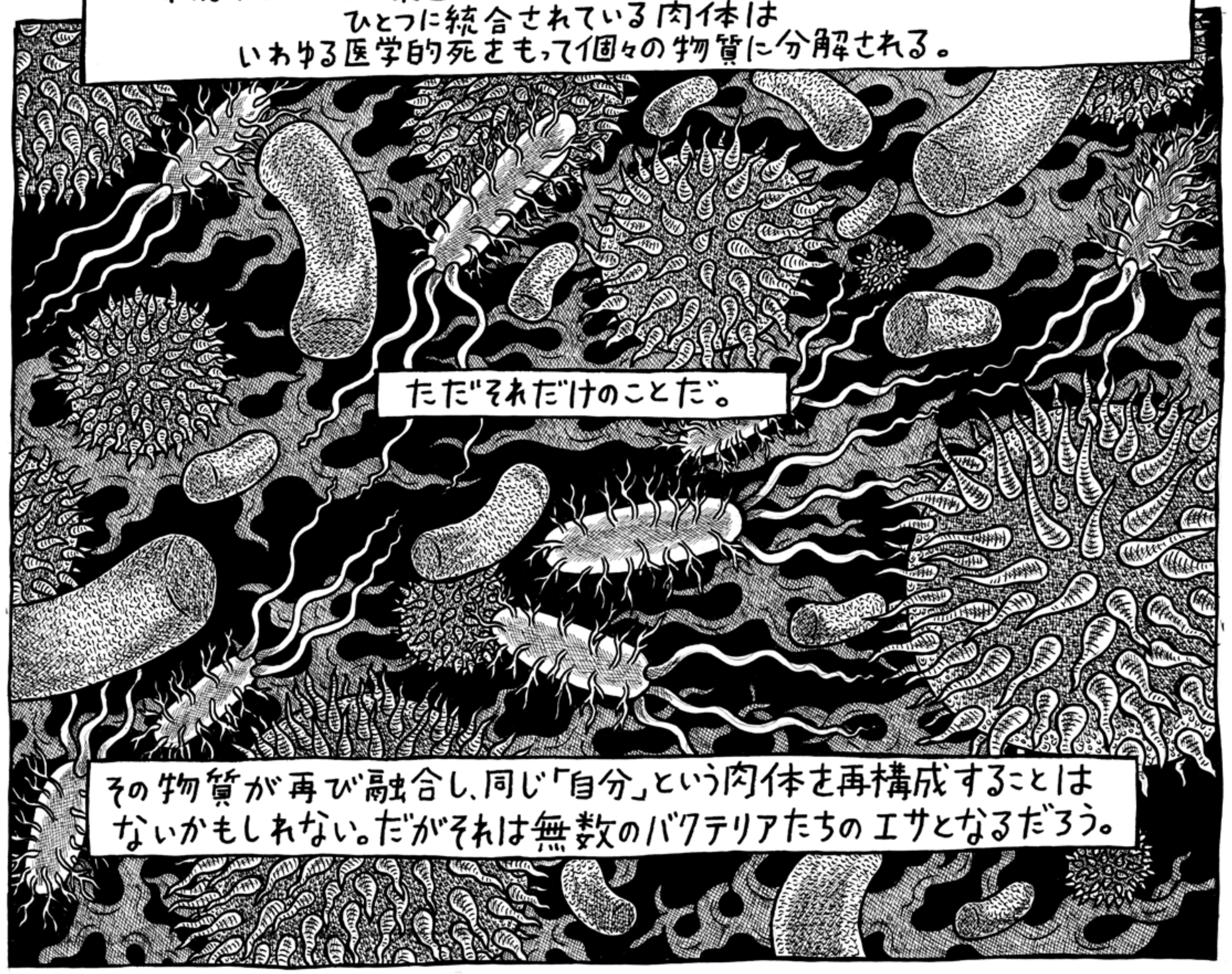
『私はその日その日を、これが人生最後の1日だと思って生きてきた。死んでも遺すものはほとんどない。放浪してばかりでひとつの土地に落ちつくことがなかった。なんでもためらいなく捨ててきた。財産も団体も、感傷も思い出も、貸しも借りも、何もつくりたくなかったからだ。』— U.G.クリシュナムルティの遺言より

U.G.クリシュナムルティは2007年、早朝に洗濯をしている際に転倒し、そのとき負った足のケガがもとで8日後に世を去った。89歳だった。イタリア北部、友人が彼のために建てたアパートに一時的に身を寄せていたときの出来事だった。「象のように死に場所を探している」。そう言いながら彼は、何ヶ月ものあいだカバンひとつで暮らしていたのだった。最晩年はスイスのグスタードの町で一間のアパートに住んでいた。1967年、彼がJ.クリシュナムルティの話を最後に聴いたあの町から谷をひとつ越えた場所である。その後ふたりは道で偶然出会ったことはあったが、ていねいだが形式的なあいさつを交わしただけだった。

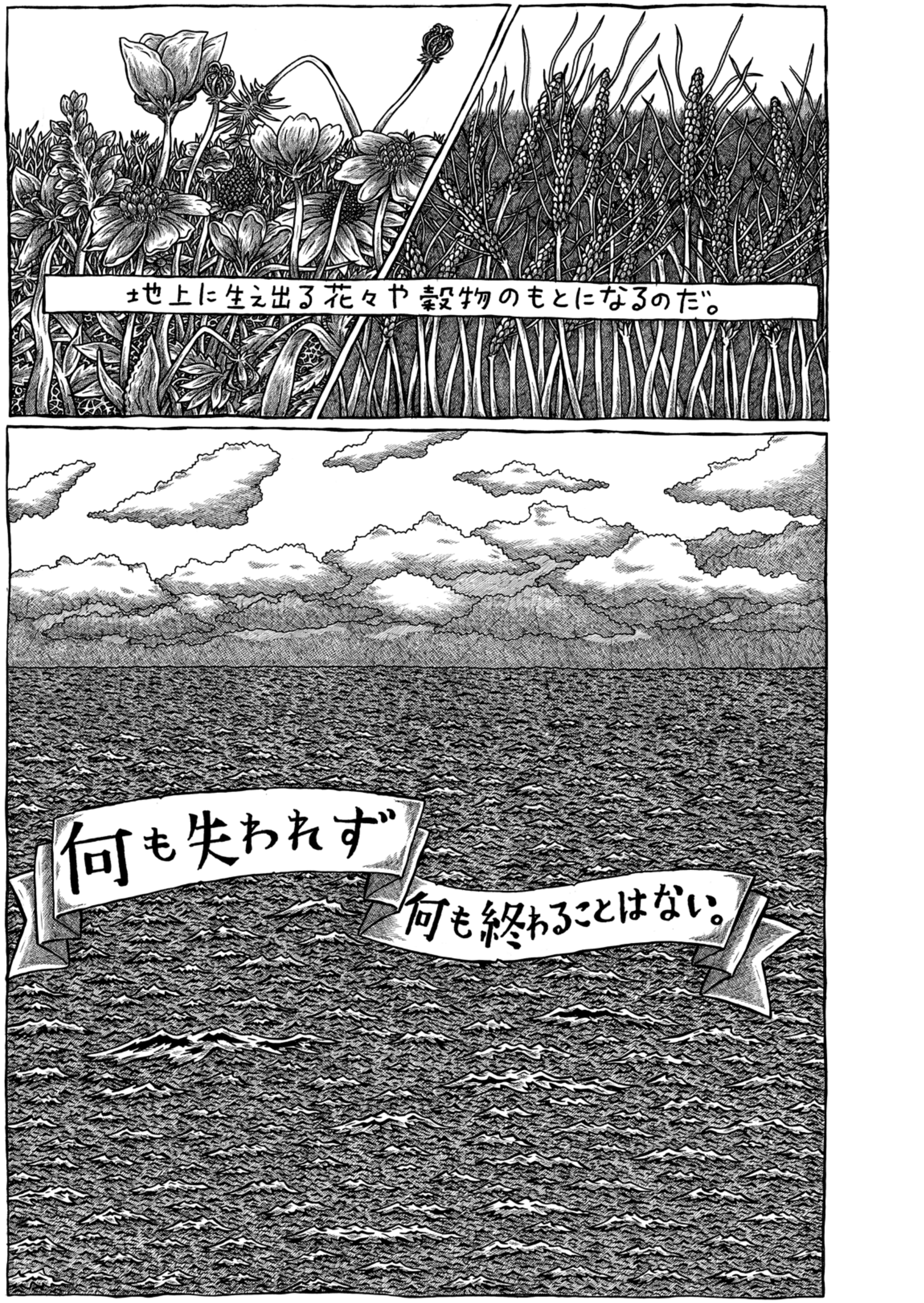
U.G.クリシュナムルティは3人の子どもとたくさんの孫、ひ孫を残した。亡骸はイタリアの遺体安置所に1週間保管されたあと荼毘に付された。遺言にしたがい葬儀はおこなわれず、遺灰は友人によって秘密の場所にまかれた。死の床で彼は何度もこうくりかえした。自分の遺体はどこにでもいるナメクジほどの価値しかなく、そのようにあつかわれるべきだと。

肉体は不死の意味を知っている。

私は不死という言葉をあえて使う。なぜならすべてに終わりはないからだ。
ひとつに統合されている肉体は
いわゆる医学的死をもって個々の物質に分解される。



そう言ったところで
死にゆく者にとってはなんの救いにも慰めにもならないかもしれない。
だが生命のつながりに貢献することはたしかなのだ。
たとえ火葬されても
炭素が
焼かれた亡骸が最後にたどりつくこの物質が


地上に生え出る花々や穀物のもとになるのだ。
何も失われず
何も終わることはない。

THIS BOOK WAS MADE POSSIBLE BY THE GENEROUS HELP OF THE FOLLOWING PEOPLE, WITHOUT YOU, THIS BOOK WOULD NOT HAVE BEEN POSSIBLE, AND WE OFFER OUR DEEPEST GRATITUDE.

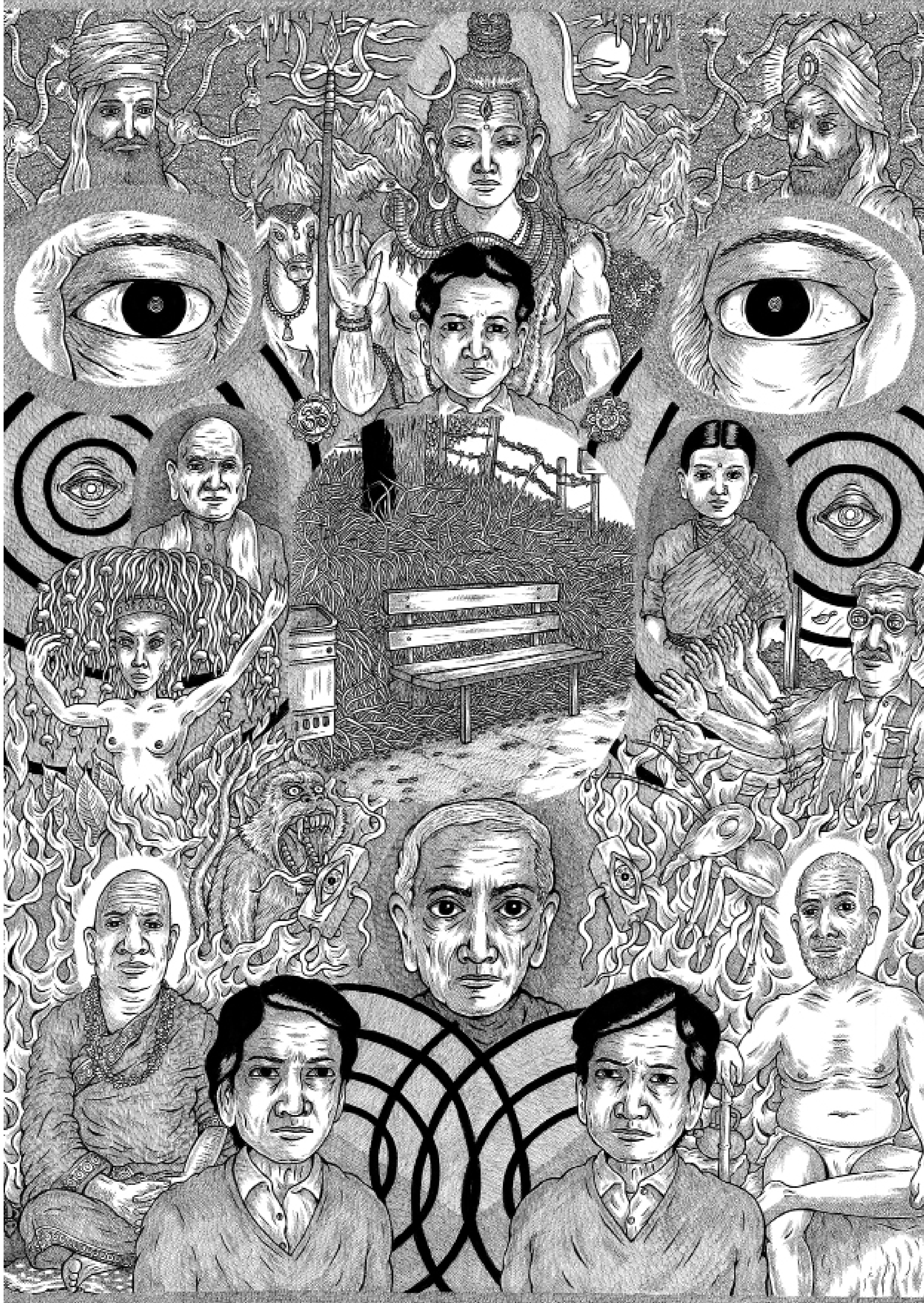
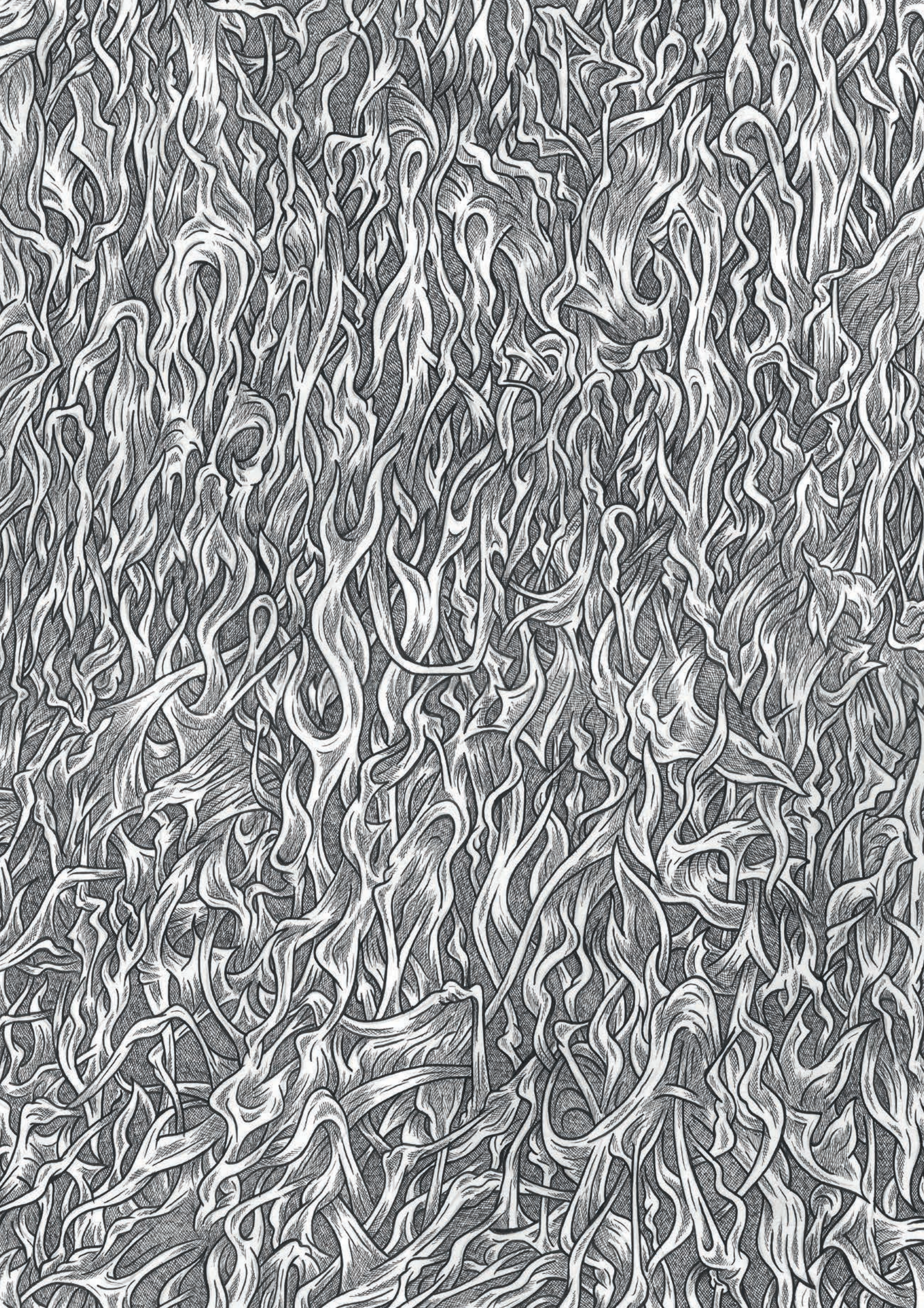
(in no particular order...)

K.CHANDRASEKER & SUGUNA, MUKUNDA RAO AND RENU, DOUGLAS ROSESTONE, LOUIS BRAWLEY, MAHESH BHATT, ROBERT CARR, RAMACHANDRAN RAJ, FRANK NORONHA, NAGESH GOWDA, MAHIMA.J. PATEL, MATTHEW DOUGHERTY, LISA TARANTO, ELLEN CHRYSTAL, PAUL ARMS, SANDHYA JADE KELLER, JANET BROWN, STUART SMITH, YOGI MANGO, WOLFGANG HERMAN, RACHEL AND MARK BARDEN, RAJESHWARA RAO BOORLA, BEN HEATH, EMMA LEEMING, MAO VIET, DANA LANGLOIS, SEBASTIEN MAROT, SULOCHAN PS, ESTHER, ROBIN ALEXANDER STÅL, JULIE THAYER, MARINA TAKEHARA, DARREN SWALLOW, VINCENT FARLEY, RENU MARIA PIA GIACCONE, DAVID SOLOMON, JANAKI.M. VAN DEN BRINK, WANG, JAMES CAREY YATES III, SUNITA PANT BANSAL, DR. RAJ MEHTA, ROLF SELÅS, NARAYANA MOORTY, KATCHMA, HIROMI, SEAN DUFFIELD, PHORN HI, ANDREW GLAZZARD, AJITHA GS, BRYONY LAWSON, KATE SIMPSON, JEREMY FLEUROT, ODD EDGES, SANJAY MYSOREMUTT, TONY BENNETT, STAFFORD LAWRENCE, KIM DEITH, DENNIS WORDEN, MOHANA FIDDLER, DEAN, CATH, LAUREN AND BETH PETTERS, WARREN FISHER, SOKUNTEVY OEUR, SOPHIE MACDONALD, CAMILO BARKER, CHRIS WEE, SAMUEL PELEGRINI, SOKNY AND SARAH ONN, RAGAHAVENDRA SWAMI, SHOBHA RANI, THEANLY CHOV.

& NUPUR KUMAR FARLEY, JIMMY & TRICIA FARLEY, ETHAN KUMAR FARLEY, STEPHEN GREY, MOLLY GREY, CHARLIE GREY, MATT GREY, CHRIS COWELL.

IN LOVING MEMORY... CHRIS BAVA, MARIO VIGGIANO, MICKEY WALDORF, CHATHERINE CHENOWETH, SU MORITZ.

BOOK DESIGN AND RETOUCHING BY DENNIS LINDFORS. EPILOGUE TEXT BY LOUIS BRAWLEY

WHILST GREAT EFFORT HAS BEEN MADE TO BE AS ACCURATE AS POSSIBLE IN THE DETAILS OF THE STORY, THIS IS AN ARTISTIC INTERPRETATION OF THE STORY AND WORDS OF U.G. KRISHNAMURTI. ANY MISTAKES ARE OURS ALONE.

THIS BOOK WAS DRAWN AND WRITTEN IN CAMBODIA. THE ARTIST WOULD LIKE TO THANK JAVA ARTS, PHNOM PENH.